

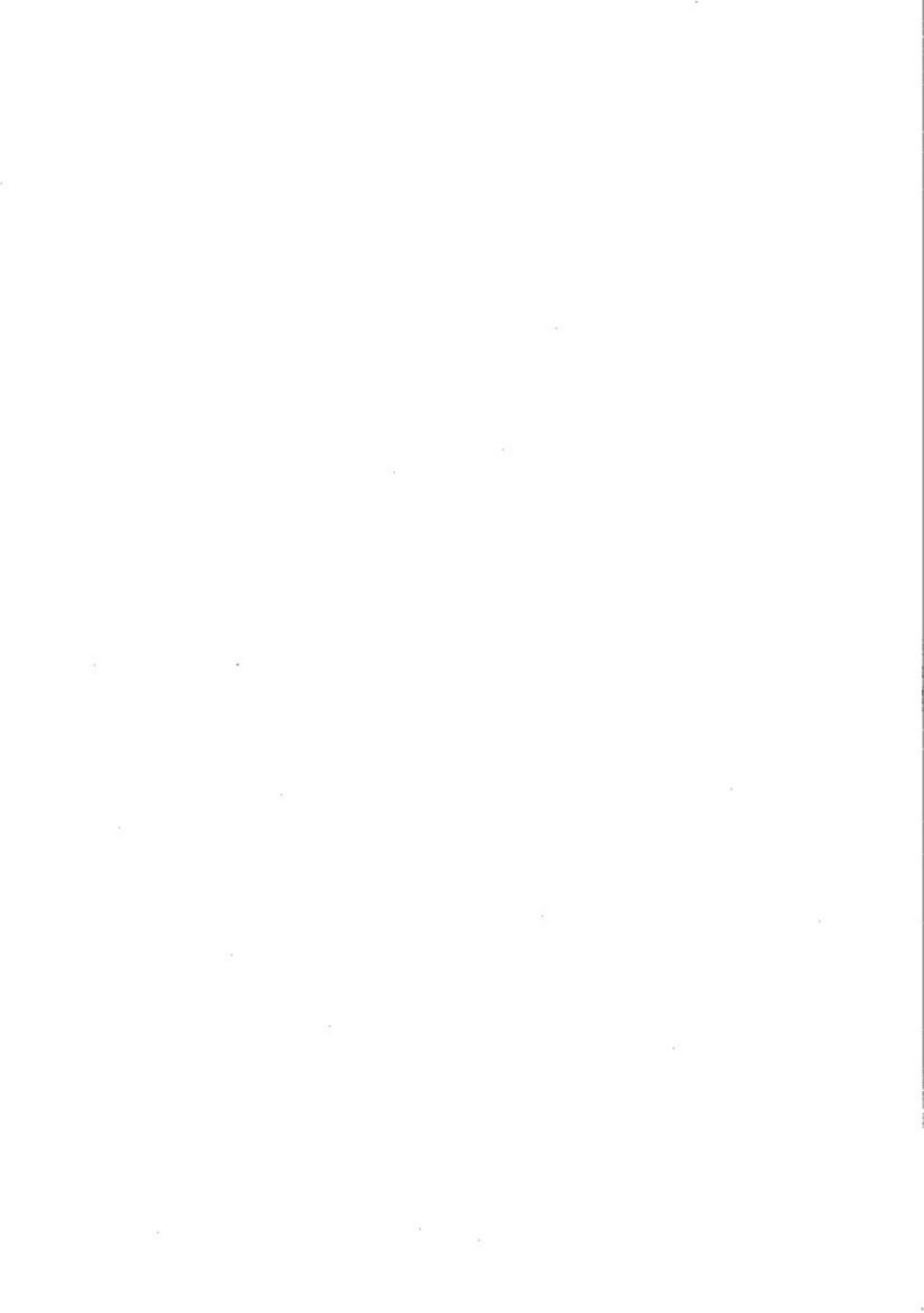
財團
法人 八尾市文化財調査研究会報告95

I 萱 振 遺 跡（第16次調査）

II 西郡廃寺遺跡（第2次調査）

2007年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財團法人 八尾市文化財調査研究会報告95

I 萱 振 遺 跡（第16次調査）

II 西郡廃寺遺跡（第2次調査）

2007年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府八尾市北西部の泉町2丁目に鎮座する西郡天神社付近一帯は、その地名が示すように、古代においては錦部(にしごり)氏を中心とする氏族の居住域であったと推定されています。

錦部氏は、百濟系の渡来系氏族で、綾錦などの織物を織る錦部を管掌とする氏族であったと考えられています。西郡天神社の境内には、錦部氏の氏寺であった西郡廃寺のものと思われる、塔建物に伴う塔心礎石が残されており、往時の繁栄が偲ばれます。

周辺地域で行われた一連の発掘調査では、弥生時代後期から近世に至る遺構・遺物が見つかっており、西郡廃寺が創建される飛鳥時代中葉以前から、この地域に人々が居住していたことがわかっています。

今回、西郡天神社周辺で実施しました、I 萱振遺跡第16次調査とII 西郡廃寺遺跡第2次調査の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。2件の調査地は、平成18年6月の遺跡名変更に伴って、現在では、Iの萱振遺跡が西郡遺跡、IIの西郡廃寺遺跡が西郡廃寺に含まれていますが、2件の調査成果は西郡遺跡・西郡廃寺を考えるうえで多くの示唆に富む内容を持つものと言えます。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 岩崎健

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成8・17年度に実施した発掘調査の報告書を収録したもので、内業整理および本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成18年11月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は以下の通りである。I 原田尚則、II 河村恵理。全体の構成・編集は原田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成18年度版)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準は T.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、I・IIともに磁北である。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財團法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。

井戸 - S E	土坑 - S K	溝 - S D	小穴・柱穴 - S P	落ち込み - S O
土器集積 - S W				
1. 遺構図面の縮尺には、平面全図1/100・1/200・1/400、断面全図1/40・1/50がある。部分図面の縮尺には1/20・1/40がある。
1. 遺物図面の縮尺は、土器・石器・屋瓦・金属類は1/4に統一した。断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・金属類は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品・土製品は斜線を用いた。なお、黒色土器の煤付着範囲については粗い水玉を使用した。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

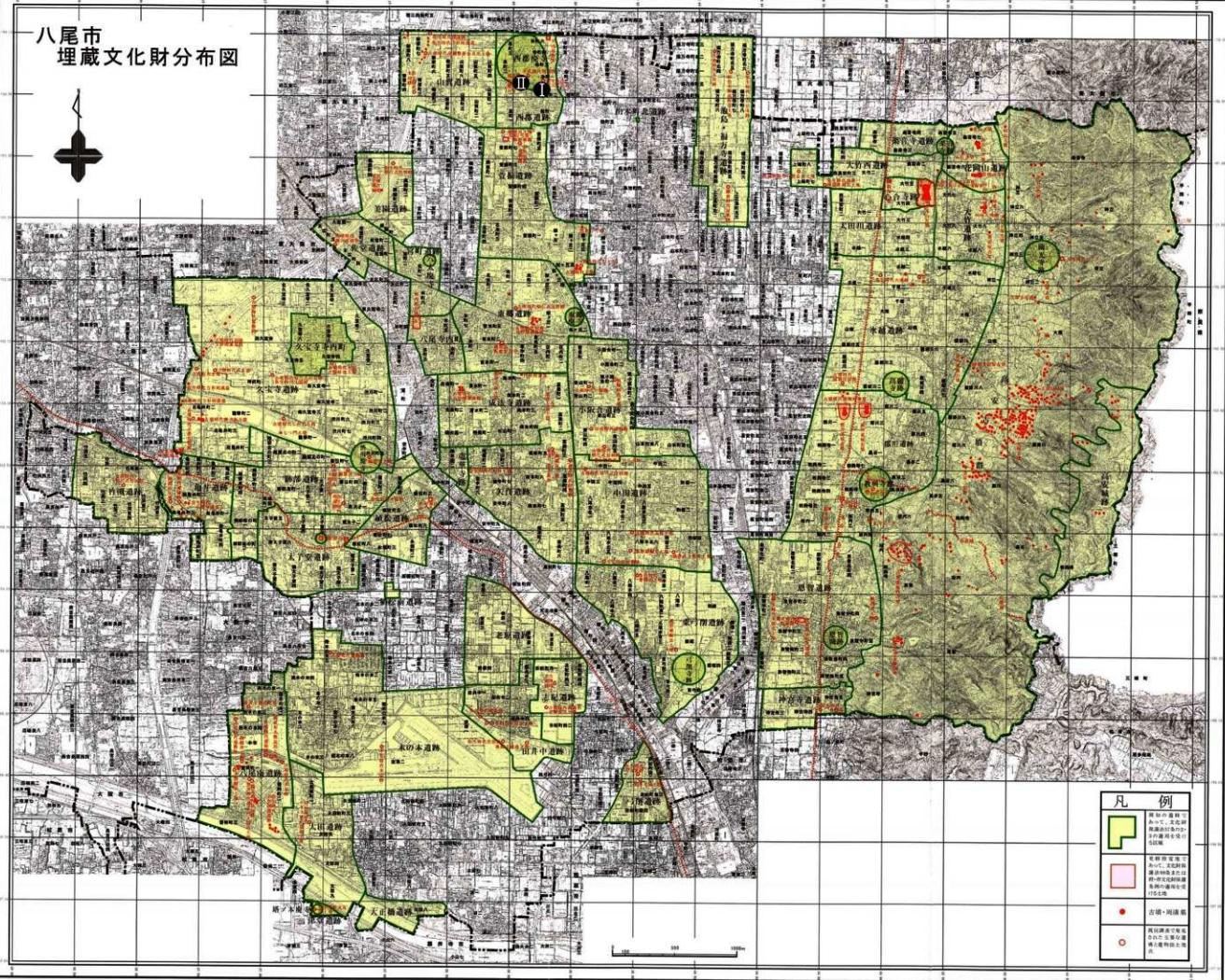
はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 萱振遺跡第16次調査(K F 94-16).....	1
II 西郡庵寺遺跡第2次調査(N K T 2005-2).....	65

八尾市
埋蔵文化財分布図



I 萱振遺跡第16次調查(K F 94-16)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市桂町2丁目33で実施した西都保育所建築に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する壹振遺跡第16次調査(KF94-16)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお、調査地点の遺跡名は平成18年6月26日付けで西部が西都庵寺、東部が西都遺跡に変更されているが、ここでは壹振遺跡として報告する。ただ、本文の記述としては西都庵寺・西都遺跡の遺跡名を使用している。
1. 調査は平成6年5月17日から平成6年8月2日(実働60日)にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約1,180m²を測る。なお、調査においては大見康裕・大西謙太郎・岸田靖子・西田真紀・能勢尚樹・富永勝也(現(財)北海道埋蔵文化財センター)・與儀徳保が参加した。
1. 整理業務は、平成18年11月までに実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測は北原清子・中村百合・村井俊子・山内千恵子、岡面トレースー北原、遺物写真撮影一垣内洋平が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 現地調査の実施においては、以下の方々からの協力を受けた。
八尾市建築部、野口上建(株)
1. 土器の形式・編年で参考とした文献については60頁に提示した。

本　文　目　次

第1章　調査に至る経過	1
第2章　地理・歴史的環境	3
第3章　調査概要	7
第1節　調査の方法と経過	7
第2節　基本層序	8
第3節　検出遺構と出土遺物	8
1) 検出遺構	11
2) 遺構に伴わない出土遺物	58
第4章　まとめ	61

挿 図 目 次

第1図 調査地位図	1
第2図 調査地周辺図	5
第3図 調査区設定図	7
第4図 検出遺構平断面図	9 - 10
第5図 S B 1 平断面図	11
第6図 S B 2 平断面図	12
第7図 S B 3・4 平断面図	13
第8図 S B 5・6 平断面図	14
第9図 S B 7 平断面図	15
第10図 S E 1 平断面図	16
第11図 S E 1 出土遺物実測図	17
第12図 S E 8 平断面図	18
第13図 S E 8 出上遺物実測図	19
第14図 S E 9 出土遺物実測図	19
第15図 S E 9 平断面図	20
第16図 S E 10 平断面図	21
第17図 S E 10 出土遺物実測図	21
第18図 S E 11~13 平断面図	22
第19図 S E 11、S E 13 出土遺物実測図	23
第20図 S E 14、S E 15 出土遺物実測図	23
第21図 S E 14 平断面図	24
第22図 S E 16 平断面図	24
第23図 S E 17 平断面図	25
第24図 S E 17 出土遺物実測図	26
第25図 S K 2 出土遺物実測図	27
第26図 S K 1・2・5・6~9 平断面図	28
第27図 S K 11 出土遺物実測図	29
第28図 S K 10・11・13・14 平断面図	30
第29図 S K 14 出土遺物実測図	31
第30図 S K 15~17 出土遺物実測図	31
第31図 S K 15~18 平断面図	32
第32図 S K 18、S K 22、S K 24 出土遺物実測図	33
第33図 S K 19・21~23 平断面図	34
第34図 S K 26 出土遺物実測図	35
第35図 S K 26・28~32 平断面図	36
第36図 S K 31 出土遺物実測図	37

第37図	S K 33・34・36平断面図	38
第38図	S D 1 出土遺物実測図	39
第39図	S D 1～3 断面図	39
第40図	S D 2 出土遺物実測図	40
第41図	S D 5 断面図	40
第42図	S D 5 出土遺物実測図-1	42
第43図	S D 5 出土遺物実測図-2	43
第44図	S D 8 出土遺物実測図	44
第45図	S D 6・8～11断面図	44
第46図	S D 9 出土遺物実測図	45
第47図	S D 10 出土遺物実測図	45
第48図	S D 17 出土遺物実測図	46
第49図	S D 17・19断面図	47
第50図	S D 18断面図	47
第51図	S D 18出土遺物実測図-1	49
第52図	S D 18出土遺物実測図-2	50
第53図	S D 18出土遺物実測図-3	51
第54図	S P 14、S P 16、S P 25、S P 27、S P 28、S P 150出土遺物実測図	57
第55図	第5層出土遺物実測図	59

写 真 目 次

写真1	天神社近景	2
-----	-------	---

図 版 目 次

図版一	南区全景	図版六	S E 9 検出状況
図版二	北区全景	同上	井戸側検出状況
図版三	S B 1・2 検出状況	図版七	S E 11～13検出状況
	S B 3・4 検出状況	同上	断面
図版四	S B 5 検出状況	図版八	S E 11検出状況
	S B 7 検出状況		S E 13検出状況
図版五	S E 1 検出状況	図版九	S E 14検出状況
	S E 8 検出状況		S E 16検出状況

- | | | | |
|------|--|------|--|
| 図版一〇 | S E 17検出状況
同上：断面 | 図版一九 | S K 11、S K 15、S K 18、S K 26
出土遺物 |
| 図版一一 | S K 5 他検出状況
北区北西部 上坑検出状況 | 図版二〇 | S E 31、S D 2、S D 5 出土遺物 |
| 図版一二 | S K 17検出状況
S K 18検出状況
S K 2 検出状況 | 図版二一 | S D 5 出土遺物 |
| 図版一三 | S K 23検出状況
S K 25検出状況
S K 30検出状況 | 図版二二 | S D 5 出土遺物 |
| 図版一四 | S D 1・2 検出状況
S D 6 検出状況 | 図版二三 | S D 5、S D 9 出土遺物 |
| 図版一五 | S D 18検出状況
調査風景 | 図版二四 | S D 9、S D 10、S D 17 出土遺物 |
| 図版一六 | S E 1、S B 8 出土遺物 | 図版二五 | S D 18 出土遺物 |
| 図版一七 | S E 8、S E 9、S E 10、
S E 11出土遺物 | 図版二六 | S D 18 出土遺物 |
| 図版一八 | S E 14、S E 15、S E 17出土遺物 | 図版二七 | S D 18 出土遺物 |
| | | 図版二八 | S D 18 出土遺物 |
| | | 図版二九 | S D 18 出土遺物 |
| | | 図版三〇 | S D 18 出土遺物 |
| | | 図版三一 | S P 14、S P 16、S P 25、S P 27
S P 28、S P 150 出土遺物 |
| | | 図版三二 | 第 5 層出土遺物 |
| | | 図版三三 | 第 5 層出土遺物 |

第1章 調査に至る経過

西郡庵寺・西郡遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位冲積地上に位置する弥生時代後期から近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市北西部の泉町1～3丁目、桂町1・2丁目、幸町1・3・4・6丁目一帯の東西約500m、南北約800mがその範囲とされている。周辺の遺跡としては、南に萱振遺跡(弥生中期～室町)、北および西には西郡庵寺(飛鳥～鎌倉)と八尾市域から東大阪市域に亘って広がる山賀遺跡(弥生前期～鎌倉)が位置している。西郡庵寺については、錦部(錦織)連が創建した氏寺で、泉町2丁目に鎮座する西郡天神社の境内にある塔心礎等の存在から、同神社付近を中心に存在していたものと考えられている。西郡庵寺の檀越氏族である錦部(錦織)連については、高級織物を織る錦部を管掌する伴造にもとづく氏族で、「新選姓氏録」河内国諸藩に「錦部連、三善宿禰同祖、百濟國連古大王之後也」とあり、百済の第五代肖古王の後裔とされている。姓は首のちに造で、天武天皇十二年(683)には連姓に改姓されている。「正倉院文書」には、「貢 知識優婆塞貢進事」として河内国若江郡錦織郷戸主錦織連の戸主足国、吉足の名があり、奈良時代後半における錦部氏の仏教信奉を示す史料として貴重である。

昭和55年以降、西郡天神社付近での八尾市教育委員会文化財課による小規模な発掘調査を皮切りとして、昭和59年以降には、萱振遺跡・萱振A遺跡・西郡庵寺遺跡と言う遺跡名で八尾市教育委員会文化財課、当調査研究会による発掘調査が昭和59年に第1次調査(KF 84-1)、昭和60年に幸町1丁目76の調査、昭和61年に桂町2丁目の調査、昭和63年度に第6次調査(KF 88-6)、平成元年に第7次調査(KF 88-7)、平成2年に第9次調査(KF 90-9)・萱振(90-287)の調



第1図 調査地位置図

査、平成 5 年に第13次調査(K F 92-13)が実施されてきた。また、昭和58~59年には、西郡天神社の南約450m付近の萱振 7 丁目において、府立八尾北高校の建築工事に伴う発掘調査が大阪府教育委員会により実施され、「萱振1号墳」をはじめとする多大な成果が得られている。これらの調査で、弥生時代後期～室町時代に至る遺構・遺物が検出された他、西郡廃寺に関連した遺物が広範囲にわたって出土しており、創建瓦として原山廃寺式の軒丸瓦(上田氏分類 I B a 型式 - 7 世紀中葉～第III四半期)を使用することや、鎌倉時代前半には廃絶していたことが推定できるようになってきた。このような情勢下、八尾市建設部から西郡天神社の南東約150mにあたる八尾市桂町 2 丁目33番地で西郡保育所を建設する旨の申請書が八尾市教育委員会文化財課に提出された。それを受けて、平成 5 年 8 月に申請地において八尾市教育委員会文化財課による試掘調査が実施された。

その結果、弥生時代後期、古墳時代

初頭～後期、奈良時代、中世、近世に至る居住域に関連した遺構・遺物が数多く検出された。これらの経緯を経て発掘調査に至ったもので、発掘調査の業務は八尾市、八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会の三者間で締結された協定書に基づいて当調査研究会が八尾市から委託を受けて行った。現地調査の期間は平成 6 年 5 月 17 日～8 月 2 日までの 60 日間である。調査面積は約1,100m²を測る。



写真 1 天神社近景(東から)平成17年9月撮影

註記

- 註 1 現、西郡廃寺・西郡遺跡と呼称される天神社周辺(泉町 1 ~ 3 丁目、桂町 1 ~ 2 丁目、幸町 1 ~ 3 ~ 4 ~ 6 丁目)の八尾市埋蔵文化財分布図にみる遺跡名称の変更推移は以下のとおりである。昭和57年3月31日～西郡廃寺、昭和59年4月1日～西郡廃寺・萱振 A 遺跡、昭和63年4月1日～萱振遺跡、平成 8 年 10 月 1 日～西郡廃寺遺跡、平成18年 6 月 26 日～西郡廃寺・西郡遺跡。
- 註 2 原田昌則1987「Ⅰ萱振 A 遺跡(第1次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告13 (財)八尾市文化財調査研究会
- 註 3 米田敏幸1985「幸町 1 丁目76埋蔵文化財調査概要」「八尾市文化財紀要Ⅰ」八尾市教育委員会
- 註 4 米田敏幸1987「萱振遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財報告15 八尾市教育委員会
- 註 5 原田昌則1996「Ⅰ萱振遺跡(第6次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告52」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註 6 原田昌則1996「Ⅱ萱振遺跡(第7次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告52」「(財)八尾市文化財調査研究会
- 註 7 原田昌則1991「Ⅲ萱振遺跡(K F 90- 9)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」「(財)八尾市文化財調査研究会報告32」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註 8 吉田野乃1991「5 萱振遺跡(92-287)の調査」「八尾市内遺跡平成 2 年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告23 八尾市教育委員会
- 註 9 原田昌則1996「Ⅲ萱振遺跡(第13次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告52」「(財)八尾市文化財調査研究会
- 註 10 広瀬雅信他1992「萱振遺跡」「大阪府文化財調査報告書第39報」大阪府教育委員会
- 註 11 上田 誠 1997「古代寺院と集落(中・南河内)」「第1回 摂河泉古代寺院フォーラム 摂河泉の古代寺院とその歴史」泉南市教育委員会・摂河泉古代寺院研究会・摂河泉文庫
- 註 12 清 斎1994「2、萱振遺跡(93-241)の調査」「八尾市内遺跡平成 5 年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告30 平成 5 年度公共事業」八尾市教育委員会

第2章 地理・歴史的環境

西郡廃寺・西郡遺跡は大阪府八尾市北西部に位置する泉町1～3丁目、桂町1・2丁目、幸町1・3・4・6丁目一帯の東西約500m、南北約800mに展開する弥生時代後期～室町時代に至る複合遺跡である。西郡廃寺・西郡遺跡の位置する大阪府八尾市の北西部の地勢は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川に面された河内平野のほぼ中央部にあたる。河内平野は、縄文海進以後の海平面の昇降による侵食作用と、平野部に流下する旧大和川水系および淀川水系の河川の沖積作用により形成された沖積平野である。西郡廃寺・西郡遺跡は、旧大和川水系の主流であった長瀬川と卡出川に挟まれて南北方向にデルタ状に展開する低位沖積地上の海拔6.0～5.0mに位置している。この二大河川に挟まれた地域は、農耕社会を構築する基盤的因素である肥沃な土壤と豊富な水量を背景として水稻耕作の初期段階から数多くの集落が営まれており、考古学的資料の蓄積が豊富な地域として理解されている。同一沖積地上には、当遺跡の南に萱振遺跡(弥生前期～室町)、園庭遺跡(弥生前期～鎌倉)、佐草遺跡(弥生中期～室町)、宮町遺跡(古墳前期～室町)、東郷遺跡(弥生中期～鎌倉)、成法寺遺跡(弥生中期～室町)、小阪寺遺跡(弥生中期～室町)、矢作遺跡(弥生後期～室町)、中田遺跡(弥生前期～室町)、東弓削遺跡(弥生中期～鎌倉)、西に山賀遺跡(弥生前期～鎌倉)、さらに長瀬川を隔てて南西には久宝寺遺跡(縄文晚期～室町)、玉串川を隔てた東には池島・福万寺遺跡(縄文後期～近世)が位置している。

ここでは、西郡廃寺・西郡遺跡および萱振遺跡北部・山賀遺跡東部で実施された調査成果を中心に時期毎に概観してみる。

縄文時代のものとしては、平面的な広がりとしては捉えられなかったか③で検出された弥生時代前期の自然河川から縄文時代晩期の土器片が數点検出されており、周辺にこの時期の集落が想定される。

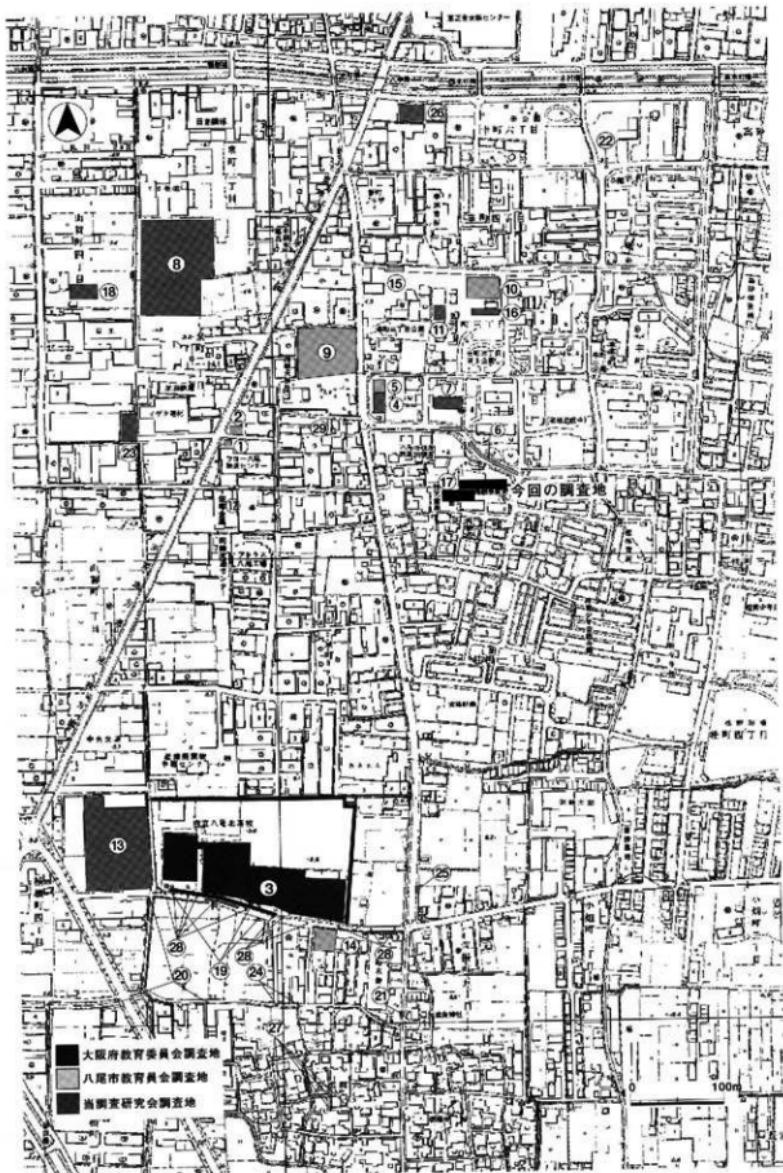
弥生時代前期としては、西郡遺跡に隣接する山賀遺跡⑤で前期新段階の遺構・遺物が検出されており、これらの集落が西郡遺跡の北部にまでおよんでいた可能性があるほか、③・⑩で検出された河川堆積土層中からもこの時期の遺物が少量出土している。弥生時代中期としては、⑧で中期前半の居住域、③で水田が検出されており、この付近を中心とする当該期の集落が想定される。弥生時代後期においては、④・⑥・⑦・⑨・⑪を中心とした西郡遺跡内と③を中心とした萱振遺跡北部において集落が形成されている。西郡遺跡内の当該期の居住域は⑦で検出された2棟の竪穴住居を中心とするもので、現時点では東西約200m、南北約100mが居住域と推定される。萱振遺跡北部の③においては、17棟の掘立柱建物が検出されているほか、多量の弥生土器とともに、体部外面に格子タタキを持つ朝鮮半島系土器が出土しており、三韓土器の模倣ならびに渡来韓人の存在が想定される。

古墳時代初頭(庄内式刷)～前期(布留式期)の集落分布は、弥生時代後期の集落周辺で営まれているが、前代からの居住域とは重複するものはない。萱振遺跡北部の③・⑩では古墳時代初頭前半～古墳時代前期後半(庄内式古柏～布留式新柏)において、小範囲で集落位置を変えながらも連続した集落が形成されている。西郡遺跡の⑤・⑥・⑦・⑧・⑪では古墳時代初頭後半～古墳時代前期前半(庄内式新柏～布留式古柏)の集落が検出されているおり、その範囲は東西約400m、南北約250mに及ぶ。当該期の墓域としては、萱振遺跡北部の③で古墳時代初頭前半～古墳時代前期前半(庄内式新柏～布留式古柏)の方形周溝墓4基が検出されているほか、前期後半(布留式新柏)には、③の方形周溝群の東に隣接する位置で萱振1号墳が築造されている。萱振1号墳は、一辺約27m、周濠幅約5mを測る方墳である。墳丘は2段築

成で、1段目のテラスには踏付円筒埴輪・朝顔形埴輪が樹立されているほか、埴頂部からは輦形・盾形・甲冑形・蓋形・家形等の形象埴輪類が出土している。なかでも、輦形埴輪については高さ1.62m、上部最大幅1.15mを測る最大級のもので、表面には装飾突起と精緻な直弧文・鍵手文のほか、赤色顔料による彩色が施されている。平野部において検出された当該期の古墳の中で、豊富な埴輪の保有や埴形が方墳である点で美園古墳と共に通るもので、前期後半段階での平野部における地域首長の動向を知る上で貴重である。また、特筆すべき遺物としては、⑦から特殊器台(富山型)片が出土しており、古墳から大和への特殊器台の移動の一端が推測される。古墳時代中期においては、萱振遺跡の③・⑩、西郡遺跡の④、古墳時代後期では、萱振遺跡の③、西郡遺跡の⑨・⑩・⑪で遺構・遺物が検出されている。

一方、遺跡に隣接する西郡庵寺については、百済系氏族の錦織氏を超越とする氏寺で、泉町2丁目に鎮座する「天神社」の北方が寺域と推定されている。現在、「天神社」の境内に西郡庵寺の塔心柱礎石が置かれているが、『八尾市史』によれば現地より北約100m地点にあったとされており、これが寺域を推定される根拠となっている。伽藍に隣接した遺構は検出されていないが、周辺の調査では、①・③・④・⑧・⑪・⑫で西郡庵寺の屋瓦が出土しており、これらから飛鳥時代中期の創建であることや、14世紀までには廃絶していたこと等が判明している。奈良時代の集落は萱振遺跡の③、西郡遺跡の④・⑧・⑪・⑫を中心検出されている。萱振遺跡の③ではD区を中心に、奈良時代中期(平城宮Ⅲ)を中心とする掘立柱建物10棟が検出されている。掘立柱建物は主軸をほぼ北に振るもので、桁行3間×梁間3間建物が7棟、桁行2間×梁間1間建物が1棟と倉庫と推定される推定桁行5間×梁間2間の建物1棟が検出されている。出土した遺物の中には、墨書き土器、墨書き人面土器、転用硯、銅製帶金具(丸柄)が含まれており、官衙的性格を持つ集落であったことが想定されている。

平安時代の集落は萱振遺跡の③で検出された前期の井戸・火葬墓を除けば、後期に成立するものが多い。後期の遺構は萱振遺跡の③、西郡遺跡の④・⑥・⑦・⑪で検出されている。なお、萱振遺跡の③の南東約150m地点には、式内社加津良神社が鎮座しており、当該期の集落の中心を成したものと推定される。続く鎌倉時代の集落は前代の集落が踏襲されており、萱振遺跡の③、西郡遺跡の④・⑦・⑪で検出されている。西郡遺跡内の集落については、平安時代後期から鎌倉時代末期にかけて集落が継続して営まれていることが指摘できる。これらの集落については、「天神社」の南東付近が河内街道と十三歳道の分岐点になっている関係であることから街道に沿って成立した集落と考えられる。室町時代に比定されるものは萱振遺跡の③、西郡遺跡の⑪で検出されているが、前代に比して集落規模が縮小している。特に14世紀以降その傾向が顕著である。このことは、14世紀前半以降の「南北朝の動乱」、さらには15世紀中葉以降においては両山山氏の争いにより絶えず戦乱の渦中にあったことに符合した結果と考えられている。なお、萱振遺跡の③調査地の南部一帯には萱振城が存在していた。萱振城については、南北朝の延元三年(1338)に南朝方の高木遠盛が北朝方の萱振城を攻め焼き払ったことが記されており、既にこの時期には城構えがあったことが知られている。したがって、このような時勢のなかで、防御を目的とした環濠集落化を押し進めていく過程で、周辺の集落も集約されざるを得ない状況であったと推定される。なお、萱振遺跡の③で検出された室町時代初頭の瓦積み井戸に使用された屋瓦類は、西郡庵寺の屋瓦が転用されたもので、西郡庵寺の廃絶時期を知るうえで貴重である。室町期の『康富記』には隼人の移配地として、河内国若江郡萱振保が記述されており、古代より畿内在住の隼人との関係が推定される。江戸時代の集落は、西郡遺跡の⑪で江戸時代中期の屋敷地を区画する溝が検出されており、この付近一帯の集落は室町時代に確立した集落を踏襲する形で近世集落へと推移したものと推定される。



第2図 調査地周辺図(S=1/5000)

第1表 周辺の発掘調査一覧表

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 献
①	西都庵寺	市教委	泉町2-43	S55/2/18~2/26	米田謙平他1983「八尾市埋蔵文化財免許届出報告書1980・1981年度」八尾市教育委員会(監修に記載)
②	西都庵寺	"	泉町2-16-1	S55/3/16~3/18	米田謙平他1983「八尾市埋蔵文化財免許届出報告書1980・1981年度」八尾市教育委員会(監修に記載)
③	萱振	府教委	萱振町7	S58/6/17~S62/7/16	庄司義信他1992「萱振遺跡」「大阪府文化財調査報告書第39報」八尾市教育委員会
④	萱振(K F 84-1)	八文研	幸町1-76	S59/11/13~12/24	原田昌則1987「『豆原山遺跡』(第1次調査)」八尾市埋蔵文化財調査報告書第1(財)八尾市文化財調査研究会
⑤	萱振	市教委	幸町1-76	S60/3/6~3/7	米田謙平他1984「幸町1丁目76番地跡」「八尾市内遺跡と1年度実施予定件目」八尾市文化財報告15 八尾市教育委員会
⑥	萱振	"	桂町2	S61/9/2~10/22	米田謙平1987「電線遮断施設調査報告」八尾市内遺跡と1年度実施予定件目」八尾市文化財報告15 八尾市教育委員会
⑦	萱振(K F 88-6)	八文研	幸町1-60-1	S63/6/22~8/11	原田昌則1989「『萱振遺跡』(第6次調査)」(財)八尾市文化財調査報告書第22(財)八尾市文化財調査研究会
⑧	萱振(K F 88-7)	"	泉町2-56他	H1/2/1~3/29	原田昌則1991「『萱振遺跡』(第7次調査)」(財)八尾市文化財調査報告書第23(財)八尾市文化財調査研究会
⑨	西都庵寺(90-005)	市教委	泉町2-1~7	H2/6/18	吉田和夫1991「西都庵寺(90-005)の調査」八尾市内遺跡造成2年度実施予定件目」八尾市文化財調査報告書22 八尾市教育委員会
⑩	萱振(90-287)	"	幸町3-83	H2/8/29	吉田和夫1991「『萱振遺跡』(90-287)の調査」八尾市内遺跡造成2年度実施予定件目」八尾市文化財調査報告書23 八尾市教育委員会
⑪	萱振(K F 90-9)	八文研	幸町3-83	H2/11/15~11/15	原田昌則1991「『萱振遺跡』(K F 90-9)」八尾市埋蔵文化財免許届出報告1(財)八尾市文化財調査報告書24(財)八尾市文化財調査研究会
⑫	萱振(K F 90-10)	"	泉町1-23他	H2/11/10~11/30	高森千秋他1991「『萱振遺跡』(K F 90-10)」八尾市埋蔵文化財免許届出報告1(財)八尾市文化財調査報告書25(財)八尾市文化財調査研究会
⑬	萱振(K F 91-11)	"	楠根町4	H3/8/26~9/25	高森千秋1992「『萱振遺跡』(1次調査)」八尾市埋蔵文化財免許届出報告1(財)八尾市文化財調査報告書26(財)八尾市文化財調査研究会
⑭	萱振(90-006)	市教委	萱振7-83-1他	H4/4/6~4/9	原田昌則1992「『萱振遺跡』(90-006)の調査」八尾市内遺跡造成4年度実施予定件目」八尾市文化財報告27 八尾市教育委員会
⑮	西都庵寺(92-414)	"	幸町3・4	H5/1/22	原田昌則1994「『西都庵寺』(92-414)の調査」八尾市内遺跡造成5年度実施予定件目」八尾市文化財報告30 八尾市教育委員会
⑯	萱振(K F 92-139)	八文研	幸町3-80他	H5/2/1~3/11	原田昌則1996「『萱振遺跡』(第1次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G2(財)八尾市文化財調査研究会
⑰	萱振(K F 94-16)	"	桂町2-33	H6/5/17~8/2	本書掲載
⑱	山賀(YMG 94-3)	"	山賀4-34-1	H7/1/9~2/10	原田昌則2004「1山賀城跡(第5次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G1(財)八尾市文化財調査研究会
⑲	萱振(K F 94-17)	"	萱振町7	H7/3/13~3/31	成海佳子1996「『萱振遺跡』(第7次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G3(財)八尾市文化財調査研究会
⑳	萱振(K F 95-18)	"	萱振町7	H7/8/3~11/9	原田昌則1996「『萱振遺跡』第8次調査(K F 95-18)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G3(財)八尾市文化財調査研究会
㉑	萱振(K F 95-19)	"	萱振町7	H7/9/28~H8/2/23	内村公介1996「VI 萱振遺跡 第19次 調査(K F 95-19)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G3(財)八尾市文化財調査研究会
㉒	萱振(K F 95-20)	"	幸町5・6	H8/1/16~1/26	原田昌則1996「Ⅴ萱振遺跡 第30次 調査(K F 95-20)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G3(財)八尾市文化財調査研究会
㉓	山賀(YMG 96-4)	"	山賀町4-58-3	H8/7/1~7/26	原田昌則1998「Y X山賀遺跡 第4次調査(Y MG 96-4)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G4(財)八尾市文化財調査研究会
㉔	萱振(K F 96-21)	"	萱振町7	H8/7/19~9/2	原田昌則1998「Y X山賀遺跡 第5次調査(K F 96-21)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G5(財)八尾市文化財調査研究会
㉕	萱振(K F 99-22)	"	萱振町5	H11/6/14~6/16	成海佳子2001「Ⅳ 萱振遺跡 第22次調査(K F 99-22)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G7(財)八尾市文化財調査研究会
㉖	西都庵寺遺跡(N K T 99-1)	"	幸町5-31他	H11/10/26~11/5	高森千秋2003「Ⅲ西都庵寺遺跡第1次調査(K T 99-1)」(財)八尾市埋蔵文化財センター報告1(財)八尾市教育委員会(監修)八尾市文化財調査研究会
㉗	萱振(K F 02-23)	"	萱振町6	H14/6/3~7/5	内村公助・原田昌則2003「X 萱振遺跡(第23次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G7(財)八尾市文化財調査研究会
㉘	萱振(K F 03-24)	"	萱振町7	H16/2/17~3/15	原田昌則2004「VI 萱振遺跡 第24次調査(K F 2003-24)」(財)八尾市文化財調査研究会報告G8(財)八尾市文化財調査研究会
㉙	西都庵寺遺跡(N K T 2005-2)	"	泉町2	H17/9/20~11/21	本書掲載

凡例 大阪府教育委員会=府教委、八尾市教育委員会=市教委、(財)八尾市文化財調査研究会=八文研

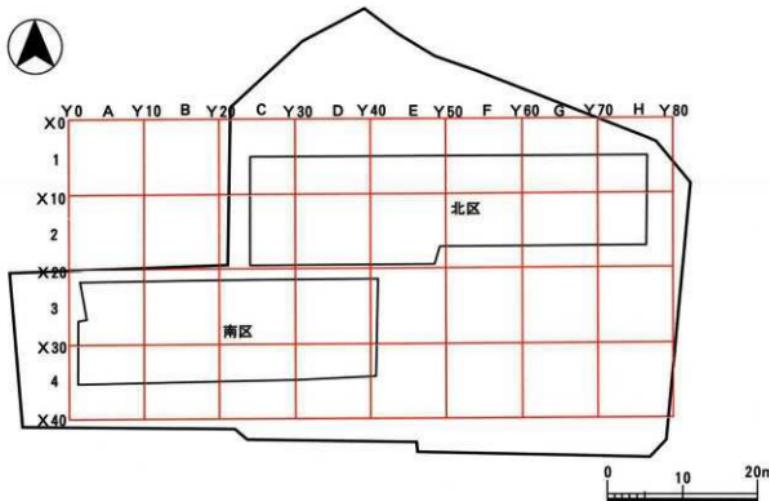
第3章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、西郡保育所建設工事に伴うもので、調査面積は約1,180m²を測る。調査対象建物の形状から、中央部を境に調査地を南北に二分する方法をとり、南側の調査区を南区、北側の調査区を北区と呼称した。規模は南区が東西39m、南北13m、北区が東西52m、南北12~14mを測る。調査区の地区割については、調査区の北西隅のX 0・Y 0地点を基点として東西80m、南北40mにわたって設定した。一区画の単位は10m四方で、東西方向はアルファベット(西からA~H)、南北方向は算用数字(北から1~4)で示し、地区的表示は1 A~4 H地区と呼称した。掘削に際しては、表土下1.4m前後までを機械掘削した後、以下0.3mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。調査は南区から開始した。

その結果、両区共に、表土下1.4~1.5m(T.P.+3.9~3.8m)付近に存在する第6層上面で、掘立柱建物7棟(S B 1~S B 7)、井戸17基(S E 1~S E 17)、土坑36基(S K 1~S K 36)、溝19条(S D 1~S D 19)、小穴183個(S P 1~S P 183)を検出した。検出された遺構の帰属時期は、古墳時代初頭後半~前期後半(庄内式新相~布留式新相)、古墳時代後期、奈良時代、平安時代後期~鎌倉時代末期、室町時代、江戸時代に区別される。

出土遺物は、遺構内および包含層である第4・5層から、古墳時代初頭前半(庄内式古相)~江戸時代後期に比定される土器類、屋瓦、石製品、鉄製品等がコンテナ箱に50箱程度出土している。



第3図 調査区設定図(S=1/600)

第2節 基本層序

南区の第7層以下で確認した、シルト～粗粒砂を主体とする水成層の堆積する部分を除けば、調査地全体で比較的安定した土層堆積が確認された。ここでは、普遍的に存在した10層(第0～8層)を基本層序とした。

第0層：盛上。層厚0.4～0.8m。上面の標高はT.P.+5.5～5.3mを測る。

第1層：旧耕土。7.5Y5/1灰色極細粒砂。層厚0.1～0.2m。

第2層：7.5Y6/3オリーブ黄色極細粒砂。層厚0.1～0.2m。上面が近世遺構の構築面である。

第3層：7.5Y6/1灰色極細粒砂。層厚0.1～0.3m。細礫を少量含んでいる。

第4層：10YR6/1褐灰色極細粒砂。層厚0.1～0.3m。室町時代以降の遺物を極少量含む。

第5a層：10YR4/1褐灰色極細粒砂。層厚は0.4m前後を測るが、北区の北部付近では、0.1m程度が遺存するのみである。古墳時代初頭から室町時代の遺物を多量に含む。南区で検出した室町時代後期に比定されSD2は同層上面が構築面である。

第5b層：N6/0灰色極細粒砂。層厚0.1～0.2m。北区の北部のみで検出。第5a層の上部が削平された後に形成された上層で、水田耕作土の可能性が考えられる。

第6層：5Y7/3浅黄色シルト。層厚0.1～0.3m。古墳時代初頭後半(庄内式新相)～鎌倉時代後期の遺構検出面。

第7層：10GY7/1明緑灰色シルト。層厚0.1～0.4m。無遺物層。

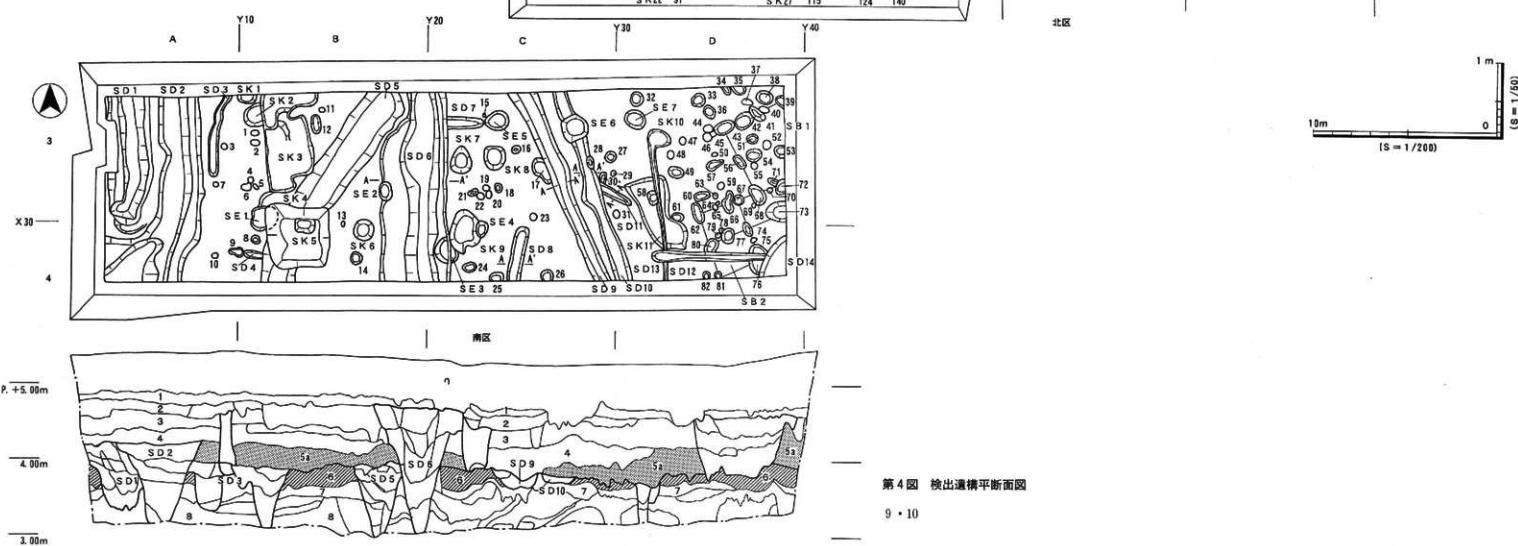
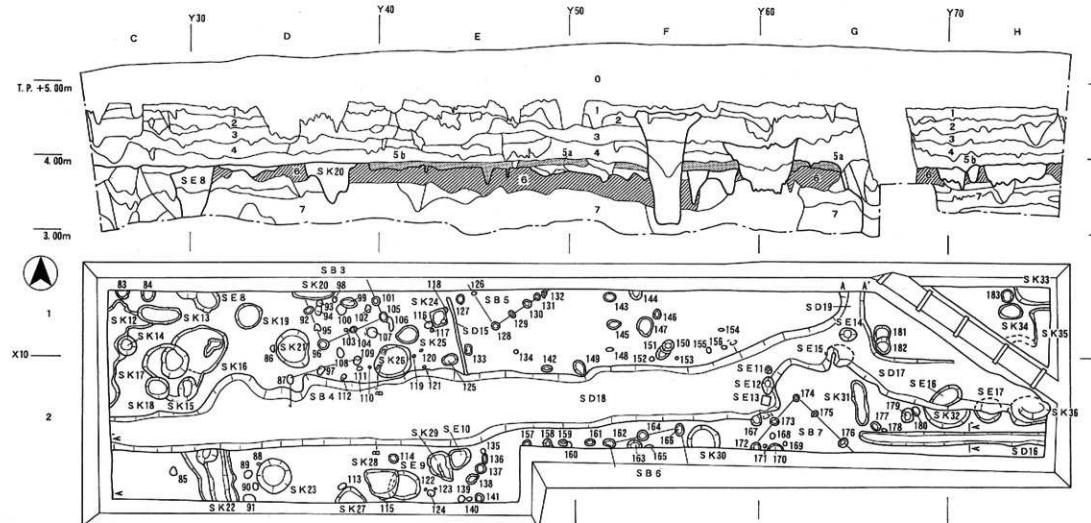
第8層：7.5Y5/1灰色粘土。層厚0.3m以上。南区西部のみに存在。

第3節 検出遺構と出土遺物

南区は、調査地の南部に設定した調査区で、規模は東西39m、南北13mで、調査面積は約507m²を測る。調査の結果、現地表下1.4m前後(T.P.-3.9m前後)付近に存在する第6層上面で、掘立柱建物2棟(SB1・SB2)、井戸7基(SE1～SE7)、土坑11基(SK1～SK11)、溝14条(SD1～SD14)、小穴82個(SP1～SP82)を検出した。

北区は南区の北側に設定した調査区で、南区と同様、東西方向に長い調査区で、規模は東西52m、南北12～14mで、調査面積は約674m²を測る。なお、北区の西部と南区の東部が約17mにわたって重複する関係にある。南区と同様、現地表下1.5m前後(T.P.+3.8～3.9m)付近に存在する第6層上面を調査対象とした。その結果、掘立柱建物5棟(SB3～SB7)、井戸10基(SE8～SE17)、土坑25基(SK12～SK36)、溝5条(SD15～SD19)、小穴101個(SP83～SP183)を検出した。

両調査区で確認された濃密な包含層を形成する第5層の存在が示すように、多時期にわたる数多くの遺構・遺物が検出された。検出された遺構の帰属時期は、概ね古墳時代初頭後半～前期後半(庄内式新相～布留式新相)、古墳時代後期、奈良時代、平安時代後期～鎌倉時代末期、室町時代、江戸時代に区別される。なお、遺構については全て第6層上面で検出したが、近世時期の遺構は第2層上面、室町時代の遺構は第5a層上面が本来の遺構構築面と考えられる。検出した遺構の性格としては、各時期を通じて居住域に関連した遺構群の広がりとして捉えられるが、各遺構の重複が顕著であるため、本米の遺構配置や帰属時期が不明瞭なものが少なくない。



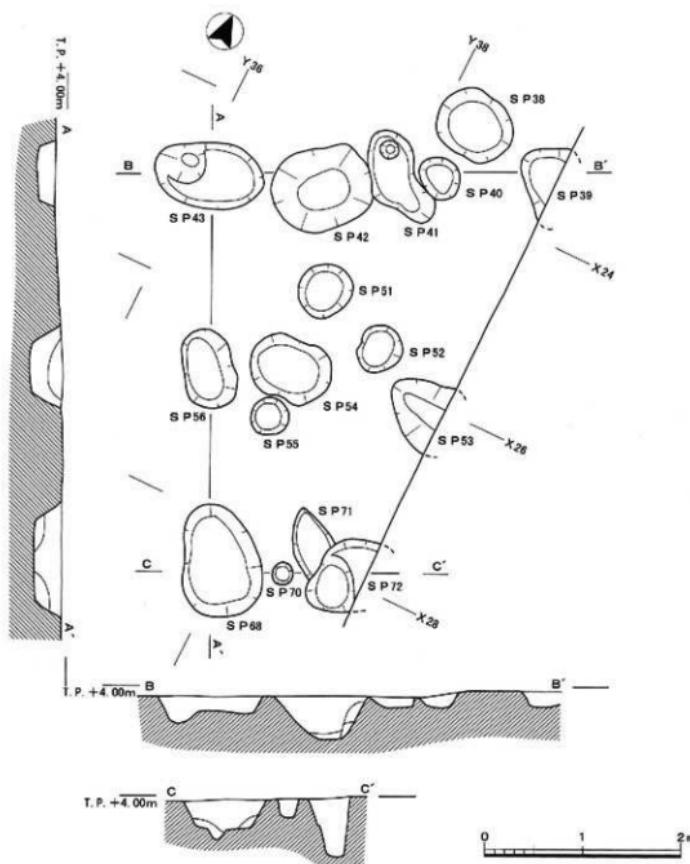
第4図 検出遺構平面図

1) 検出遺構

掘立柱建物(SB)

SB 1(第5図、図版三)

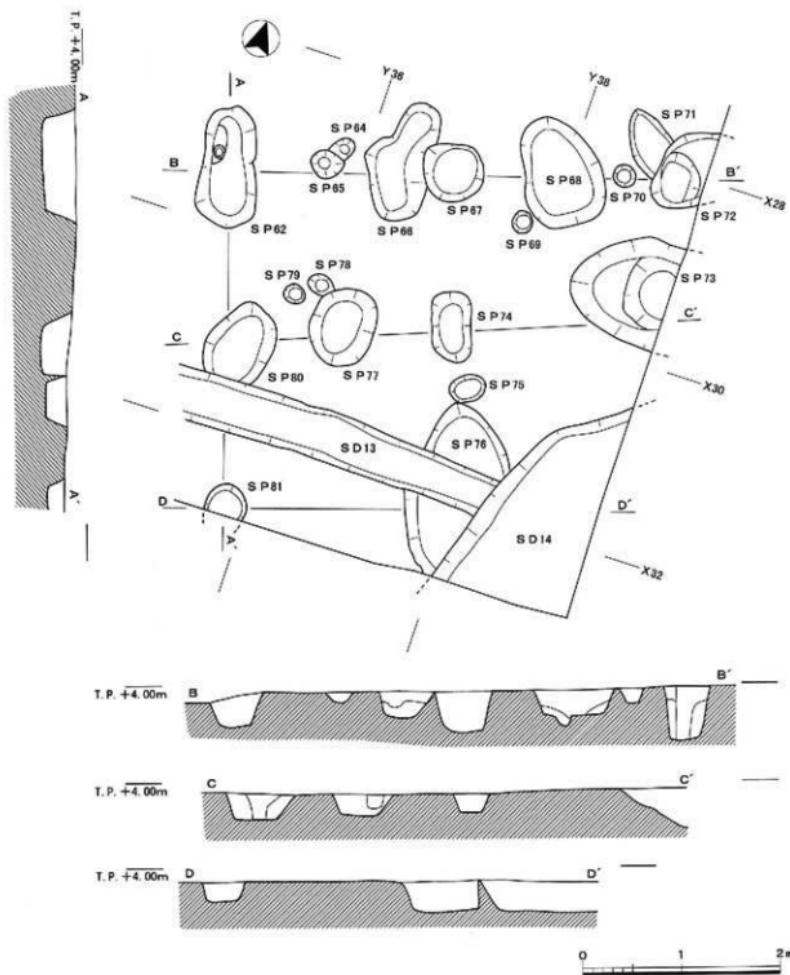
南区東部の3D地区で検出した。東部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出された柱穴はSP39・41・43・56・68の5個である。主軸をN26°Wを持つ。検出部分では、桁行2間×梁間2間が確認できる。建物を構成する柱穴の形状は楕円形で、規模は0.32~1.1m、深さ0.13~0.32mを測る。柱間は桁行2.0m前後、梁間1.8m前後を測る。時期的には西に近接し、主軸方向が同じである古墳時代後期末のSD9、SD10との関係が想定される。



第5図 SB 1 平断面図

S B 2 (第6図 図版三)

南区東部の3・4D地区で検出した。東部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出された柱穴はS P62・67・72・73・74・76・80・81の8個で、S P74が束柱と考えられるため、高床構造の建物が想定される。主軸をN19°Wに持つ桁行2間以上×梁間2間以上の規模が想定される。建物を構成する柱穴の形状は楕円形および円形で、規模は0.40~1.23m、深さ0.17~0.59m

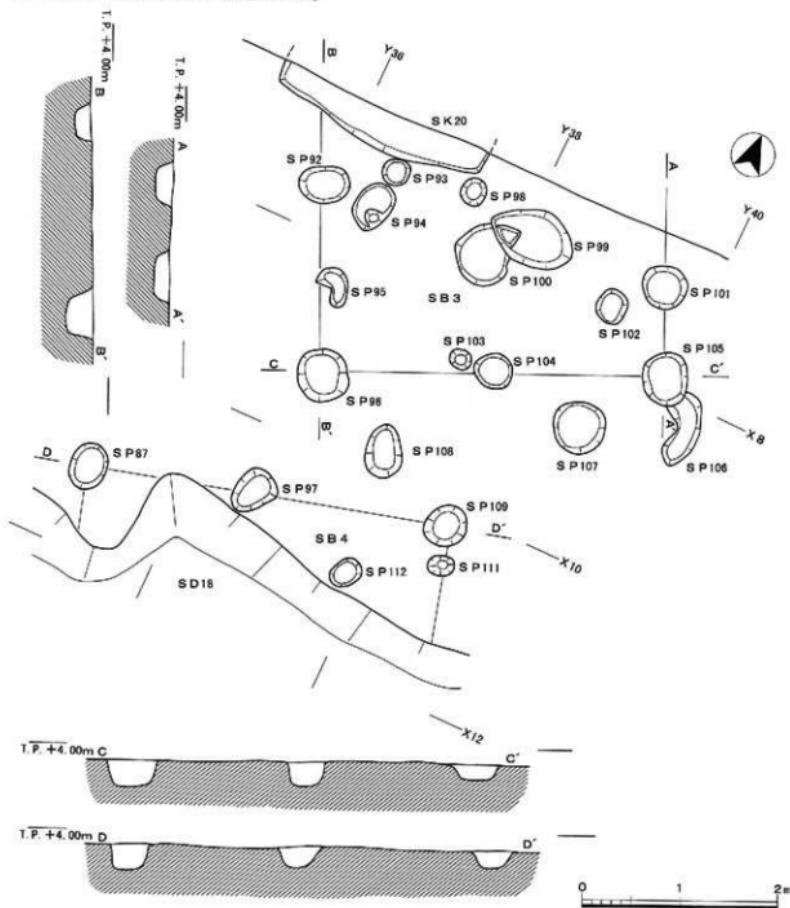


第6図 S B 2 平断面図

を測る。柱間は桁行1.7m、梁間2.3m前後を測る。SB 1と同様、建物の主軸がSD 9・SD 10と共に通しており、構築時期は6世紀末が想定される。

SB 3(第7図、図版三)

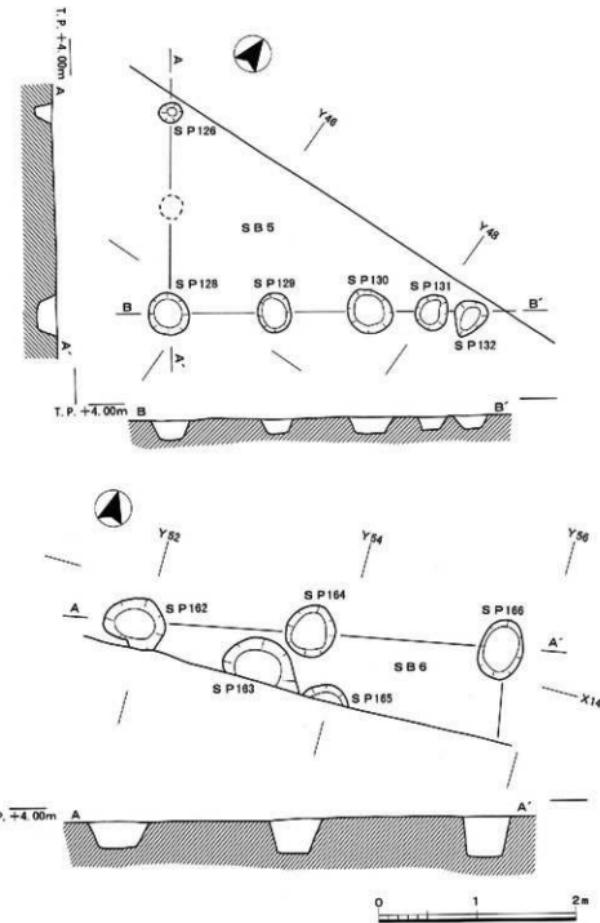
北区中東部の1DE地区で検出した。北部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出された柱穴はSP 92・96・104・105の4個である。主軸をN24°Wに持つ桁行2間以上×梁間2間の建物が想定される。建物を構成する柱穴の形状は円形で、規模は0.38～0.56m、深さ0.12～0.24mを測る。柱間は桁行2.0m、梁間1.8mを測る。時期的には近接位置で検出されたSE 8、SK 24からみて平安時代後期が推定される。



第7図 SB 3・4 平断面図

S B 4 (第7図、図版三)

S B 3 の南に隣接する。南部が S D18 に切られており全容は不明である。検出された柱穴は S P87・97・109 の 3 個である。主軸を N18° W に持つ。規模は不明であるが、S D18 の南部に柱穴が伸びないことから、桁行 2 間 × 梁間 2 間程度の建物が想定される。建物を構成する柱穴の形状は円形で、規模は 0.35~0.50m、深さ 0.15~0.23m を測る。柱間は梁行 1.8~2.0m を測る。時期的には北接する S B 3 と同様、平安時代後期が推定される。



第8図 SB 5・6 平断面図

SB 5(第8図、図版四)

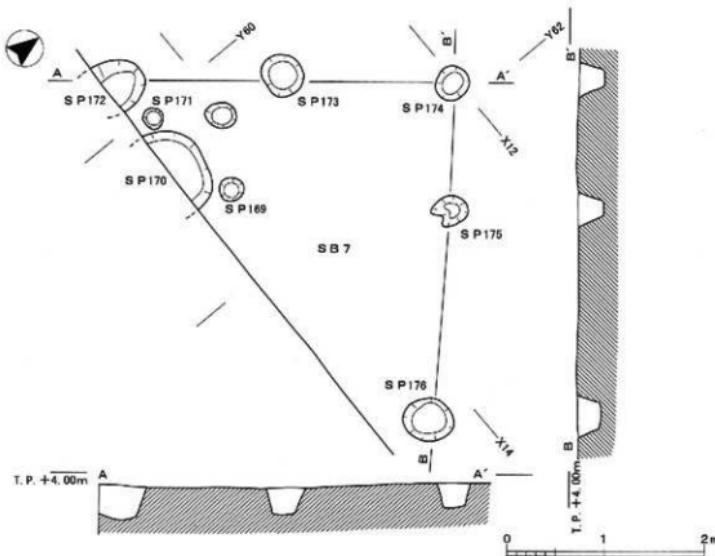
北区中央部の1E地区で検出した。北部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出された柱穴はSP 126・128・129・130・132の5個である。主軸をN34°Wに持つ桁行3間以上×梁間3間以上の建物が想定される。建物を構成する柱穴の形状は円形で、規模は0.21~0.45m、深さ0.17mを測る。柱間は桁行1.0m前後、梁間1.0m前後を測る。時期的にはSB 3と同様、平安時代後期が推定される。

SB 6(第8図)

北区中東部の2F地区で検出した。南部が調査区外、北部にはSD 18が存在するため、全容は不明である。検出された柱穴はSP 162・164・166の3個で東西方向に並ぶ。この柱列を北側の梁と想定した場合、主軸はN13°Wに持つ。建物を構成する柱穴の形状は円形で、規模は0.44~0.63m、深さ0.28~0.40mを測る。柱間は梁間1.8~2.0mを測る。時期的には、東接するSK 30との関係から平安時代末期が推定される。

SB 7(第9図、図版七)

北区東部の2FG地区で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出された柱穴はSP 172~SP 176の5個である。主軸をN48°Wに持つ桁行2間以上×梁間2間の建物が想定される。建物を構成する柱穴の形状は円形で、規模は0.28~0.58m、深さ0.12~0.32mを測る。柱間は桁行1.3~2.1m、梁間1.7mを測る。時期的には、北に近接して検出されたSE 11~SE 13(鎌倉時代前期~中期)に関連するものと考えられる。



第9図 SB 7 平断面図

井戸(S E)

S E 1(第10・11図、図版五・一六)

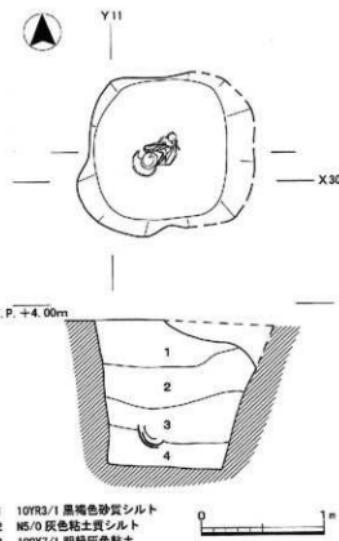
南区西部の3・4B地区で検出した素掘り井戸である。中央部から東がSK5に切られている。不定形を呈するもので、東西幅1.35m、南北幅1.23m、深さ1.18mを測る。埋土は4層から成る。遺物は3・4層を中心に完形を含む奈良時代後期に比定される土師器、須恵器等が出土している。11点(1~11)を図化した。1~6は土師器である。1・2は皿Aの小片である。2の見込みに螺旋、体部内面に放射状暗文が施されている。調整は1がb0手法、2がa0手法である。色調は1・2共に灰褐色。3は杯Cで完形品である。口径14.2cm、器高3.3cmを測る。色調は淡灰褐色。底部裏面に小さく「×」字状の墨書きが記されている。4は大形の鉢Bに分類される。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径22.5cm、器高6.6cmを測る。調整は内面がヨコナデ、外面は口縁部ヨコナデ、以下底部にかけてヘラケズリが行われている。色調は灰褐色。5は壺Bの小片である。小形品で復元口径8.2cmを測る。6は壺Bで口縁部を欠く。相対する二方の肩部分に把手が付けられている。7~11は須恵器である。7は壺Hで口縁部を欠く以外は完存している。口径6.0cm、器高7.5cm、底径5.2cmを測る。8は肩部が稜角を成す壺Qの小片である。外面口縁部から肩部にかけて自然釉が降着している。9は壺Aの小片である。復元口径15.5cmを測る。10・11は杯Aである。共に完形品で10が口径14.5cm、器高3.4cm、11が口径13.3cm、器高4.2cmを測る。底部裏面は10が水平であるが11は底部中央部付近が突出している。11は焼成がやや不良で、色調は灰白色を呈する。遺構の帰属時期は奈良時代後半が考えられる。

S E 2

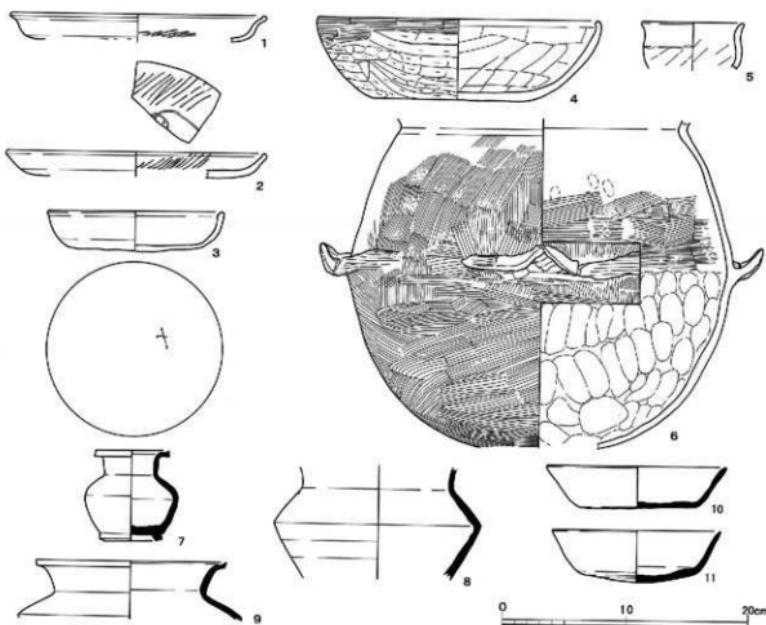
南区西部の3B地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸で、SD6を切っている。東西径0.69m、南北径0.89m、深さ0.5mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトである。遺物は出土していないが、江戸時代後期の遺物を含むSD6を切っていることから、構築時期は江戸時代後期以降が想定される。

S E 3

南区中央部の4C地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸で、上部の大半がSD6、東部がSK9に切られている。東西径1.0m、南北径1.4m、深さ0.45mを測る。埋土はシルトを主体とする5層から成る。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器が少量出土したが小破片のため図化し得たものはない。



第10図 S E 1 平断面図



第11図 S E 1出土遺物実測図

S E 4

南区中央部の3・4C地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸で、SK9の東部を切っている。東西径0.7m、南北径0.85m、深さ0.67mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトである。遺物は弥生土器、古墳時代の土師器の他、室町時代に比定される屋瓦等が出土している。SE2と埋土が共通しており、構築時期は江戸時代後期以降が推定される。

S E 5

南区中央部の3C地区で検出した。不整円形を呈する素掘り井戸で、東西径1.23m、南北径1.1m、深さ0.8m以上を測る。埋土は極細粒砂～中粒砂を主体とする2層から成る。遺物は出土していないが、埋土からみて江戸時代後期以降の構築が想定される。

S E 6

南区東部の3C地区で検出した。円形を呈する素掘り井戸で、SD11を切っている。東西径1.45m、南北径1.3m、深さ0.7mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトである。遺物は出土していないが、埋土からみて江戸時代後期以降の構築が想定される。

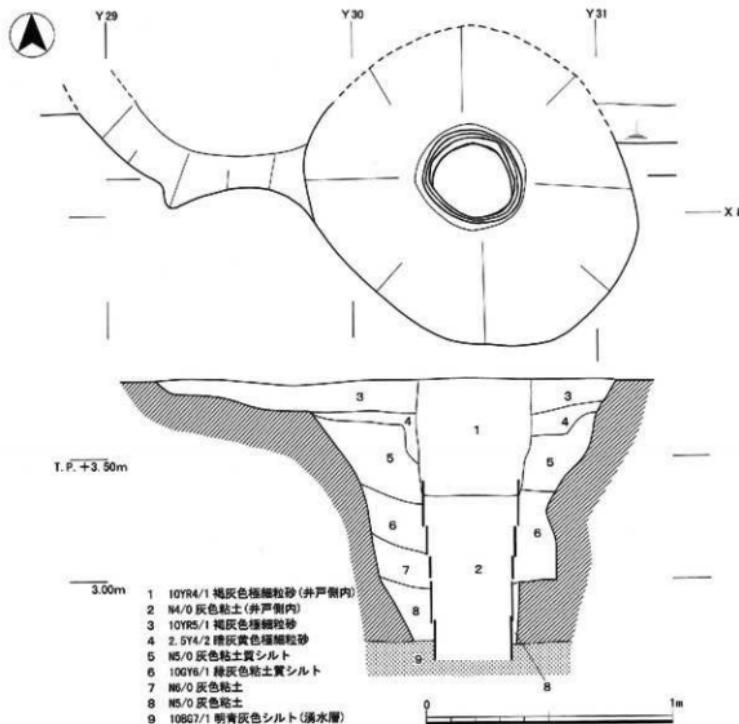
S E 7

南区東部の3D地区で検出した。円形を呈する素掘り井戸で、東西径1.03m、南北径1.1m、深さ0.53mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトである。遺物は古墳時代の土師器、須恵器の他、

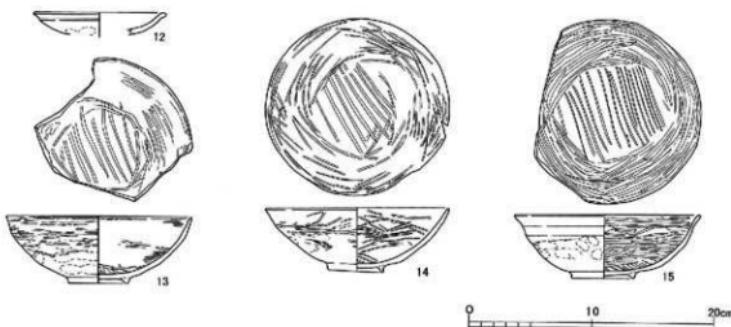
江戸時代後期以降の国産磁器、屋瓦が出土している。構築時期は江戸時代後期以降が推定される。

S E 8 (第11・12図、図版五・一六・一七)

北区西部の1C・D地区で検出した曲物積み上げ井戸である。北部は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分で東西幅2.18m、南北幅1.3m、深さ1.15mを測る。曲物井戸側は掘方のほぼ中央部に設置されており、調査時点では5段分のみが残存していた。埋土は掘方内が6層(3~8層)、井戸側内が2層(1~2層)である。遺物は井戸側内から平安時代後期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦等が出土している。4点(12~15)を図化した。12は土師器小皿の小片である。復元口径10.4cmを測る。瓦器椀は3点(13~15)図化した。和泉型の瓦器椀で、法量は口径14.9~15.0cm、器高5.0~5.1cm、高台径4.6~5.0cmを測る。体部外面に雜なヘラミガキを施す13・14とヘラミガキを欠く15がある。見込みのヘラミガキは3点ともに平行線状である。13および14の内外面に油痕が認められる。尾上実氏編年(尾上1983)のII-3期(12世紀後半)に比定される。遺構の帰属時期は平安時代後期(12世紀中葉)が考えられる。



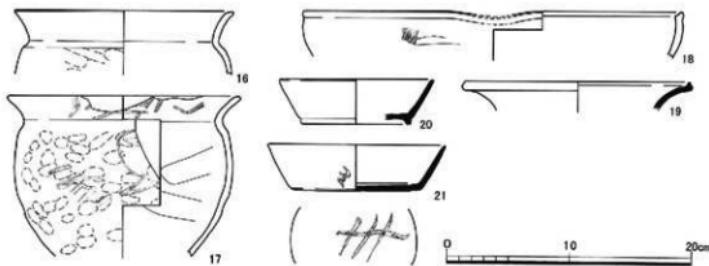
第12図 S E 8 平断面図



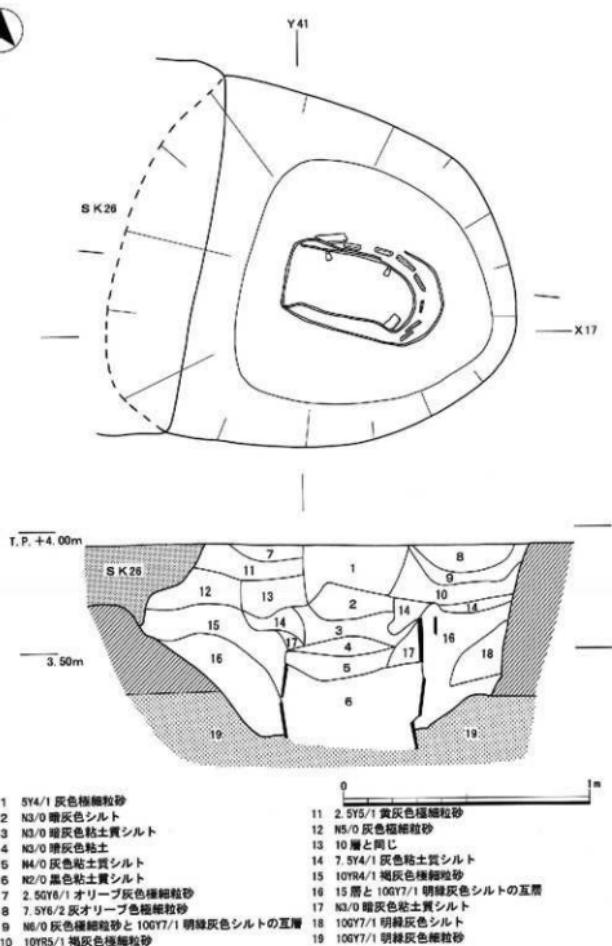
第13図 S E 8出土遺物実測図

S E 9 (第14・15図、図版六・一七)

北区中央部の2E地区で検出した曲物積み上げ井戸である。西肩はSK28に切られている。検出部分で東西幅1.63m、南北幅1.44m、深さ0.83mを測る。曲物井戸側は楕円形を呈するもので、掘方内のほぼ中央部に東西方向に設置されていた。調査時点では3段分が残存しており、最下段の曲物規模は長径0.54m、短径0.25mを測る。また、曲物井戸側を固定するための杭が井戸側内の北部に2本ある他、井戸側の外側には井戸側を補強するために打ち込まれた板材が北部から東部にかけてみられる。井戸埋土は井戸側内および掘方内を含めて18層(1~18層)に分層が可能で最下層は湧水層である19層10GY7/1明緑灰色細粒砂に達している。遺物は奈良時代後期に比定される土師器、須恵器、製塩土器が少量出土したが、一部を除き細片化したものが大半を占めた。また、特筆すべき遺物としては墨書き面土器片が含まれている。6点(16~21)を図化した。16~18は土師器である。16・17は土師器甕Aである。復元口径は16が17.6cm、17が18.6cmを測る。17には体部外面および口縁部内面に墨書きが施されており、墨書き面土器と推定されるが、小片のため意匠等は明確でない。18は片口を有する鉢Dと推定される。19~21は須恵器である。19は壺Qと推定される。復元口径18.3cmを測る。20・21は杯で、高台を有する20が杯B、高台の無い21が杯Aに分類される。21は完形品で、口径14.2cm、器高3.8cmを測る。体部外面および底部裏面に墨書きが記されている。底部裏面の墨書きは「卅」の記号、体部に記された墨書きについては判読できない。



第14図 S E 9出土遺物実測図



第15図 S E 9 平断面図

帰属時期は奈良時代後期である。

S E 10(第16・17図、図版一七)

北区中央部の2E地区で検出した素掘り井戸である。不定形を呈するもので、東西幅1.2m、南北幅1.0mを測る。断面形状は逆台形状で深さ0.8mを測る。埋土は4層から成る。遺物は1~4層から平安時代後期に比定される土師器、須恵器、瓦器、屋瓦が少量出土している。8点(22~29)

を図化した。22~25は土師器小皿である。全て完形品である。口径9.2~9.8cm、器高1.6cm前後を測る。口縁端部の形状では、口縁端部が小さく外反する22、丸く終わる23・24、上方に摘み上げられる25がある。色調は浅黄橙色である。26・27は土師器中皿である。口縁部の残存率は26が1/2、27が1/3程度である。復元口径は26が14.7cm、27が16.0cmを測る。色調は26が浅黄橙色、27が淡灰褐色である。28は和泉型瓦器椀の小片である。復元口径16.4cmを測る。体部内外面とともに横位の密なヘラミガキ、見込みは格子状ヘラミガキを施す。尾上編年のII-2期(12世紀中葉)に比定される。29は瓦器小皿である。完形品で口径9.3cm、器高2.4cmを測る。やや深みのある体部を有するもので、体部外面のヘラミガキは四分割にやや粗く施されている。見込みのヘラミガキは格子状である。内外面に油痕が認められる。遺構の帰属時期は平安時代後期(12世紀中葉)が推定される。

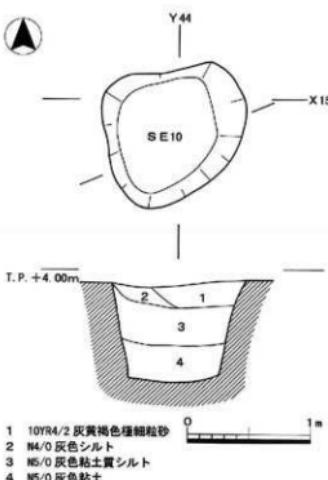
S E 11(第18・19図、図版七・八・一七)

北区東部の2G地区で検出した土釜積み上げ井戸である。上部の大半がSD18により削平を受けている他、南に隣接してSE12が存在している。検出部分で東西径0.54m、南北径0.49m、深さ0.85mを測る掘方の中央部に

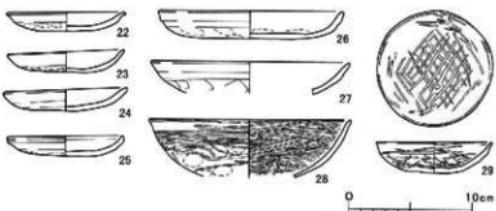
羽釜を設置し井戸側とするもので、最下部の井戸側のみが残存していた。掘方内の埋土はN3/0暗灰色粘土質シルトである。井戸側内から古墳時代前期前半の布留式甕、鎌倉時代の羽釜、常滑燒甕等の小片が極少量出土している。井戸側に使用されていた土師器羽釜1点(30)を図化した。30は底部を欠く以外は完存している。口径28.0cm、口径37.6cm、残存高20.6cmを測る。色調は淡褐灰色。鉢部以下に煤が付着している。体部外面調整にケズリを多用するもので、森島康雄氏編年(森島1990)で河内産とされるB型式(13世紀初頭)に比定される。

S E 12(第18図)

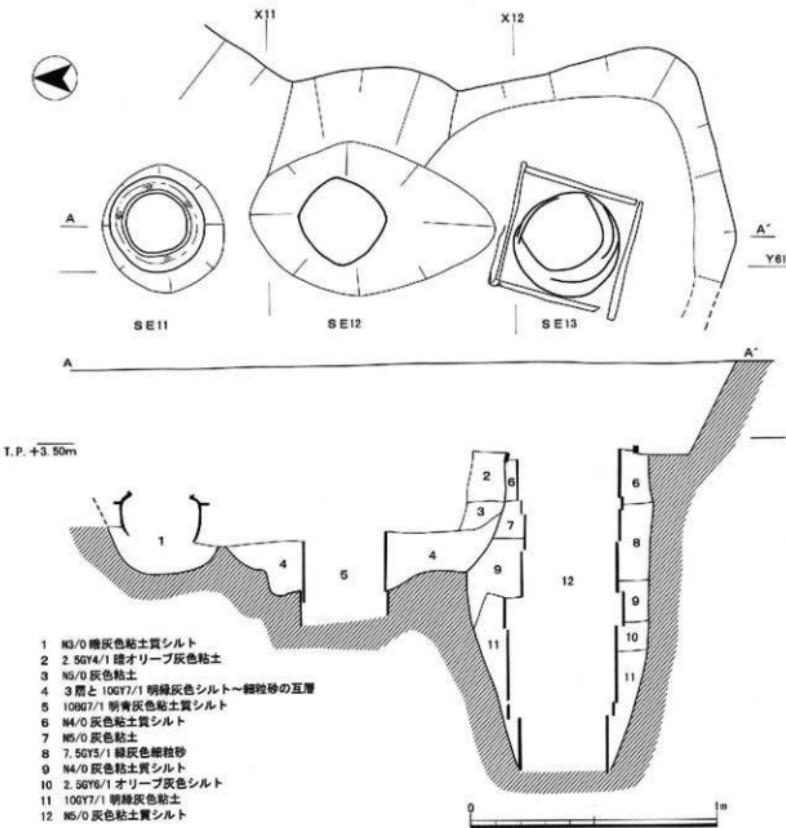
北区東部の2F・G地区で検出した曲物積み上げ井戸である。北にSE11、南にSE13が隣接している。SE11と同様、上部はSD18に切られており掘方の上面規模は不明である。隣接する井戸との切りあい関係は、南部でSE13を切り、北部ではSE11に切られている。検出部分での



第16図 SK 10平面図



第17図 S E 10出土遺物実測図



第18図 S E11～S E13平面図

掘方形状は南北方向に長い楕円形で、東西径0.63m、南北径1.0m、深さ1.06mを測る。曲物井戸側は掘方のやや北部に設置されており、検出時点では2段が残存していた。埋土は掘方内が3層(2～4層)、井戸側内が1層(5層)である。遺物は土師器羽釜、東播系須恵器鉢等が極少量出土している。小片のため時期を明確に出来たものはないが、S E13を切る関係から、13世紀初頭以降の構築が推定される。

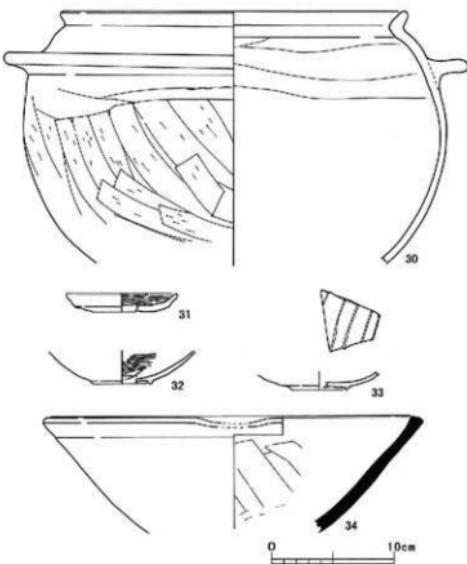
S E13(第18・19図、図版八)

S E12の南で検出した。井戸側に曲物+縦板横棟どめを持つ井戸である。北側がS E12、西側がS D18により切られている。検出部分で東西幅1.1m、南北幅1.2m、深さ1.68mを測る。曲物井戸側は8段が積み重ねられており、最上部で径0.42mを測った。曲物井戸側の上部には方形に組まれた一辺

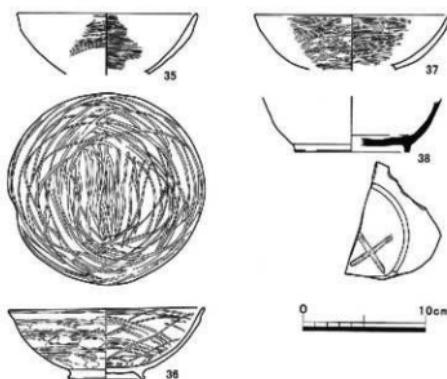
0.5mを測る横棟が残存していた。埋土は掘方内が6層(6~11層)、井戸側内が1層(12層)である。遺物は井戸側内から平安時代後期~鎌倉時代前半に比定される土師器羽釜、須恵器甕・鉢、瓦器椀・小皿等が少量出土している。4点(31~34)を図化した。31は瓦器小皿の小片である。復元口径8.8cm、器高8cmを測る。32・33は和泉型瓦器椀の小片である。共に形骸化した貼り付け高台を有する。見込みのヘラミガキは共に単位幅が大きい平行線状である。尾上編年のIII-3期(13世紀前半~中葉)に比定される。34は東播系の須恵器片口鉢の小片である。復元口径29.8cmを測る。口縁端部が丸く終わる形態もので、神出窯産が推定される。12世紀前半に比定される。時期幅のある遺物が出土しているが、遺構の帰属時期は13世紀前半~中葉が推定される。

S E 14(第20・21図、図版九・一八)

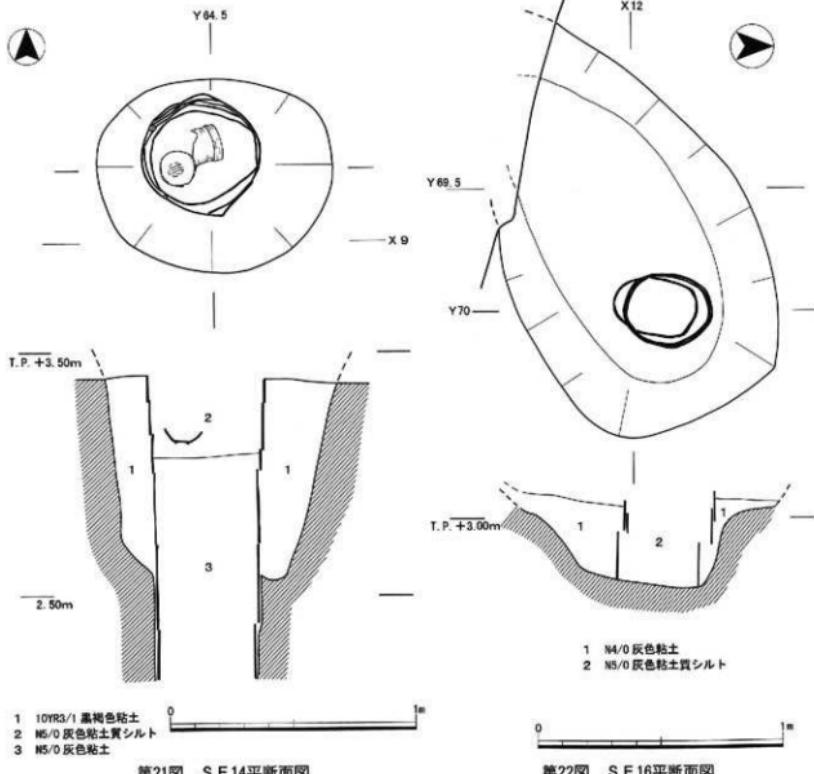
北区東部の1G地区で検出した曲物積み上げ井戸である。上部はS D 17により削平を受けている。東西方向に長い梢円形の掘方で、検出部分で東西径0.95m、南北径0.8m、深さ1.25mを測る。曲物井戸側は掘方の北寄りに設置されており、調査時点で6段が残存していた。埋土は掘方内が1層10YR 3/1黒褐色粘土で、井戸側内が上層の2層N5/0灰色粘土質シルトと下層の3層N5/0灰色粘土に分かれる。遺物は2層から平安時代後期に比定される土師器小皿・羽釜、須恵器甕、瓦器椀、石材、曲物容器等が出土している。瓦器椀2点(35・36)を図化した。35は大和型瓦器椀の小片である。復元口径14.5cmを測る。川越編俊一氏編年(川越1982)のII段階-B型式(12世紀中葉)に比定され



第19図 S E 11(30)、S E 13(31~34)出土遺物実測図



第20図 S E 14(35・36)、S E 15(37・38-34)出土遺物実測図



第21図 SE 14平断面図

第22図 SE 16平断面図

る。36は和泉型瓦器椀である。完形品で、口径15.7cm、器高5.8cm、高台径6.2cmを測る。深味のある体部に「ハ」の字に開く高台が付く。体部内外面のヘラミガキ調整は共にやや粗く、外面は四分割に行われている。見込みにはやや雑な平行線状ヘラミガキを施す。尾上編年のII-2期(12世紀中葉)に比定される。

S E 15 (第20図、図版一八)

北区東部の1・2G地区で検出した。SD 17とSD 18の合流部付近で検出したもので、中央部より北側がSD 17・SD 18により完全に削平を受けているため井戸側等の構造は不明である。検出部分で東西0.9m以上、南北0.9m以上、深さ0.7mを測る。埋土は残存部分で10層に分層される。遺物は細片化した上師器、須恵器、瓦器等が少量出土している。2点(37・38)を図化した。37は和泉型瓦器椀の小片である。体部内外面ともに横位の密なヘラミガキ。見込みには格子状ヘラミガキが施されている。体部外面に油痕が認められる。尾上編年のII-1期(12世紀前半)に比定さ

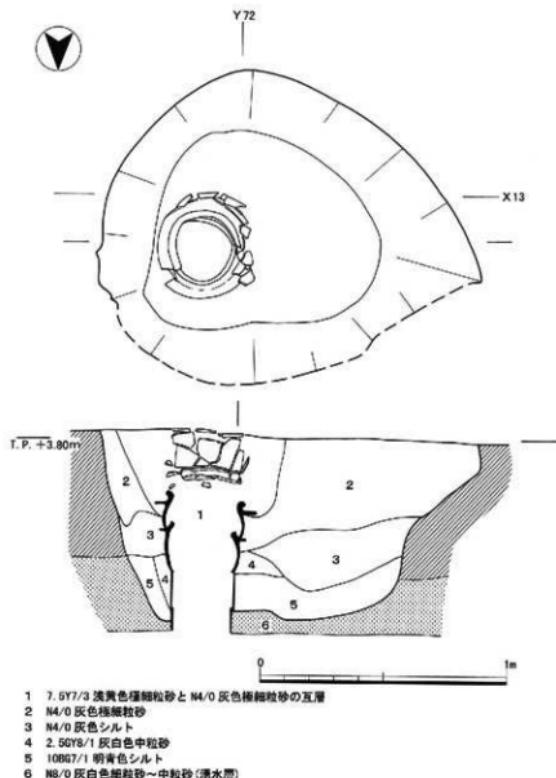
れる。38は高台を有する須恵器であるが、小片のため器種は限定できない。復元高台径9.4cmを測る。底部裏面に「十」の墨書がある。時期的には平安時代前期前後のものと推定されるため、混入品と考えられる。遺構の帰属時期は平安時代後期(12世紀前半)が推定される。

S E 16(第22図)

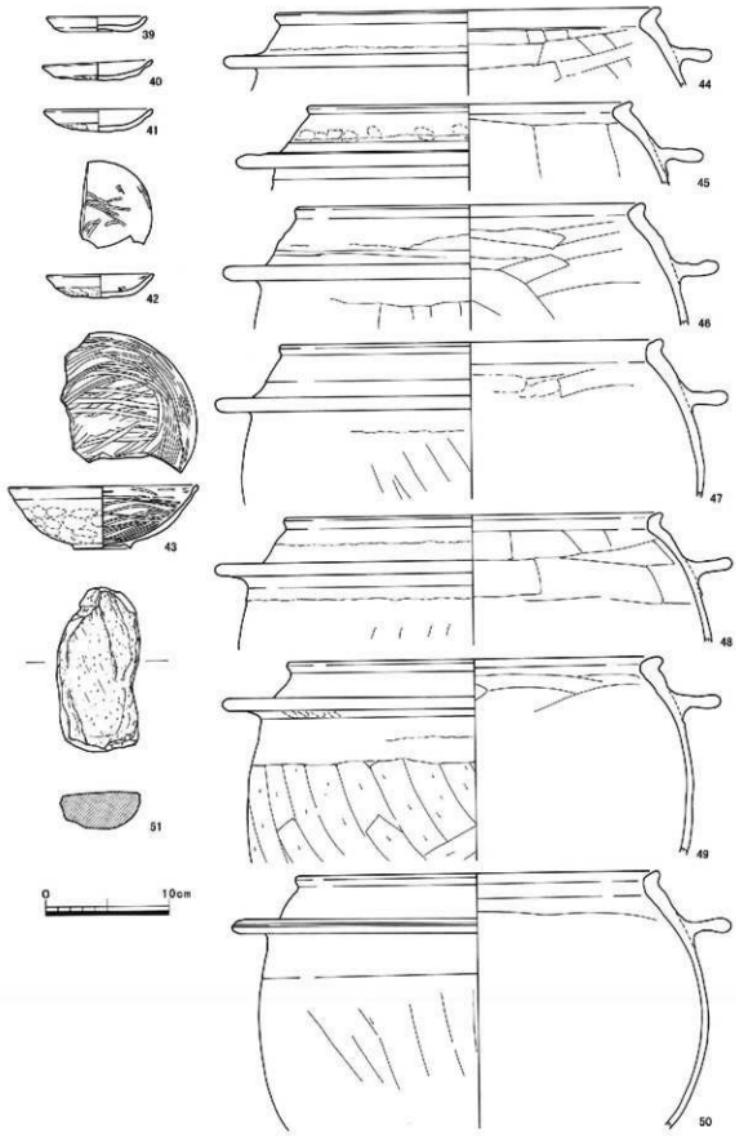
北区東部の2GH地区で検出した曲物積み上げ井戸である。上部の大半がSD 17により削平を受けている。検出部分で東西幅1.5m、南北幅1.04m、深さ0.4mを測る。曲物井戸側は東西方向に長い楕円形の掘方東部に設置されており、調査時点では3段のみが残存していた。埋土は掘方内がN4/0灰色粘土、井戸側内がN5/0灰色粘土質シルトである。出土遺物は小片が中心で弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、瓦器、獸骨等があるが図化し得たものはない。帰属時期は瓦器碗の型式から鎌倉時代(13世紀代)が推定される。

S E 17(第23・24図、図版一〇・一八)

北区東端の2H地区で検出した曲物+羽釜積み上げ井戸である。北半分がSD 17により切られている。検出部分で東西幅1.56m、南北幅1.29m、深さ0.83mを測る。井戸側は掘方内の東部に設置されており、下部に曲物2段、上部に羽釜3段が使用されている。埋土は掘方内が4層(2~5層)、井戸側内が1層(1層)で、最下部が湧水層である6層に達している。出土遺物には鎌倉時代中期の土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿、砥石がある。13点(39~51)を図化した。39は土師器小皿である。口径8.0cm、器高1.4cmを測る。40・41は瓦器小皿である。器高の低いやや雑な作りのもので、口径8.8cm前後、器高0.8~1.0cmを測る。42の見込みにはへ



第23図 S E 17平面図



第24図 S E 17出土遺物実測図

ラミガキが施されているが、模様としての規則性は無い。43は和泉型の瓦器碗である。復元口径15.1cm、器高5.0cm、高台径4.5cmを測る。見込みには単位幅の太い格子状ヘラミガキが施されている。体部外面にヘラミガキが行われない段階のもので、尾上編年のⅢ-3期(13世紀前半)に比定される。

土師器羽釜は7点(44~50)図化した。44以外は井戸側として使用されていたもので、45~47が1・2段、48・49が3段、50が4段にある。球形の体部に小さく「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので、鍔はほぼ水平に貼り付けられている。口縁部の形状では、屈曲部分に面を持つない44~46と面を持つ47~50がある。外面調整は、口縁部から体部上半までをヨコナデ、以下を縦位方向にヘラケズリを行う。内面調整は、口縁部がヨコナデ、体部は上位が板ナデ、以下にナデを行う。森島編年の河内産とされるA型式に分類されるもので、13世紀中葉に比定される。51は砥石で、1面に使用面がある。最大幅6.5cm、長さ13.1cm、厚さ3.0cmを測る。石材は流紋岩である。井戸の構築時期は井戸側に使用された羽釜からみて、13世紀中葉が推定される。

土坑(S K)

S K 1(第26図)

南区西部の3B地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.05m、南北幅0.5m、深さ0.25mを測る。埋土は極細粒砂～細粒砂を主体とする2層から成る。遺物は土師器、須恵器の細片が極少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

S K 2(第25・26図)

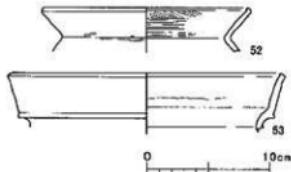
S K 1の南に隣接している。東部はS K 3に切られており。検出部分で東西幅0.93m、南北幅1.21m、深さ0.15mを測る。埋土は極細粒砂を主体とする2層から成る。遺物は古墳時代前期前半(布留式古棺)に比定される古式土師器の小片が極少量出土している。2点(52・53)を図化した。52は壺の小片で、各部位の形状・調整等から布留傾向壺に分類される。復元口径20.3cmを測る。外面の体部上半から口縁部にかけて縦位のハケ調整が認められる。色調は淡灰褐色である。胎土中に実体鏡により確認できる角閃石が極少量含まれている。53は山陰系壺の小片である。復元口径22.0cmを測る。色調は灰白色。2点共に古墳時代前期前半(布留式古棺)に比定される。

S K 3(第26図)

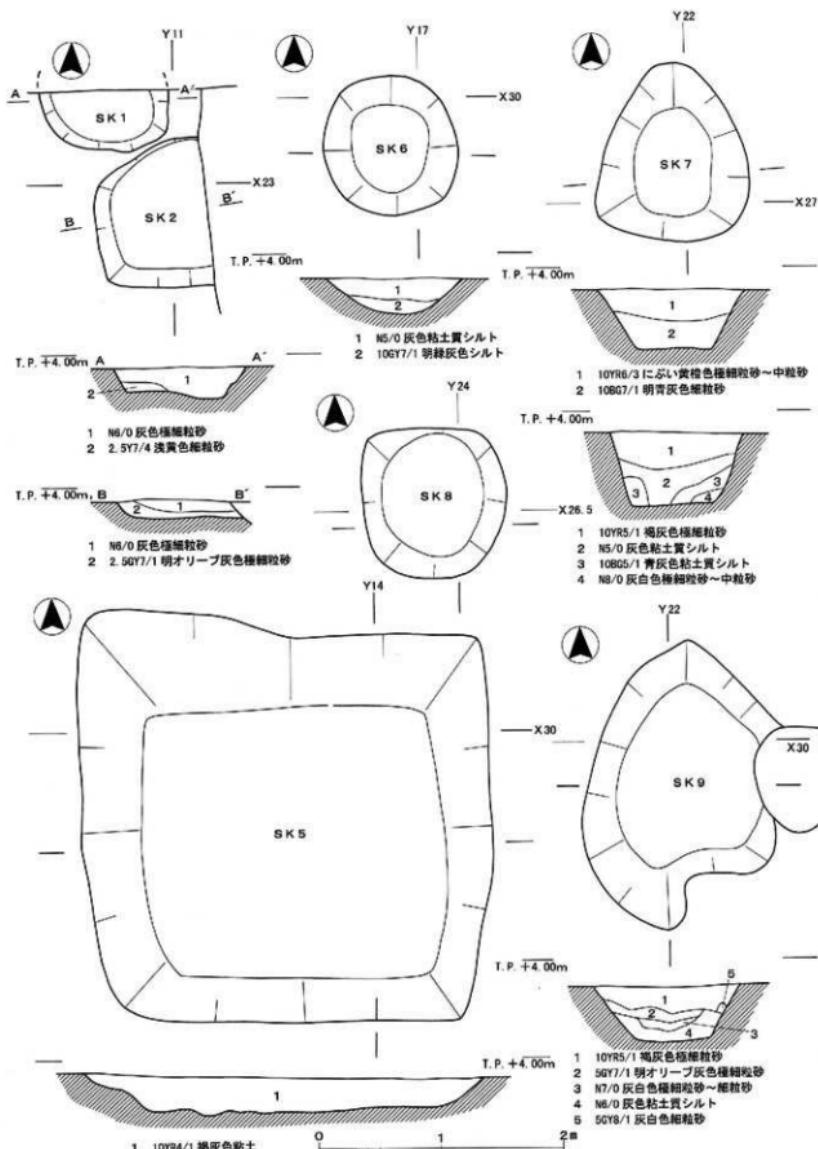
南区東部の3B地区で検出した。南北方向に溝状に伸びる土坑で、北部が調査区外に至る他、南部でS K 4、S D 5、西部でS K 2を切っている。検出部分で東西幅1.4~2.5m、南北幅5.2m、深さ0.1mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代初頭の庄内式壺の小片が極少量出土しているが図化し得たものはない。

S K 4(第26図)

南区東部の3B地区で検出した。北をS K 3、南をS E 1、S K 5、東をS D 5に切られており、全容は不明である。検出部分で東西幅1.76m、南北幅0.62m、深さ0.68mを測る。埋土は



第25図 S K 2出土遺物実測図



第26図 SK1・2・5・6～9 平断面図

10YR4/1褐色粘土の單一層である。遺物は出土していない。

S K 5(第26図、図版一)

南区西部の3・4B地区で検出した。方形を呈する大形の土坑で、SE1、SD5を切っている。東西長3.35m、南北長3.32m、深さ0.28mを測る。埋土は10YR4/1褐色粘土の單一層である。遺物は須恵器、屋瓦の小片が極少量出土しているが時期を明確にし得たものはない。

S K 6(第26図)

南区中央部の3・4B地区で検出した。円形を呈するもので、東西径1.1m、南北径1.13m、深さ0.3mを測る。埋土は2層から成る。遺物は出土していない。

S K 7(第26図)

南区中央部の3C地区で検出した。南北方向に長い梢円形を呈するもので、東西径1.25m、南北径1.46m、深さ0.49mを測る。埋土は2層から成る。遺物は古墳時代前期の古式土師器、古墳時代中～後期の須恵器類が少量出土している。

S K 8(第26図)

S K 7の東に近接している。不整円形を呈するもので、東西径1.16m、南北径1.23m、深さ0.6mを測る。埋土は4層から成る。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)の布留式甕、奈良時代の須恵器杯蓋、鎌倉時代の土師器皿等が少量出土している。

S K 9(第26図)

南区中央部の3・4C地区で検出した。不定形を呈するもので、SE3を切り、SE4に切られている。東西幅1.55m、南北幅2.36m、深さ0.45mを測る。埋土は5層から成る。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器鉢・高杯の他、石材等が出土しているが図化し得たものはない。

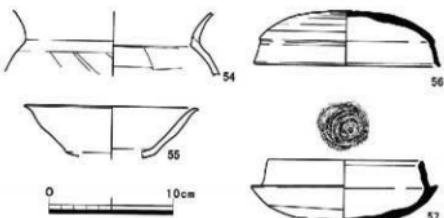
S K 10(第28図)

南区東部の3D地区で検出した。南北方向に長い梢円形を呈する土坑で、南西部はSD12に切られている。東西幅1.3m、南北幅0.97m、深さ0.4mを測る。埋土は4層から成る。遺物は古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される庄内式甕が極少量出土したが、図化し得たものはない。

S K 11(第27・28図、図版一九)

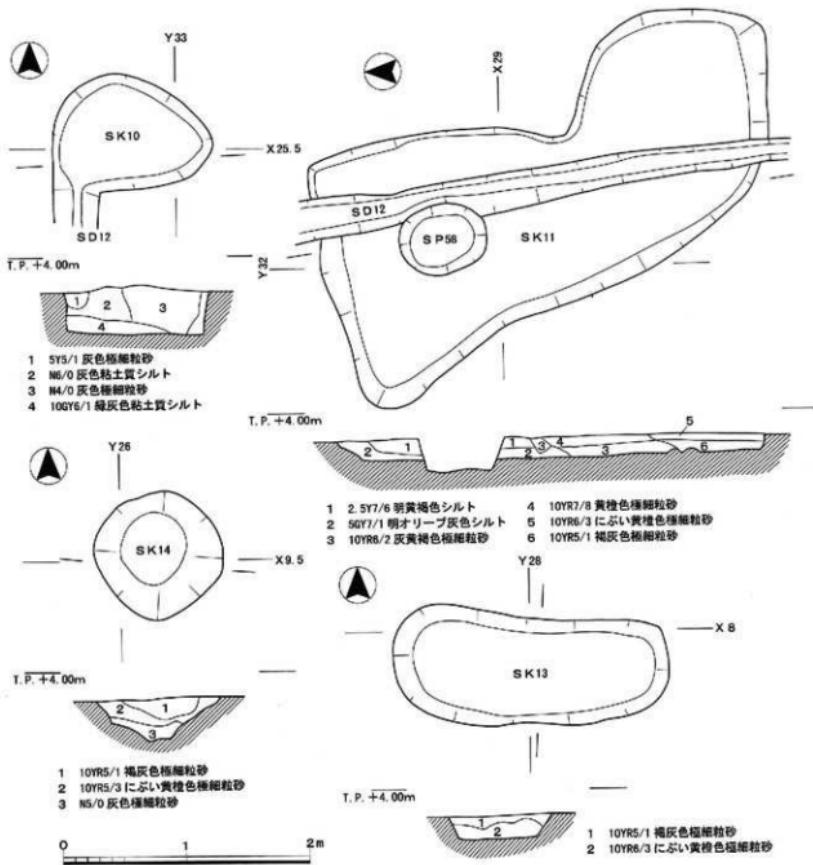
南区東部の3・4D地区で検出した。不定形を呈するもので、SD12・SP58に切られ、SP61を切っている。東西幅1.3～2.1m、南北幅4.0m、深さ1.8mを測る。埋土は6層から成る。遺物は古墳時代後期前半を中心とする土師器、須恵器が少量出土している。4点(54～57)を図化した。

54は土師器甕の小片である。55は土



第27図 S K 11出土遺物実測図

師器の有稜高杯の小片である。小形品で復元口径14.0cmを測る。56は須恵器杯蓋である。約1/4が残存している。復元口径15.0cm、器高4.2cmを測る。57は須恵器杯身である。ほぼ完形品で、口径12.4cm、器高5.3cm、受部径15.0cmを測る。底部内面の中央部に同心円文タタキが行われてい



第28図 SK10・11・13・14平断面図

る。56・57ともに田辺昭三氏編年(田辺1966)のMT15型式(6世紀前半)にあたる。遺構の帰属時期は後期前半である。

S K 12

北区西端の1・2C地区で検出した。不定形の土坑で西部が調査区外に至る他、東部ではSK13・SK14に切られている。検出部分で東西幅2.45m、南北幅5.15m、深さ0.12mを測る。埋土は極細粒砂を主体とする3層から成る。遺物は古墳時代初頭の庄内式壺片が極少量出土しているが図化し得たものはない。

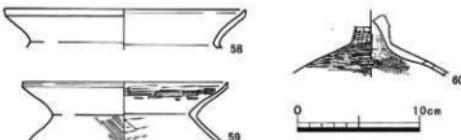
S K13(第28図)

北区西部の1C地区で検出した。東西に長い梢円形を呈するもので、西部でSK12を切っている。東西径2.21m、南北径0.85m、深さ0.19mを測る。埋土は2層から成る。遺物は古墳時代初頭の庄内式甕、古墳時代中期～後期の須恵器片が極少量出土している。

S K14(第28・29図)

北区西部の1C地区で検出した。

SK12を切っている。円形を呈するもので東西径1.05m、南北径1.07m、深さ0.34mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される古式土師器類が少量出土している。3点(58～

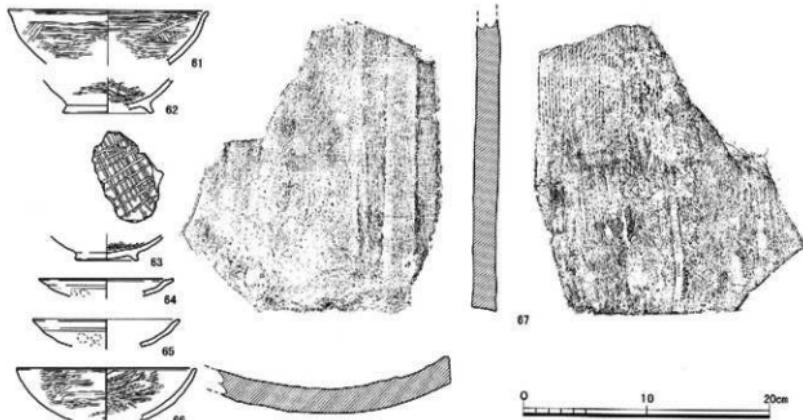


第29図 SK14出土遺物実測図

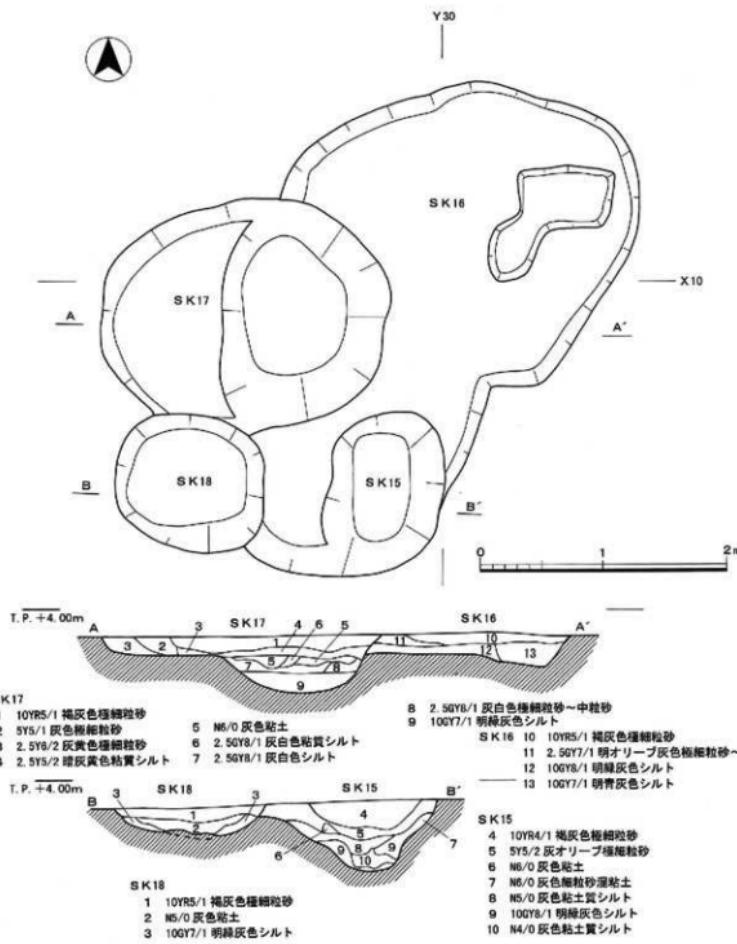
60)を図化した。58・59は庄内式甕の小片である。復元口径は58が19.6cm、59が16.6cmを測る。色調は58が褐灰色、59が淡灰褐色である。共に生駒西麓産。60は精製の楕円高杯の脚部片である。色調は橙色である。古墳時代前期後半(庄内式新相)に比定される。

S K15(第30・31図、図版一九)

北区西部の2C地区で検出した。SK16の南部を切っている。南北方向に長い梢円形を呈するもので、東西径0.9m、南北径1.3m、深さ0.6mを測る。埋土は7層から成る。遺物は古墳時代後期の土師器、須恵器の他、鎌倉時代の瓦器楕、屋瓦が少量出土している。平瓦片1点(67)を図化した。平瓦の隅部分が側面で9cm、端面で3cm程度が焼成前に削り取られている。凹面に横骨痕と布目痕、凸面には縦位の繩目叩き痕を残すが、端部から10cm程度は細目叩きが削り取られている。焼成は良好、色調は灰褐色～灰色。胎土中に3mm以下の長石・石英の他、実体鏡では角閃石・黒雲母の含有が認められる。近接する西郡廃寺に関連した屋瓦と考えられる。



第30図 SK15(67)、SK16(61～63)、SK17(64～66)出土遺物実測図



第31図 SK15~18平面面図

SK16(第30・31図)

北区西部の1・2CD地区で検出した。北東—南西に伸びる不整形の土坑で、南部および西部はSK15・17・18に切られている。東西幅2.65m、南北幅4.5m、深さ0.25mを測る。埋土は4層から成る。造物は古墳時代後期の土師器、須恵器の他、鎌倉時代の瓦器、屋瓦等が出土している。和泉型瓦器3点(61~63)を図化した。61は体部から口縁部にかけての小片である。体部内面の

ヘラミガキは横位で密、外面は分割された横位のヘラミガキが行われている。62は「ハ」の字に開く重厚な高台を持つ。2点共に和泉型瓦器椀の最古段階の形態で、尾上編年Ⅰ-2期(11世紀後半)に比定される。63は見込みに細かい格子状ヘラミガキが施されている。62に比して高台の退化が顕著なもので、形式的には後出の尾上編年Ⅱ-1期(12世紀前半)に比定される。遺構の帰属時期は12世紀後半が推定される。

S K17(第30・31図、図版一二)

東西方向に長い楕円形を呈する土坑で、東部は二段掘方を呈している。S K16の西部を切り、南端はS K18に切られている。東西径2.3m、南北径1.9m、深さ0.48mを測る。埋土は9層から成る。遺物は平安時代末期を中心とした土師器、瓦器が少量出土している。3点(64~66)を図化した。64・65は土師器小皿の小片である。共に口縁部が外反するもので、64はいわゆる「て」の字状口縁と称される形態の最終段階にあたる。66は瓦器椀の小片である。体部内外面のヘラミガキは横位で密に施されている。内外面共に焼成時に生じた円形状の剥離が顕著である。尾上編年Ⅱ-1期(12世紀前半)に比定される。

S K18(第31・32図、図版一二・一九)

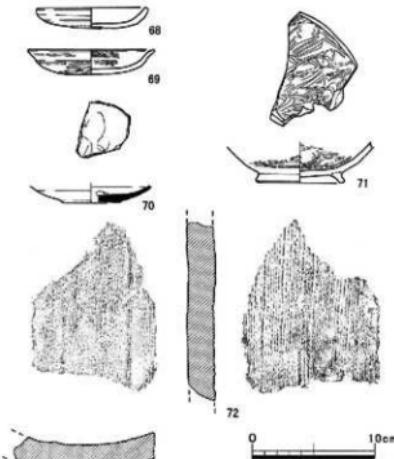
S K17の南端およびS K16の南西端を切っている。隅丸方形を呈するもので、東西幅1.2m、南北幅1.12m、深さ0.2mを測る。埋土は3層から成る。遺物は平安時代後期を中心とした土師器、瓦器、屋瓦が少量出土している。3点(69・71・72)を図化した。69は瓦器小皿である。口径10.2cm、器高2.0cmを測る。口縁端部に沈線が廻る大和型の瓦器小皿である。内外面に炭素付着が不良で、色調は灰白色を呈する。71は和泉型瓦器椀である。高台が重厚で「ハ」の字に開く、和泉型瓦器椀の古相段階の様相を呈している。尾上編年Ⅰ-3期(12世紀前半)に比定される。72は平瓦片である。四面には横骨痕と細かい布目、凸面には縦位の繩目叩きが施されている。

S K19(第33図)

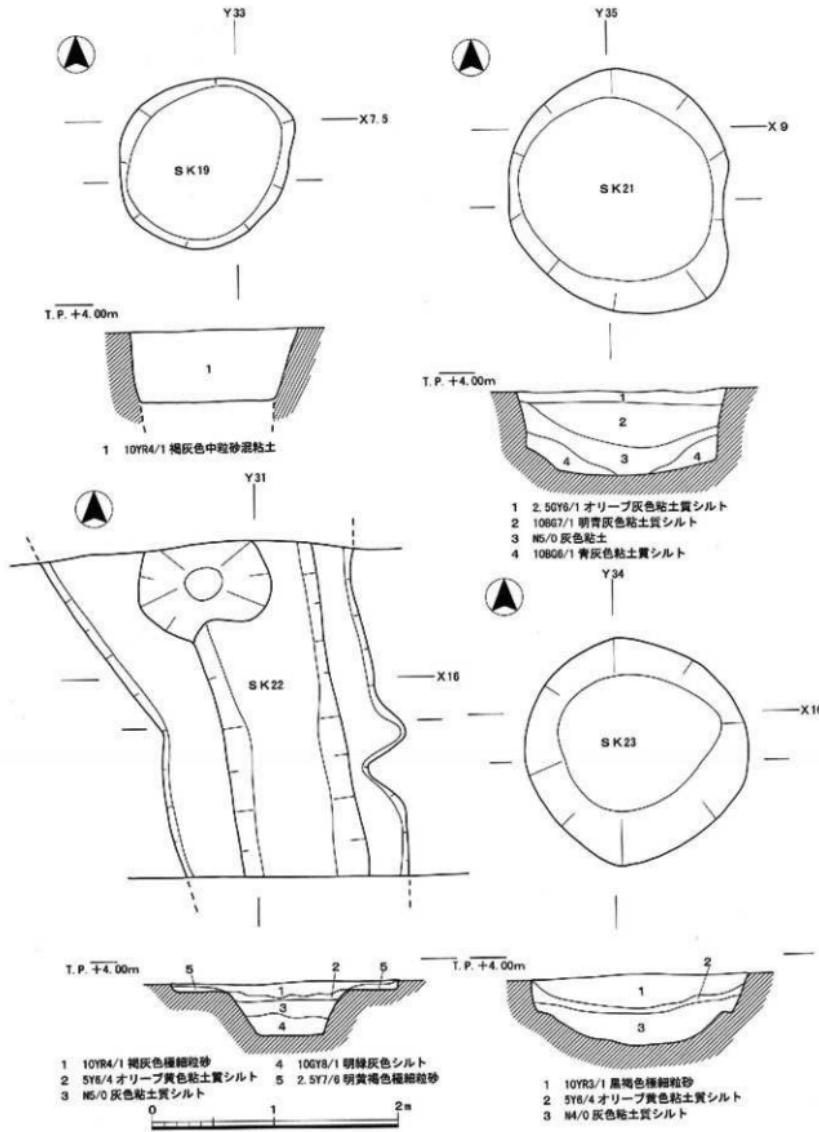
北区西部の1D地区で検出した。円形を呈するもので東西径1.35m、南北径1.4m、深さ0.57m以上を測る。埋土は10YR4/1褐色中粒砂混粘土である。出土遺物は江戸時代後期以降の国産陶磁器、屋瓦が極少量出土している。

S K20

北区東部の1D地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅2.28m、南北幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は2層で上層が10YR4/1褐色細粒砂、下層が7.5GY6/1緑灰色シルトである。遺物は出土していない。



第32図 S K18(69・71・72)、S K22(70)、S K24
(68)出土遺物実測図



第33図 SK19・21~23平面面図

S K21(第33図、図版一二)

北区西部の1・2D地区で検出した。円形を呈するもので東西径1.73m、南北径2.0m、深さ0.7mを測る。埋土は粘土質シルト～粘土を主体とする4層から成る。遺物は鎌倉時代の土師器片、瓦器碗の他、江戸時代中期以降の唐津焼皿が出土している。

S K22(第32・33図)

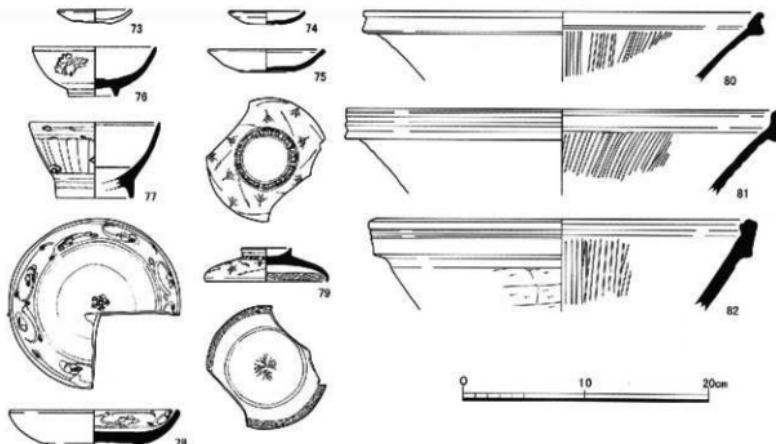
北区西部の2C・D地区で検出した。南北方向に溝状に伸びるもので、北がSD18に切られ、南が調査区外に至る。検出部分で東西幅1.65～2.52m、南北幅2.76m、深さ0.4mを測る。埋土は5層から成る。遺物は平安時代後期に比定される土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中国産磁器の小片が少量出土している。白磁皿の小片1点(70)を図化した。底部は上げ底状で、内底見込みに細線による文様が彫られているが、小片のため意匠は明確でない。釉はきわめて薄く、黄色味が強く、細かい貫入が入る。横田・森田氏編年(横田・森田1978)の白磁皿IV-1・aに分類されるもので、11世紀後半～12世紀前半に比定される。

S K23(第33図、図版一三)

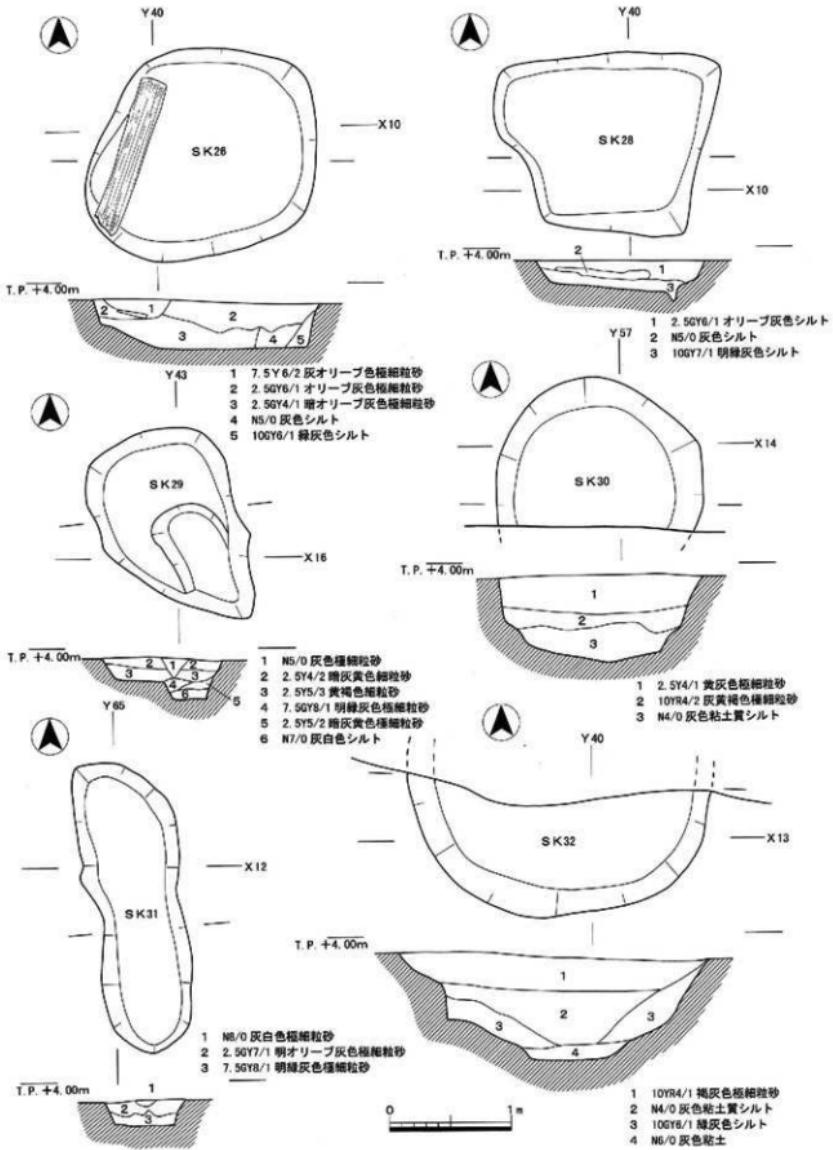
S K22の東に接続している。円形を呈するもので、東西径1.8m、南北径1.86m、深さ0.56mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代中期の土師器、須恵器の他、平安時代前期の土師器、黒色土器、屋瓦が少量出土しているが図化し得たものはない。

S K24(第32図)

北区中央部の1E地区で検出した。方形を呈する土坑で、長辺0.85m、短辺0.7m、深さ0.21mを測る。埋土は10YR4/1褐色細粒砂である。遺物は平安時代後期に比定される土師器皿、瓦器碗が少量出土している。土師器小皿1点(68)を図化した。完形品で口径8.8cm、器高1.6cmを測る。12世紀代のものと推定される。



第34図 S K26出土遺物実測図



第35図 SK26・28～32平面図

S K25(図版一二)

S K24の南西部に位置する。不整円形を呈するもので東西径1.13m、南北径0.95m、深さ0.17mを測る。埋土は1層から成る。遺物は古墳時代後期の須恵器片が1点のみ出土している。

S K26(第34・35図、図版一九)

北区中央部の1・2 D E 地区で検出した。不整円形を呈するもので、東西径1.78m、南北径1.72m、深さ0.37mを測る。埋土は極細粒砂を主体とする5層からなる。性格的には、近世の屋敷内に設けられた廐棄物を処理した土坑(ゴミ穴)である。遺物は西部から板材が出土した他、江戸時代中期～後期に比定される国産陶磁器類、瓦、土製品、木製品が多量に出土している。10点(73～82)を図化した。73～75は灯明皿である。73が土師器、74・75が陶器の柿釉皿である。3点ともに裏面に糸切り痕がある。76～79は肥前焼系磁器である。76は小振りの碗である。文様は外面のみで、体部の上下の圓線間に菊花文、高台部に2重圓線がある。見込みに蛇ノ目釉剥ぎ。77は広東碗の小片である。虫籠文。1780～1810年代。78は染付皿である。文様は内面のみで、体部に二重圓線と草花文、見込みに五弁花文。内面に蛇ノ目釉剥ぎ。1750～1810年代。79は染付碗の蓋。外表面は蓋周辺に柳葉文、千鳥文、内面は周辺に四方博文、見込みに二重圓線と千鳥文が描かれている。80～82は摺鉢である。80は丹波焼。大平茂氏編年(大平1992)のV型式(17世紀後半)。81は備前焼。82は口縁部の内面に凸帯が廻るもので、白神典之氏編年(白神1988)の堺摺鉢I型式2段階(18世紀前半～中葉)にあたる。遺物からみて帰属時期は18世紀末～19世紀初頭に推定される。

S K27

北区中央部の2 D 地区で検出した。南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.6m、南北幅0.9m、深さ0.34mを測る。埋土は6層から成る。遺物は古墳時代前期～中期に比定される土師器、須恵器、製塙土器等の小片が少量出土したが図化し得たものはない。

S K28(第35図)

S K27の東に隣接する。不定形を呈するもので、東部で S E 9 を切っている。東西幅1.7m、南北幅1.45m、深さ0.25mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代後期に比定される土師器、須恵器の小片が少量出土したが図化し得たものはない。

S K29(第35図)

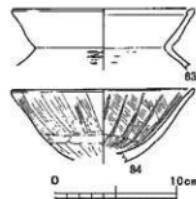
北区中央部の2 E 地区で検出した。不整形の土坑で、一部が二段掘方を呈している。東西幅1.13m、南北幅1.4m、深さ0.35mを測る。埋土は6層から成る。遺物は鎌倉時代末期に比定される土師器、瓦器の小片が極少量出土したが図化し得たものはない。

S K30(第35図、図版一三)

北区東部の2 F 地区で検出した。南部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.68m、南北幅1.23m、深さ0.7mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代中～後期の須恵器片、飛鳥・奈良時代の土師器片、平安時代末期の土師器小皿片が少量出土したが図化し得たものはない。

S K31(第35・36図、図版二〇)

北区東部の2 G 地区で検出した。南北方向に長い橢円形を呈するもので、東西径0.65m、南北径2.43m、深さ0.2mを測る。埋土は3



第36図 S K31出土遺物
実測図

層から成る。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される布留式甕・高杯の小片が少量出土している。2点(83・84)を図化した。83は布留式甕の小片である。復元口径14.8cmを測る。口縁部は丸味を持って「く」の字に屈曲し、端部は内傾肥厚して終わる。体部外面は一次調整のタテハケの後、水平方向にヨコハケを施す。体部内面のヘラケズリは屈曲部のやや下方以下を横位方向に削る。色調は淡橙色である。胎土中に3mm以下の長石・石英が散見される。84は高杯の杯部である。杯部は完存しており、口径14.8cmを測る。杯部内面はハケにより器面を平滑にした後、放射状にヘラミガキ。杯部外面は杯部上半が弱いヨコナデ、下半は縦位のヘラケズリが施されている。色調は灰白色。胎土は粗く1mm以下の長石・石英・黒雲母を多量に含んでいる。共に、古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。

S K32(第35図)

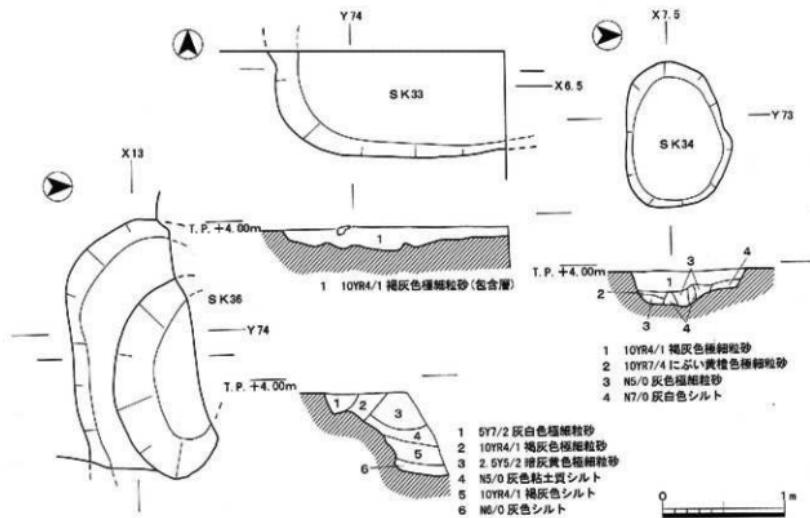
北区東部の2GH地区で検出した。北部はSD17に切られている。検出部分で東西幅2.47m、南北幅0.93m、深さ0.85mを測る。埋土は4層から成る。出土遺物には弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、瓦器、屋瓦等の時期幅がある雑多な土器類が少量出土しているが、図化し得たものはない。

S K33(第37図)

北区北東隅の1H地区で検出した。北部および東部が調査区外に至る。検出部分で東西幅1.93m、南北幅0.87m、深さ0.19mを測る。埋土は10YR4/1褐色極細粒砂の単一層である。遺物は古墳時代中～後期に比定される土師器類が極少量出土したが、図化し得たものはない。

S K34(第37図)

S K33の南西部で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西径1.2m、南北径0.85



第37図 S K33・34・36平面図

m、深さ0.23mを測る。埋土は4層から成る。遺物は古墳時代後期に比定される土師器、須恵器の小片が極少量出土したが図化し得たものはない。

S K35

S K33の南部で検出した。東部は調査区外、南部は擾乱により削平を受けている。検出部分で、東西幅0.9m、南北幅1.75m、深さ0.18mを測る。埋土は1層から成る。遺物は出土していない。

S K36(第37図)

北区東端の2H地区で検出した。北部はS D17に切られ、東部は調査区外に至る。検出部分で東西幅2.1m、南北幅1.17m、深さ0.66mを測る。埋土は6層から成る。遺物は鎌倉時代に比定される土師器、須恵器、瓦器等の小片が極少量出土したが、図化し得たものはない。

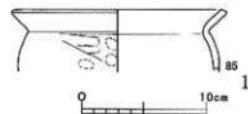
溝(S D)

S D 1(第38・39図、図版一四・二〇)

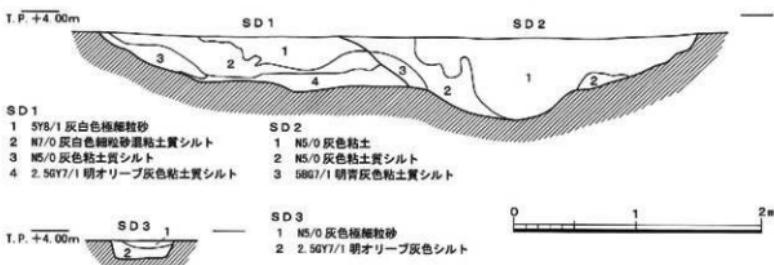
南区西端の3A地区で検出した。第5層上面が構築面である。南北に伸びるもので、北部は調査区外に至り、東肩はS D 2に切られている。西肩は二段掘方を有する。検出長6.0m、幅0.9m、深さ0.45mを測る。埋土は4層に分層が可能で、下部層では粘土質シルトを主体とするが、最上層に流水を示す極細粒砂の堆積が見られる。遺物は古墳時代前期～平安時代前期に比定される土師器、須恵器が少量出土している。土師器甕の小片1点(85)を図化した。復元口径16.4cmを測る。平安時代前期に比定される。

S D 2(第39・40図、図版一四・二〇)

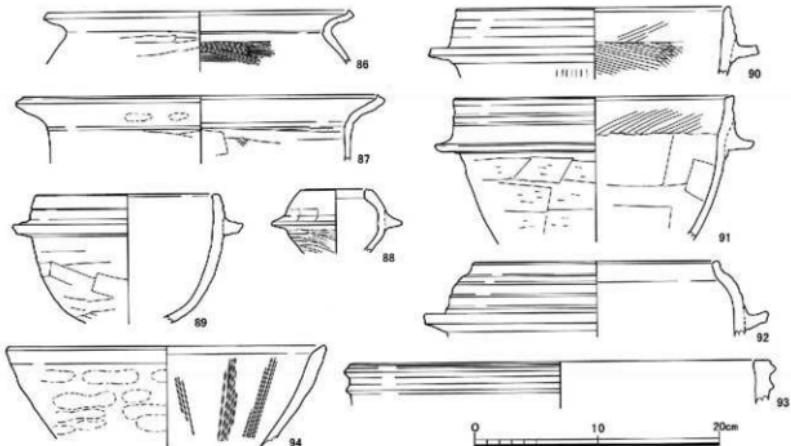
S D 1の東に並行して伸びるもので、S D 1と同様、第5層上面が構築面である。西肩はS D 1を切り、南部では西側に屈曲する。二段掘方を呈するもので、検出長10.0m、幅2.88～3.5m、深さ0.66mを測る。埋土は粘土質シルト～粘土を主体とする3層から成る。遺物は古墳時代初頭～室町時代後期に至る時期幅のある雑多な遺物が多量している。そのうち、室町時代中期～後期を中心とした9点(86～94)を図化した。86は大和型土師器羽釜の小片である。「く」の字に屈曲する口縁部を有するもので、口縁端部は外傾し、幅広の端面を形成している。菅原正明氏編年(菅原1982)の大和I 2 b型(16世紀前半)にあたる。87は大和型土師器土鍋の小片である。外面は全面に



第38図 S D 1 出土遺物実測図



第39図 S D 1～S D 3断面図



第40図 SD 2出土遺物実測図

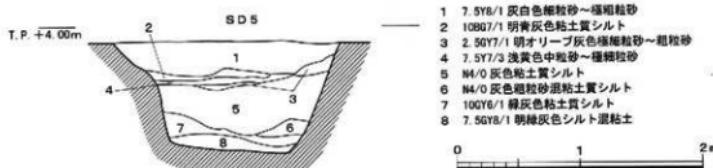
煤の付着が認められる。16世紀中葉。88は小形の瓦質羽釜である。鍔は体部の中位に水平方向に付く。復元口径5.8cm、復元鍔径10.6cmを測る。89～91は瓦質羽釜の小片である。89がやや小振りで口径14.8cm、鍔径18.6cmを測る。3点共に森島編年のII型式(河内産)に分類されるもので、89が15世紀後半、90・91が16世紀前半に比定される。92は内湾して伸びる頸部外面に3条から成る段が付く土師器羽釜である。森島編年のI型式に分類される。16世紀前半に比定される。93は瓦質の深鉢である。いわゆる奈良火鉢に分類されるもので、立石堅志氏編年(立石1995)の深鉢Iにあたる。15世紀代に比定される。94は瓦質摺鉢である。摺り目は1単位5条で間隔をあけて施されている。15世紀後半に比定される。出土遺物から廃絶時期は室町時代後期(16世紀中葉)が推定される。

SD 3 (第39図)

SD 2の東側に並行して伸びる。検出長4.3m、幅0.26～0.58m、深さ0.14mを測る。埋土は2層である。遺物は古墳時代後期～鎌倉時代に至る土師器、須恵器、瓦器、屋瓦等の小片が少量出土したが図化し得たものはない。

SD 4

南区西部の4B地区で検出した。東～西に伸びる小溝で東端がSD 5、西端がSP 9に切られ



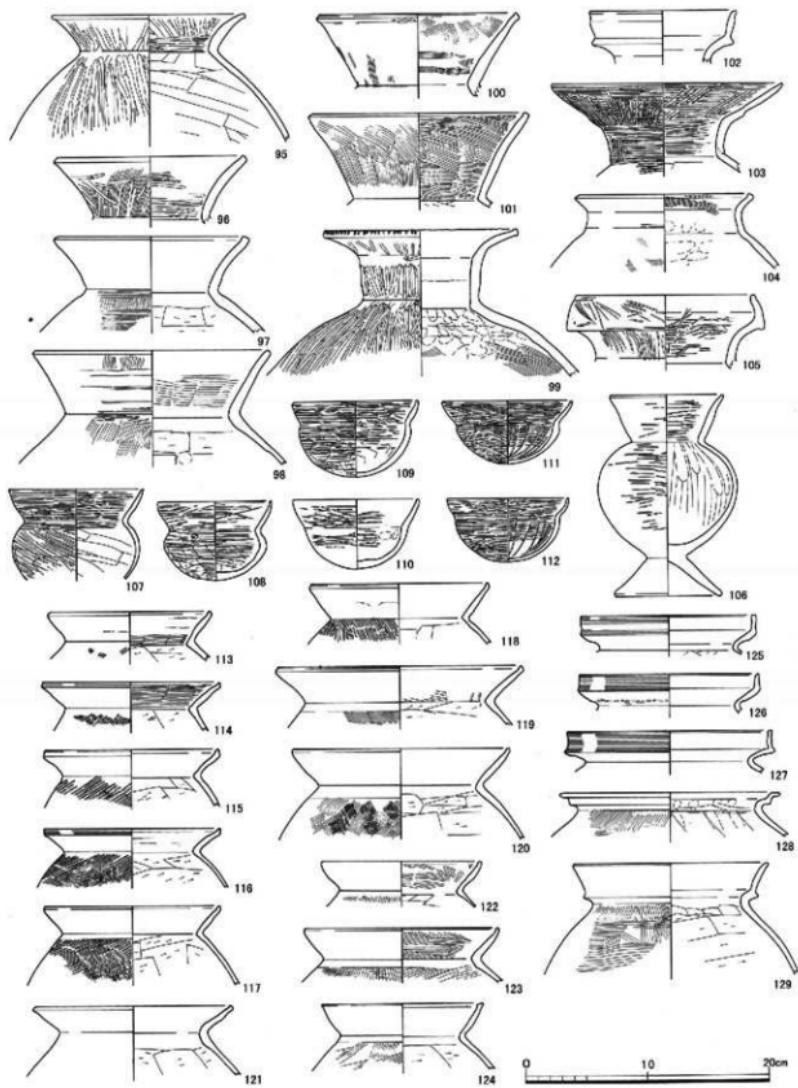
第41図 SD 5断面図

ている。検出長1.1m、幅0.42m、深さ0.07mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂質シルトである。遺物は庄内式壺の小片は極少量出土している。

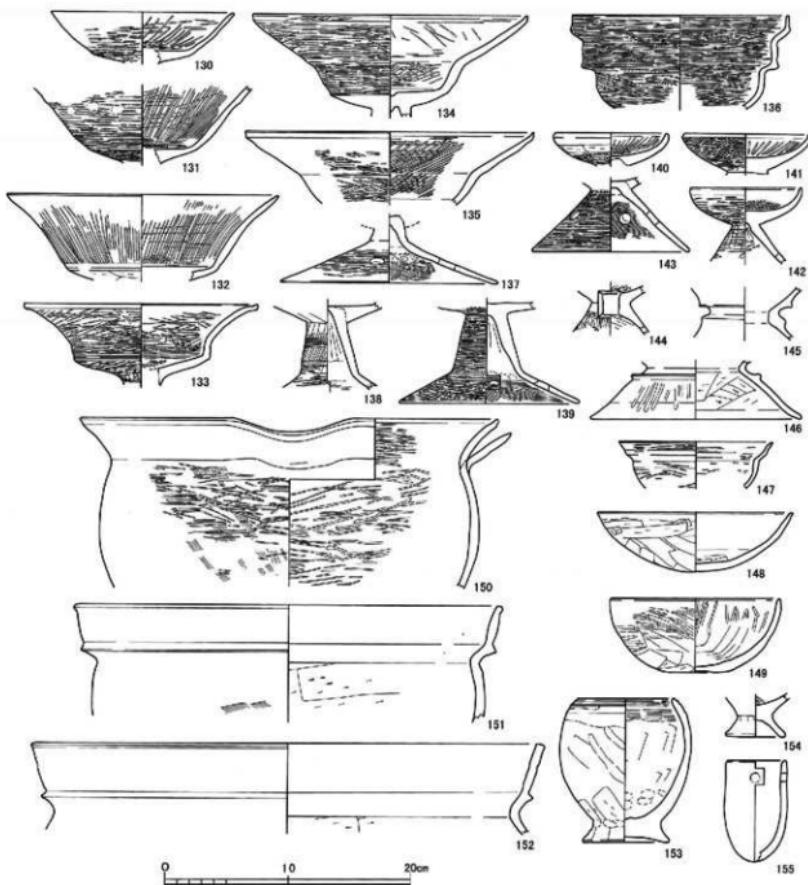
S D 5 (第41~43図、図版二〇~二二)

南区の3・4B地区で検出した。検出部分の南部で屈曲して流路を北東方向に変えている。検出長11.5m、幅2.1m、深さ0.92mを測る。断面形状は台形状で、溝底部の標高から北に流下するものと推定される。埋土は8層に分層され、上部に流水を示す水成層4層(1~4層)、中層から最下部にかけて粘土質シルト~シルト質粘土が優勢な4層(5~8層)が堆積している。遺物は主に5層から古墳時代初頭前半(庄内式古相)~古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器類がコンテナ5箱程度出土しているが、小片化したものが大半で時期的には古墳時代前期前半(布留式古相)のものが大半を占めた。古式土師器61点(95~155)を図化した。出土遺物の器種分類については(原田1993)に従った。95~98は広口壺Aの小片である。外面の器面調整はヘラミガキを施す95とハケを多用する96~98がある。97にみる口縁端部の内面肥厚や、96・97の体部内面におけるヘラケズリが屈曲部のやや下方以下に施される行為は、布留式壺の製作技法と共通している。色調は95~97が灰白色、98が橙色である。99は広口壺Bである。口縁端面にキザミ目を持つ。口径15.5cm、頸部径9.5cmを測る。色調は褐色。生駒西麓産である。100・101は大形直口壺の口縁部片である。101の口縁端部は内面肥厚するもので、布留式古相に盛行するものである。色調は100が灰白色、101が褐色である。101が生駒西麓産。102・103は複合口縁壺の小片である。102は小形で復元口径11.8cmを測る。類例に乏しく搬入品の可能性が高い。色調は赤橙色。103は複合口縁壺B₁にあたる。精製品で色調は橙色。布留式古相に比定される。104は東四国系の広口壺小片である。短く伸びる頸部から弱く屈折する口縁部が付くもので、端部は外傾し小端面を形成している。105も104と同様、東四国系の複合口縁壺である。大久保哲也氏編年(大久保1990)の下川津V式、(大久保2003)の⑥段階(庄内式後半~布留式古相に併行)にあたる。104・105は共に実体鏡(30倍)により角閃石の含有を認めるもので、讃岐地方産の「下川津B群土器」と称されるものにあたる。106は台付きの直口壺である。小形品で、口径9.0cm、器高16.4cm、脚部径9.0cmを測る。色調は橙色。小形丸底壺は6点(107~112)図化した。そのうち、109・111・112は光形品である。107~109はII径が体部最大径を凌駕する小形壺B₂、110~112が半球形の体部に大きく開く口縁部が付く小形壺B₃に分類される。精製品で内外面ともに、横位のヘラミガキを多用している。色調は108が淡灰褐色、他は赤褐色系を示す。布留式古相に盛行するものである。

113~130は壺である。113~117は庄内式壺である。全て「く」の字に鋭く屈曲する口縁部を有する壺で、口縁端部が外傾ないしは垂直方向に小端面を作る113~116とやや丸みを持って終わる117がある。体部外面のタタキは右上がりで、115がやや太く4本/cmの他は、6本/cm程度の細筋タタキが行われている。体部内面のヘラケズリは屈曲部以下を横方向に削る。口縁部内面にはヨコハケを施す113・114がある。全て角閃石を含む生駒西麓産。115が庄内式古相、他は庄内式新相~布留式古相に比定される。118・119は体部外面に縦位のハケを施すもので、布留式影響の庄内式壺(壺D)にあたる。118が生駒西麓産。119が非生駒西麓産である。120~123は布留式壺の属性の一部を持つ布留傾向壺で壺Eに分類される。120・122が生駒西麓産。121・123が非生駒西麓産である。124は布留式壺(壺F)である。やや小形品で、復元口径13.0cmを測る。非生駒西麓産。125~127は吉備系壺の小片である。口縁部外面の沈線や口縁端部下の稜線鈍化の特徴から、127が



第42図 SD 5 出土遺物実測図-1



第43図 S D 5 出土遺物実測図-2

125・126に比して古い様相を示している。127が高橋護氏編年(高橋1988)のX期前半、125・126がX期後半に比定される。3点ともに搬入品である。128はS字状口縁台付甌と称される東海系の甌である。赤塚次郎氏編年(赤塚1990)による廻間編年の甌C₄にあたり、畿内の布留式古相に併行する廻間Ⅲ式1段階以降に盛行するものとされている。129は山陰系の甌である。色調は灰白色である。

130~139は高杯である。130~133は有稜高杯の杯部小片である。杯部内外面に横位のヘラミガキを施す精製品の130・131が庄内系、縦位のヘラミガキを施す132が弥生系に分類される。133は稜部分から上方に短く伸びた後、大きく外反して伸びる口縁部が付く有稜高杯である。河内地域

においては類例の乏しいもので、搬入品の可能性がある。134・135は二段屈曲高杯(高杯B₂)である。共に精製品で、色調は134が淡橙色、135が淡灰褐色である。136は杯口縁部が二段に屈曲する精製の高杯である。器面調整は全体に丁寧で、内外面共に横位のヘラミガキを多用している。本例は他に類例が無く、庄内式古段階に吉備地方を中心に分布する二段屈曲高杯に口縁部を付加した形態の高杯に類似していることから、高杯としたが鉢である可能性もある。137～139は高杯脚部である。137が楕円高杯、138・139が有稜高杯である。3点ともに精製品で、色調は赤橙色である。

140～142は小形器台である。杯部が残存している140～142は杯部内面に放射状ヘラミガキが施されている。144は中空の器台である。145・146は山陰系の鼓形器台である。145は外面および杯部内面に赤色顔料が塗布されている。

147～152は鉢類である。147は二段屈曲鉢(鉢H)である。148・149は楕円形を呈する小形鉢である。150～152は大形鉢である。150は流し口を有する。150が在地産、151・152が山陰系である。153は上げ底状の脚部を有する台付鉢である。口径7.7cm、器高11.8cm、脚部径6.8cmを測る。類例の少ない器種である。色調は褐灰色である。生駒西麓産である。

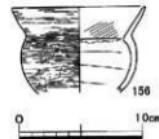
154は製塙土器と推定される。外面の器面剥離が顕著である。155は蛸壺である。筒型の体部を持つ丸底の蛸壺である。口縁部付近に1孔を穿つ。口径4.8cm、全長8.3cmを測る。当該期の出土例は稀である。古墳時代初頭(庄内式期)のものが一部含まれるが、大半は古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。

S D 6 (第45図、図版一四)

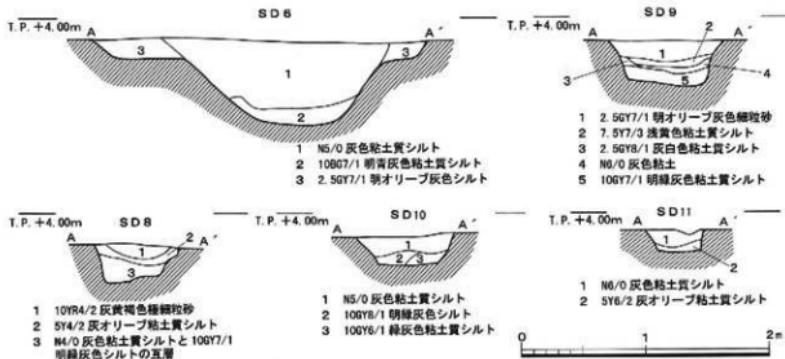
南区中央部の3・4BC地区で検出した。南北に伸びるもので、二段掘方を有する。検出長10.0m、幅3.6m、深さ0.68mを測る。埋土はシルト～粘土質シルトを主体とする3層から成る。遺物は古墳時代後期～江戸時代後期に比定される雑多な遺物が出土している。出土遺物の時期や形状から、北区で検出したSD18に合流するものと考えられる。

S D 7

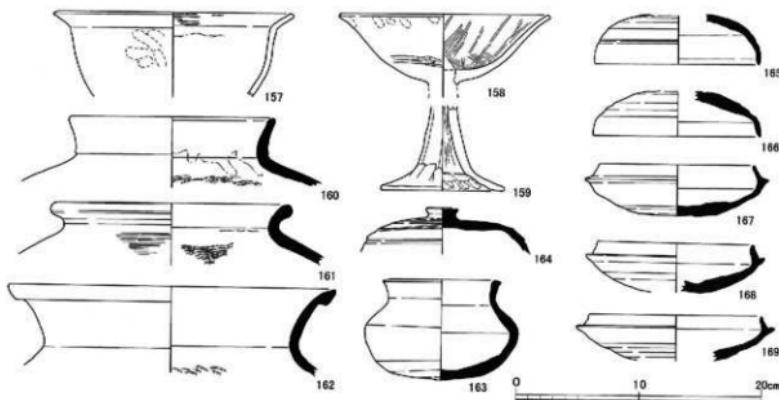
南区中央部の3C地区で検出した。東～西に伸びる小溝で、西端はSD



第44図 SD 8出土
遺物実測図



第45図 SD 6・8～11断面図



第46図 S D 9出土遺物実測図

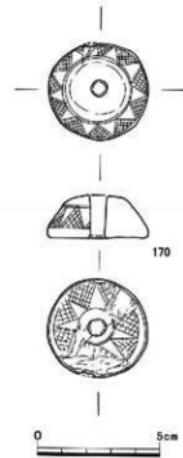
6に切られている。検出長2.1m、幅0.6~0.7m、深さ0.38mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂質シルトである。遺物は古墳時代前期前半~江戸時代後期に比定される雑多な遺物が少量出土している。

S D 8(第44・45図)

南区中央部の4C地区で検出した。北北東~南南西に伸びるもので、南部は調査区外に至る。検出長2.95m、幅0.75m、深さ0.3mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器類が極少量出土している。小形丸底壺1点(156)を図化した。口径が体部最大径を凌駕する精製の小形丸底壺(小形壺B₂)の小片である。復元口径10.8cmを測る。古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。

S D 9(第45・46図、図版二三・二四)

南区東部の3・4C地区で検出した。北西~南東に伸びるもので、両端は共に調査区外に至る。検出長10.6m、幅0.78~1.45m、深さ0.38mを測る。埋土は5層から成る。遺物は古墳時代後期後半を中心とする、土師器、須恵器、石製品、馬齒等が出土している。13点(157~169)を図化した。157~159は土師器である。157は中形鉢の小片である。復元口径18.8cmを測る。158は高杯の杯部である。稜部は退化し丸味を持つ。159は高杯の脚部である。160~169は須恵器である。160~162は甕の小片である。口縁端部は直口の160、外側に大きく肥厚する161、外側に肥厚させ、幅広の端面を形成する162がある。163は有蓋短頸壺である。口径8.4cm、器高8.2cm、体部最大径12.5cmを測る。色調は淡灰色で焼成は不良である。164は有蓋高杯の蓋である。天井部外面にカキメ調整が行われている。165・166は杯蓋の小片。共に稜が退化した形態である。田辺編年のMT85型式。167~169は杯身の小片である。167が田辺編年のMT85型式。168・169が田辺編年TK43型式にあたる。



第47図 S D 10出土遺物実測図

出土遺物から遺構の廃絶時期は古墳時代後期末(6世紀末)が推定される。

S D 10(第45・47図、図版二四)

S D 9 の東に並行して伸びている。検出長10.5m、幅0.53~0.83m、深さ0.23mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代前期前半~後期後半に比定される土師器、須恵器、石製品等が出土したが、図化可能なものは滑石製紡錘車1点(170)のみである。裏面の一部を欠く以外は完存している。断面台形状の形状で、上幅2.8cm、下幅4.2cm、厚さ1.8cmを測る。中央部に径6~7mmを測る孔が穿たれている。鋸歯文が側面に11個、裏面に8個線刻されている。共伴遺物からみて、古墳時代後期のものと推定される。

S D 11(第45図)

南区東部の3C・D地区で検出した小溝である。北西~南東に伸びるもので、北西端はS D 10に切られている。検出長1.75m、幅0.5m、深さ0.17mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする2層から成る。遺物は弥生時代後期の鉢が1点のみ出土している。

S D 12

南区東部の3・4D地区で検出した。南~北に伸びるもので、南部が調査区外に至る他、SK 10・SK 11を切り、S D 13に切られている。検出長7.1m、幅0.25~0.35m、深さ0.17mを測る。埋土はN4/0灰色粘土の單一層である。遺物は古墳時代初頭~後期後半に比定される土師器、須恵器の小片が少量出土している。

S D 13

南区南東部の4D地区で検出した。東~西に直線的に伸びるもので、S D 12を切り、東端でS D 14に切られている。検出長6.1m、幅0.47~0.53m、深さ0.15mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代前期の土師器類の小片、鎌倉時代後期の瓦器碗小片等が極少量出土している。図化していないが出土した瓦器碗の特徴から、遺構の廃絶時期は鎌倉時代後期(13世紀後半)が推定される。

S D 14

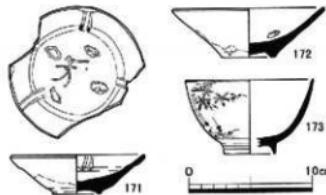
南区南東部の4D地区で検出した。大半が調査区外に至るため詳細は不明である。検出長2.68m、幅1.35m、深さ0.38mを測る。埋土は2.5Y6/2灰黄色極細粒砂である。古墳時代後期の土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

S D 15

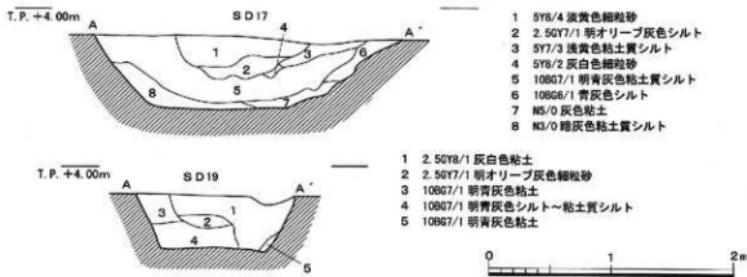
北区中央部の1・2E地区で検出した。北西~南東に直線的に伸びるもので、南端はS D 18に切られている。検出長4.2m、幅0.2~0.23m、深さ0.15mを測る。埋土は2層で上層が2.5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂、下層が10YR4/2灰黃褐色極細粒砂である。遺物は古墳時代後期に比定される土師器甕の小片が1点のみ出土している。

S D 16

北区東部の2G・H地区で検出した。東~西に直線的に伸びるもので、東端は調査区外に至る。検出長10.2m、幅0.56~0.65m、深さ0.35mを測る。埋土は4層から成る。遺物は室町時代後期に比定される鉢の小片が出土している。



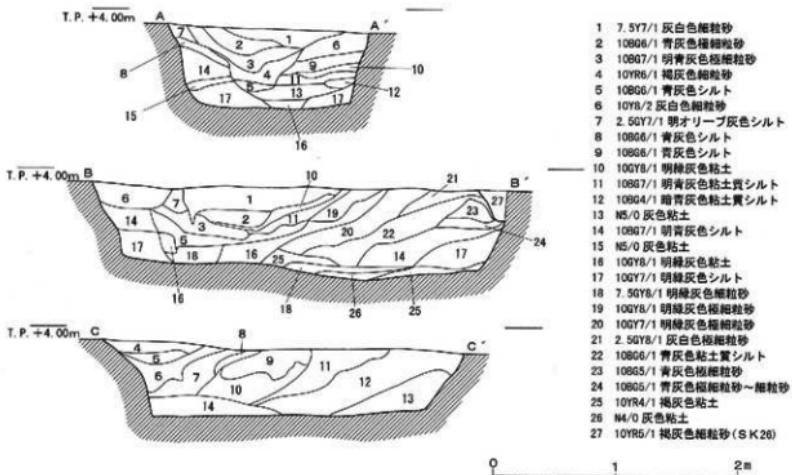
第48図 S D 17出土遺物実測図



第49図 S D17・19断面図

S D17(第48・49図、図版二四)

北区東部の1・2G、2H地区で検出した。東～西に伸びるもので、東端は調査区外に至る他、西端ではS D18、S D19に合流している。検出長11.0m、幅1.45～2.58m、深さ0.6mを測る。埋土は8層から成る。遺物は古墳時代前期～江戸時代後期に比定される雑多な遺物が出土している。3点(171～173)を図化した。171・172は唐津系皿である。体部の形状から171が折縁形、172が丸形に分類される。高台は171が輪高台、172が基筒底で兜巾が認められる。共に部分施釉で、内底面に胎土目を持つ。釉色は171が灰緑色、172が灰オリーブ色。171の見込みに「十」、内面体部に平行2本を一単位とする文様を白色化粧土により5箇所に描く。17世紀前半。173は肥前系碗である。体部外面に竹文を描く。掲載していない遺物の中には、江戸時代後期のものが含まれており、廃絶時期はS D18と同様18世紀後半が推定される。ただ、S D18からは、17世紀中頃以降の遺物が含まれることから、17世紀前半の遺物が出土した本遺構がS D18より早くに開削された溝の可能性が高い。



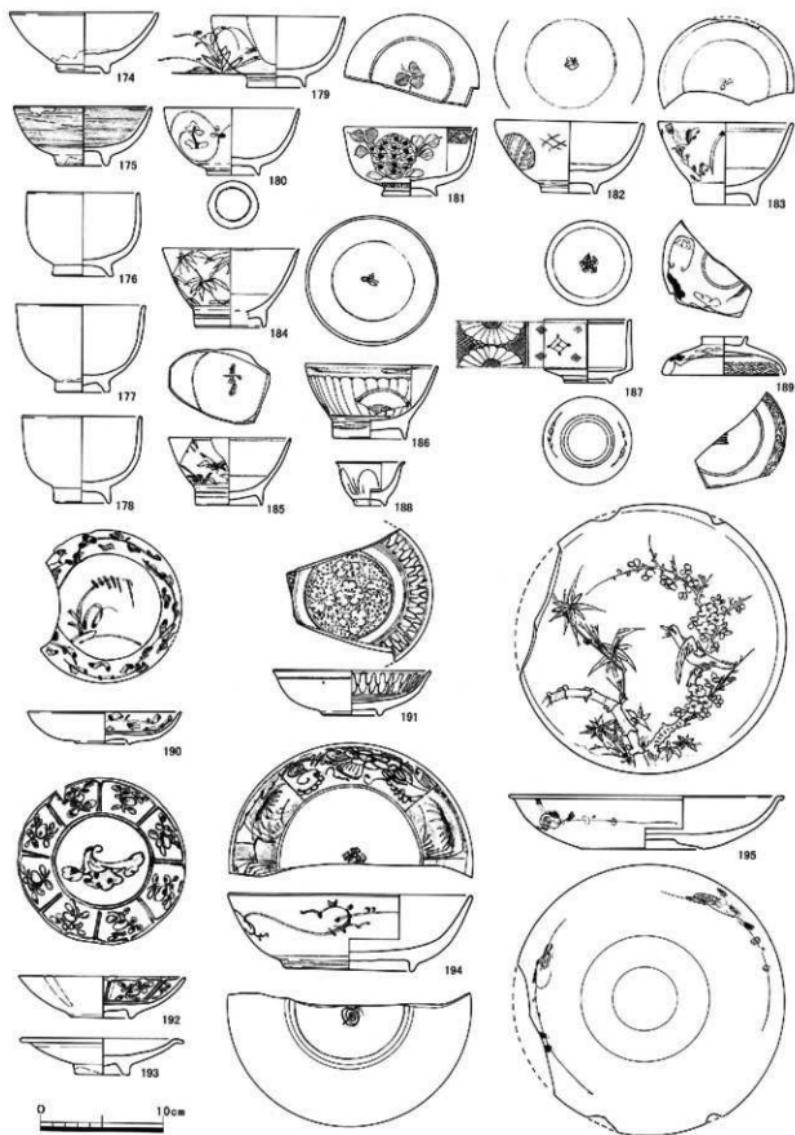
第50図 S D18断面図

S D 18(第50~53図、図版一五・二五~二〇)

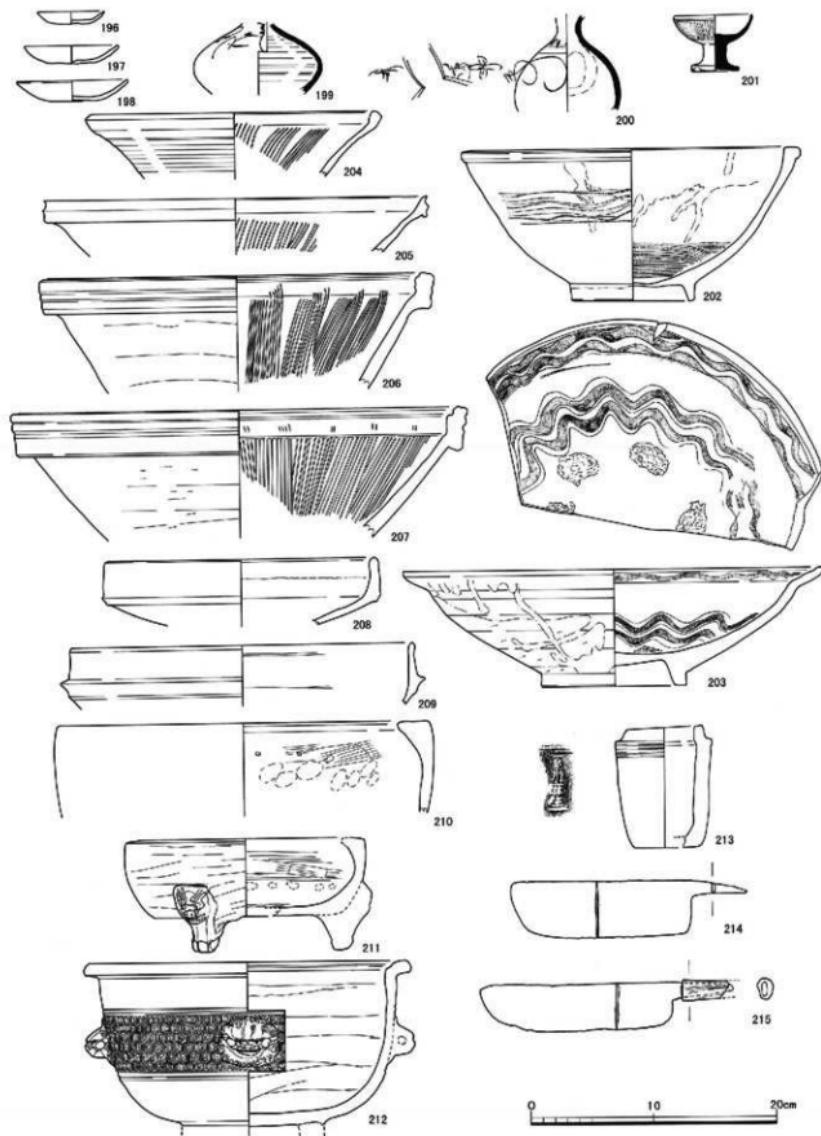
北区の中央部を東~西に伸びる規模の大きい溝で、東部の1G地区付近でS D17とS D19に合流している。検出長39.0m、幅1.68~4.1m、深さ0.52~0.73mを測る。断面形状は台形状で、埋土は26層に分層が可能である。肩相は上部を中心に細粒砂が優勢であり、比較的の流勢が強い溝であったことが推定される。なお、溝底の標高からみて流路方向は東から西が推定される。遺物は古墳時代中期~江戸時代後期に比定される土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、国産陶磁器、屋瓦、木製品、石製品、金属製品がコンテナ5箱程度出土している。江戸時代中期~後期を中心とする46点(174~219)を図化した。174~177は唐津碗である。174の釉色はオリーブ灰色、内底面に蛇の目釉剥きがある。175は刷毛目唐津。釉は疊付以外を全面施釉。176の釉色は灰色で光沢があり、細かい貫入が入る。174と同様、釉は疊付以外を全面施釉。177は藁灰白釉で高台部を除いて施釉されている。178は黄灰色の釉色で京焼風である。179~182は肥前系磁器碗である。染付け文様は179が草花文、180が唐草文。181が外面に紫陽花文、口縁部内面に四方傳文、見込みに三つ葉文。182は外面に丸文、見込みにコンニャク印判五弁花文。内底面の蛇の目釉剥きが179・180・182にある。183~186は広東碗である。外面の染付け文様は183が仙芝文。184・185が簡文。186が連子と扇子。見込みの文様は不明の184以外では、183・185が点文、186が寿字文である。187は筒形碗の完形品である。体部外面は4区画された中に菊花文と菱形文を交互に配する、見込みにコンニャク印判五弁花文。188は口縁部が端反りする杯である。外面に蘭文。189は蓋である。上面に草文、口縁部内面に四方傳文。190~195は皿である。190は体部に唐草、見込みに草文。全体に吳須の発色は悪い。191は体部に網目、見込みに花文。192は体部に草文、見込みに鳥。193は口縁部が折線形の青磁皿で、内底面に蛇の目釉剥きがある。1650~1680年代。194は深みのある皿である。体部内面の4区画内に竹文と草花文を交互に描く。見込みにコンニャク印判五弁花文。体部外面に唐草文。高台内に寿の銘款。195は蛇ノ目凹形高台を持つ中皿である。内面に梅・竹・鳥、外面上に草文を描く。1730~1750年代。

196~198は柿釉皿である。196・198の裏面に糸切り痕がある。199は油壺である。外面に草文を描く。201は染付けの仏飯器である。体部外面に松葉文を描く。202・203は唐津の大形鉢である。202は暗灰色の胎土で、体部外面および内底面に白泥の刷毛目装飾が行われている。1690~1780年代。203は折縁の口縁部を有する。内面は白泥で波状文を描いた後、緑色および白色の釉、外面は緑灰色と一部に白色の釉をかける。内底面に砂目。

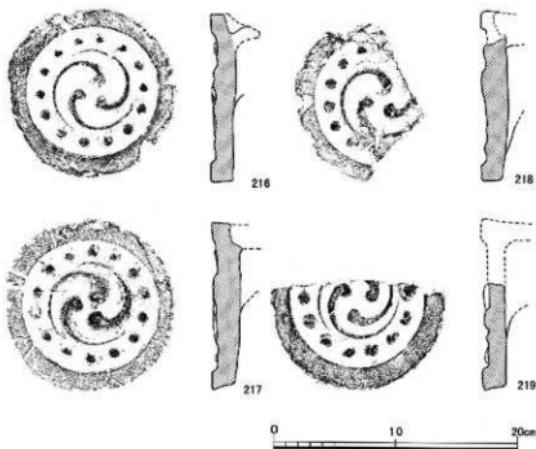
204~207は陶器摺鉢である。204・205は共に丹波焼である。205は大坪編年のⅦ型式(18世紀中)に比定される。206・207は堺摺鉢である。色調は206が赤褐色。207が褐灰色。白神編年のⅡ型式1段階(18世紀後半)に比定される。208・209は土師器炮烙である。横山洋氏編年(横山1995)の208がD類、209が口縁下年に突帯を持ち、口縁部が直立する形態で、奈良盆地の中・南部産とされるF₁類にあたる。共に18世紀代のものである。210~212は瓦質火鉢である。210・211は内折するII型端部を有する210が大形、211が小形で獸脚が付く。212は深めの体部に外折するII型端部を有する火鉢で、完形ならば高台部が付く。体部外面に獅子頭の把手と龟甲文で構成される文様が廻る。213は焼塙壺である。「泉州麻生」の刻印を持つ。横山編年のG類にあたり18世紀前半に比定される。214・215は包丁である。共に菜切り包丁で215は柄の一部が残存している。216~219は三巴文軒丸瓦である。216~218は左巻き三巴文である。巴は隆起が高く、丸味のある頭部から約半周し



第51図 S D 18出土遺物実測図-1



第52図 S D 18出土遺物実測図－2



第53図 S D18出土遺物実測図－3

て尾部に至る。珠文はやや隆起の低い大粒のもので15個配されている。外縁が幅狭で低い。焼成はやや甘く、色調は淡灰色を呈する。3点ともに範傷が一致することから、同範瓦と考えられる。219は隆起のやや低い巴が半周以上廻る。珠文は隆起の低い大粒で密に配されている。焼成は良好で、色調は黒灰色である。出土遺物の時期としては17世紀中葉～18世紀後半に比定される。溝の廃絶時期は18世紀後半が推定される。

S D19(第49図)

北区東部の1 G地区で検出した。南一北に伸びるもので、北が調査区外に至る。南端でS D17とS D18が合流している。検出長1.5m、幅1.33m、深さ0.43mを測る。断面形状は台形で、埋土は5層に分層される。遺物は出土していない。

小穴・柱穴(S P)

南区

南区では82個(S P 1～S P 82)の小穴・柱穴を検出した。中央部から東部にかけての3・4 D地区に集中しており、この部分で掘立柱建物2棟(S B 1・S B 2)を検出した。平面形状には、円形、楕円形、方形、隅丸方形、不定形がある。規模は径0.15～1.47m、深さ0.03～0.59mを測る。

第1表 南区 小穴・柱穴(S P)法量表(単位cm)

遺構名	地区	平面形	長径(透)	短径(透)	深さ	埋 土	出土遺物	時期・備考
S P 1	3 B	円形	45	36	24	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P 2	"	"	46	37	20	"		
S P 3	3 A	"	36	34	25	"		
S P 4	3 B	"	31	30	22	"	古式土師器	
S P 5	"	不定形	30	28	5	"		
S P 6	"	方形	52	40	8	"	古式土師器	
S P 7	3 A	円形	35	30	21	10YR4/1褐色砂質シルト		

遺構名	地区	平面形	長径(辺)	短径(辺)	深さ	埋 土	出土遺物	時期・備考
S P 8	4 B	円形	47	45	13	10YR4/1褐色灰色砂質シルト	土師器・須恵器	6 C
S P 9	4 A B	不定形	76	35	6	"	古式土師器	
S P 10	4 A	円形	30	29	14	"		
S P 11	3 B	方形	38	33	11	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P 12	"	楕円形	105	50	10	"	土師器・須恵器	7 C
S P 13	3・4 B	"	25	15	4	"		
S P 14	4 B	円形	65	60	6	"	土師器・須恵器・ 台石	5 C
S P 15	3 C	"	25	22	27	"		
S P 16	"	"	45	40	22	"	古式土師器	
S P 17	"	不明	147	73	35	"	古式土師器	
S P 18	"	楕円形	48	38	7	10YR4/1褐色灰色砂質シルト	土師器・須恵器	6 C
S P 19	"	円形	35	31	9	"	古式土師器	
S P 20	"	楕円形	42	32	18	"	土師器・須恵器	6 C 後
S P 21	"	"	54	30	7	"		
S P 22	"	円形	44	40	20	"	土師器・須恵器	6 C
S P 23	"	"	45	39	32	5Y4/1灰色砂質シルト	古式土師器	
S P 24	4 C	隅丸方形	62	45	12	"	須恵器	6 C 中
S P 25	"	不明	76	48	23	"	古式土師器	庄内
S P 26	"	"	63	57	25	"	古式土師器	
S P 27	3 C D	円形	62	54	30	"	古式土師器	
S P 28	3 C	楕円形	73	42	43	"	古式土師器	布留占
S P 29	"	円形	30	27	29	10YR4/1褐色灰色砂質シルト		
S P 30	"	楕円形	62	40	40	"	土師器	3 C
S P 31	3 C D	不定形	36	34	3	"	古式土師器	
S P 32	3 D	円形	70	65	20	"		
S P 33	"	"	84	70	34	0YR4/1褐色灰色細粒砂 N4/0灰色粘土と10GY8/1明緑 灰色シルトの互層	古式土師器	
S P 34	"	不明	55	45	20	N4/0灰色極細粒砂 2.5GY7/1明オリーブ灰色	古式土師器	
S P 35	"	"	83	45	41	N4/0灰色極細粒砂 N4/0灰色粘土と10GY8/1明緑 灰色シルトの互層	古式土師器	
S P 36	"	楕円形	72	60	40	N4/0灰色極細粒砂 10YR4/1褐色灰色細粒砂	古式土師器	
S P 37	"	"	46	28	21	10YR4/1褐色灰色砂質シルト	土師器・須恵器	6 C
S P 38	"	円形	78	67	25	"	古式土師器	
S P 39	"	不明	80	40	14	"	土師器・須恵器	S B 1
S P 40	"	円形	45	35	14	"	古式土師器	
S P 41	"	不定形	105	44	13	"	古式土師器	S B 1
S P 42	"	楕円形	104	85	42	N4/0灰色極細粒砂 N4/0灰色粘土と10GY8/1明緑 灰色シルトの互層 10YR6/4にぶい黃褐色極細粒砂	古式土師器	
S P 43	"	"	110	68	17	N4/0灰色極細粒砂	土師器・須恵器	S B 1 6 C
S P 44	"	円形	33	25	18	10YR4/1褐色灰色砂質シルト		
S P 45	"	不明	34	27	20	"	弥生上器	弥生後半
S P 46	"	円形	47	39	23	"	古式土師器	
S P 47	"	"	35	27	28	"	古式土師器	

遺構名	地区	平面形	長径(辺)	短径(辺)	深さ	埋 土	出土遺物	時期・備考
S P48	3 D	円形	44	38	27	10YR4/1褐色砂質シルト	土師器・須恵器・瓦器	
S P49	"	楕円形	82	57	30	"	古式土師器	
S P50	"	円形	25	20	14	5Y4/1灰色砂質シルト	古式土師器	
S P51	"	"	57	52	13	N4/0灰色極細粒砂	古式土師器	
S P52	"	"	50	40	15	"	古式土師器	
S P53	"	不明	72	58	39	N4/0灰色極細粒砂 10YR4/1褐色砂質シルト	古式土師器	
S P54	"	楕円形	95	60	59	N4/0灰色極細粒砂 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト	古式土師器	
S P55	"	円形	39	39	26	5Y4/1褐色砂質シルト	古式土師器	
S P56	"	楕円形	58	50	32	N4/0灰色極細粒砂 10YR4/1褐色砂質シルト	土師器・須恵器	S B 1 C
S P57	"	"	105	55	34	N4/0灰色極細粒砂 N4/0灰色粘土	古式土師器	
S P58	"	"	70	52	27	10YR4/1褐色砂質シルト		
S P59	"	円形	43	35	29	"		
S P60	"	楕円形	124	45	22	"	土師器・須恵器	6 C
S P61	"	不明	57	38	18	"		
S P62	"	楕円形	123	48	23	"	土師器・須恵器	S B 2 C
S P63	"	円形	32	29	15	"	古式土師器	
S P64	"	"	21	18	9	"		
S P65	"	"	31	28	7	"	古式土師器	
S P66	"	不定形	125	55	24	N4/0灰色極細粒砂 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト	古式土師器	
S P67	"	円形	60	60	39	N4/0灰色極細粒砂	土師器・須恵器	S B 2
S P68	"	楕円形	114	81	24	N4/0灰色極細粒砂 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト	土師器・須恵器	S B 1
S P69	"	円形	21	20	21	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P70	"	"	22	20	18	10YR4/1褐色砂質シルト	土師器	
S P71	"	不明	60	43	29	"	古式土師器	
S P72	"	"	77	48	59	N4/0灰色極細粒砂 10YR4/1褐色砂質シルト 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト	古式土師器	S B 2
S P73	"	"	110	100	48	N4/0灰色極細粒砂 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト	古式土師器	
S P74	3・4 D	楕円形	73	40	20	N4/0灰色極細粒砂		S B 2
S P75	4 D	円形	35	27	16	10YR4/1褐色砂質シルト		
S P76	"	不明	143	100	23	N4/0灰色極細粒砂 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト	古式土師器	
S P77	"	円形	82	65	22	"	古式土師器	S B 2
S P78	"	"	20	20	20	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P79	"	"	20	20	19	"	古式土師器	
S P80	"	楕円形	83	66	27	N4/0灰色極細粒砂	古式土師器	S B 2
S P81	"	不明	46	40	17	10YR4/1褐色砂質シルト		S B 2
S P82	"	"	41	33	17	10YR4/1褐色砂質シルト	土師器	

遺物が出土した小穴・柱穴は60箇所である。出土遺物には弥生時代後期～飛鳥時代に比定される
弥生土器・古式土師器・上師器・須恵器・石製品等がある。S P 14(229・230)、S P 16(227)、S
P 25(222・228)、S P 27(223・224)、S P 28(225・226)から出土した遺物を掲載した。

北区

北区では101個(S P 83～S P 183)の小穴・柱穴を検出した。その配置関係から掘立柱建物5棟
(S B 3～S B 7)を想定しているが、江戸時代中期に比定されるS D 18が調査区の中央部を横断
しているため、不確定な要素が含まれている。平面形状には、円形、不整円形、楕円形、方形、
隅丸方形、不定形がある。規模は径0.08～1.02m、深さ0.05～0.43mを測る。遺物が出土した小穴・
柱穴は42箇所である。出土遺物には弥生時代後期～古墳時代後期に比定される弥生土器・古式土
師器・土師器・須恵器・石製品等がある。S P 150から出土した遺物2点(220・221)を掲載した。

第2表 北区 小穴・柱穴(S P)法量表(単位cm)

遺構名	地区	平面形	長径(透)	短径(透)	深さ	埋 土	出土遺物	時期・備考
S P 83	1 C	不明	72	47	6	10YR4/1褐色灰色砂質シルト		
S P 84	"	"	77	57	26	10YR5/1褐色灰色板細粒砂 10YR5/3にぶい黃褐色板細粒砂 5Y5/2灰オリーブ色板細粒砂 2.5GY7/1明オリーブ灰色板細粒砂	古式土師器	
S P 85	2 C	不整円形	44	36	14	10YR4/1褐色灰色砂質シルト		
S P 86	1 D	円形	34	27	22	"	土師器・須恵器	6 C
S P 87	2 D	楕円形	49	36	15	"	上師器	S B 4
S P 88	"	"	21	8	14	"	土師器	
S P 89	"	円形	43	40	20	"		
S P 90	"	"	38	32	30	"	上師器	
S P 91	"	不明	61	30	13	"		
S P 92	1 D	楕円形	51	38	12	"		S B 3
S P 93	"	円形	27	26	23	"		
S P 94	"	楕円形	53	35	15	"		
S P 95	"	不定形	40	16	7	"		
S P 96	"	円形	55	52	24	"		S B 3
S P 97	2 D	楕円形	50	35	23	"		S B 4
S P 98	1 D	円形	28	25	26	"		
S P 99	"	楕円形	88	58	25	"	土師器・須恵器	6 C
S P 100	"	"	62	55	18	"		
S P 101	"	円形	45	45	12	"		
S P 102	"	"	35	30	18	"		
S P 103	"	"	23	20	18	"		
S P 104	"	"	40	38	20	"	土師器・須恵器	S B 3 5 C
S P 105	1 E	不定形	76	22	8	"	土師器・須恵器	S B 3
S P 106	1 D	円形	54	53	13	"	土師器・須恵器	6 C
S P 107	"	楕円形	54	39	17	"	須恵器	6 C
S P 108	1・2 D	円形	42	43	20	"		S B 4
S P 110	2 D	"	15	15	17	"	土師器	6 C
S P 111	"	"	27	21	16	"		
S P 112	"	"	33	25	13	"		
S P 113	"	楕円形	43	28	10	"		
S P 114	2 E	円形	55	49	15	"	古式土師器	

遺構名	地区	平面形	長径(辺)	短径(辺)	深さ	堆 土	出土遺物	時期・備考
S P115	2 D E	不明	40	22	11	10YR4/1褐色砂質シルト		
S P116	1 E	円形	39	38	12	"		
S P117	" "	"	19	17	14	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P118	" 不明	"	42	18	2	10YR4/1褐色砂質シルト	土師器・須恵器	5 C
S P119	1・2 E	円形	21	21	16	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P120	1 E	"	17	17	14	"	上飾器	
S P121	2 E	"	20	15	21	"		
S P122	" "	"	18	17	6	10YR4/1褐色砂質シルト		
S P123	" "	"	16	16	6	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P124	" "	"	39	38	11	"		
S P125	1・2 E	不規則形	73	63	24	10YR4/1褐色砂質シルト		
S P126	1 E	円形	21	21	17	5Y4/1灰色砂質シルト		S B 5
S P127	" "	"	47	47	17	"	古式上飾器	
S P128	" "	"	44	40	18	10YR4/1褐色砂質シルト		S B 5
S P129	" "	"	42	35	5	"		S B 5
S P130	" "	"	45	45	16	"	土師器	S B 5
S P131	" "	"	35	32	14	"		S B 5
S P132	" 不定形	"	38	30	14	"		S B 5
S P133	" 圓丸方形	"	53	43	16	5Y4/1灰色砂質シルト	土師器	
S P134	" 円形	"	22	22	25	10YR4/1褐色砂質シルト		
S P135	2 E	"	30	29	7	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P136	" 方形	"	55	30	12	10YR4/1褐色砂質シルト	土師器・須恵器	6 C
S P137	" 円形	"	57	54	18	"	上飾器	
S P138	" 不定	"	55	53	19	"	土師器・須恵器	6 C
S P139	" 円形	"	37	36	40	5Y4/1灰色砂質シルト	古式土師器	
S P140	" "	"	30	28	12	"	上飾器	
S P141	" "	"	48	48	9	10YR4/1褐色砂質シルト		
S P142	" 楕円形	"	50	40	17	"		
S P143	1 F	円形	65	50	14	"	上飾器	
S P144	" 不明	"	67	50	27	"	土師器	
S P145	" 円形	"	65	55	13	"		
S P146	" "	"	50	40	19	"	古式上飾器	
S P147	" 楕円形	"	102	80	30	"	弥生土器・砥石	
S P148	" "	"	40	20	12	10YR6/1褐色細粒砂 N3/0褐色板細粒砂		
S P149	2 F	"	90	60	24	10YR4/1褐色砂質シルト	土師器	
S P150	1 F	円形	58	55	28	"	弥生土器	
S P151	1・2 F	楕円形	60	50	30	"	土師器	
S P152	2 F	円形	25	25	21	"	古式土師器	
S P153	" "	"	13	12	22	"		
S P154	1 F	"	27	18	6	"		
S P155	" "	"	32	30	24	5Y4/1灰色砂質シルト		
S P156	" "	"	25	25	13	10YR4/1褐色砂質シルト		
S P157	2 E	不明	44	26	26	"		
S P158	" "	"	47	33	22	"		
S P159	" 方形	"	40	35	26	"		

遺構名	地区	平面形	長径(辺)	短径(辺)	深さ	埋 土	出土遺物	時期・備考
S P160	2 F	不明	30	30	25	10YR4/1褐色灰色砂質シルト		
S P161	"	楕円形	55	40	29	"		
S P162	"	楕円形	63	42	28	"		S B 6
S P163	"	不明	80	45	43	"	上師器・須恵器	5 C
S P164	"	円形	52	50	33	"		S B 6
S P165	"	不明	50	18	35	"		
S P166	"	楕円形	60	44	40	"	古式土師器	S B 6
S P167	2 F G	不明	55	52	28	"	古式土師器	
S P168	2 G	円形	29	28	21	"		
S P169	"	"	25	25	40	"		
S P170	"	不明	95	37	40	"		
S P171	"	"	18	18	26	"	古式土師器	
S P172	2 F G	"	58	40	32	"	古式土師器	S B 7
S P173	2 G	円形	43	40	24	"		S B 7
S P174	"	"	34	34	21	"		S B 7
S P175	"	不定形	30	28	22	"		S B 7
S P176	"	円形	49	46	12	"	古式土師器	S B 7
S P177	"	"	30	50	30	"	古式土師器	
S P178	"	"	20	20	22	"	古式土師器	
S P179	"	不整円形	68	62	30	"	古式土師器	
S P180	"	不明	54	45	28	"	古式土師器	
S P181	1 G	楕円形	98	58	47	N7/0灰白色極細粒砂 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂 N4/0灰色極細粒砂 10YR3/1黒褐色極細粒砂	古式土師器	
S P182	"	円形	85	80	51	2.5GY7/1明オーリーブ灰色極細粒砂 N6/0灰色極細粒砂 2.5GY7/1明オーリーブ灰色極細粒砂 10RG7/1明吉灰色粘土	土師器・須恵器・ 墨瓦	
S P183	1 H	"	72	70	21	10YR4/1褐灰色砂質シルト		

小穴・柱穴内出土遺物

S P14(第54図、図版三-)

2点(229・230)を図化した。229は須恵器杯蓋の小片である。II辺縁年のM T 85型式(6世紀後半)に比定される。230は台石である。長方体を呈するもので、長さ29cm、幅11.5cm、厚さ10.5cmを測る。1面のみに、研磨痕や筋状の削痕が認められる。石材は砂岩である。

S P16(第54図、図版三-)

土師器高杯1点(227)を図化した。杯部は完存している。口径17.3cmを測る。稜部に丸みを持つもので、高杯A₆にある。杯部外面ともに一次調整としてタテハケを行い、二次調整としてII縁部のみヨコナデを行うため、杯部外面には一次調整のタテハケが一部残る。色調は淡黄褐色。古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。

S P 25(第54図、図版三一)

2点(222・228)を図化した。222は口縁端部が内傾肥厚する布留式甕の属性を一部に持つ布留傾向甕である。色調は淡橙色。228は山陰系の大形鉢の口縁部である。口縁部外面下半に見られる稜の退化が顕著である。色調は灰白色。古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。

S P 27(第54図、図版三一)

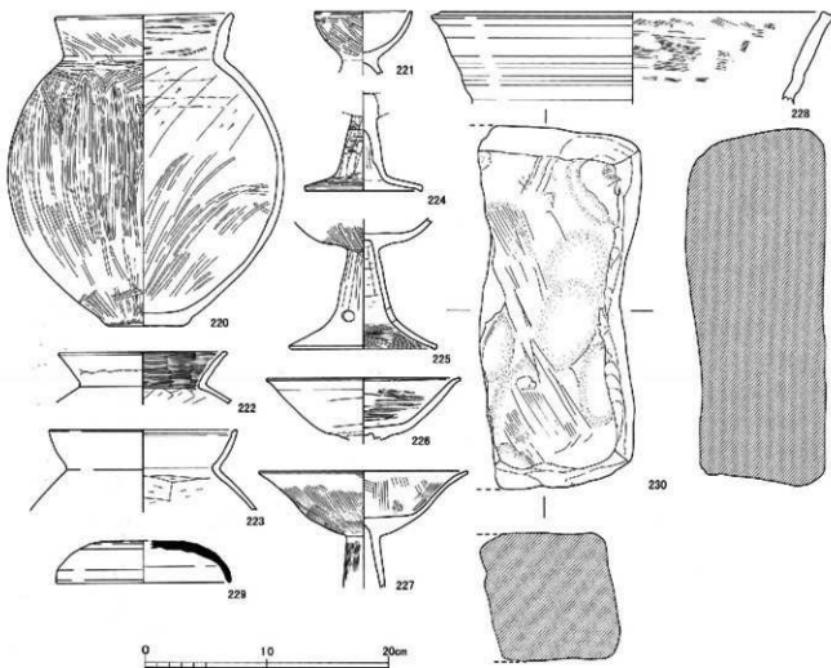
2点(223・224)を図化した。223は布留式甕(甕F₃)である。器面に化粧土が塗布されている。224は裾部が強く折曲する高杯脚部である。脚部は完存しており、裾部径9.5cmを測る。色調は共に淡橙色。古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。

S P 28(第54図、図版三一)

高杯2点(225・226)を図化した。225が杯部外面にハケを多用する。型式的には226が古く高杯A₅、225が高杯A₆にあたる。色調は225が赤褐色。226が灰黄色。共に古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。

S P 150(第54図、図版三一)

2点(220・221)を図化した。220は胴部が張らない球形の体部に上外方に直線的に伸びる口縁部



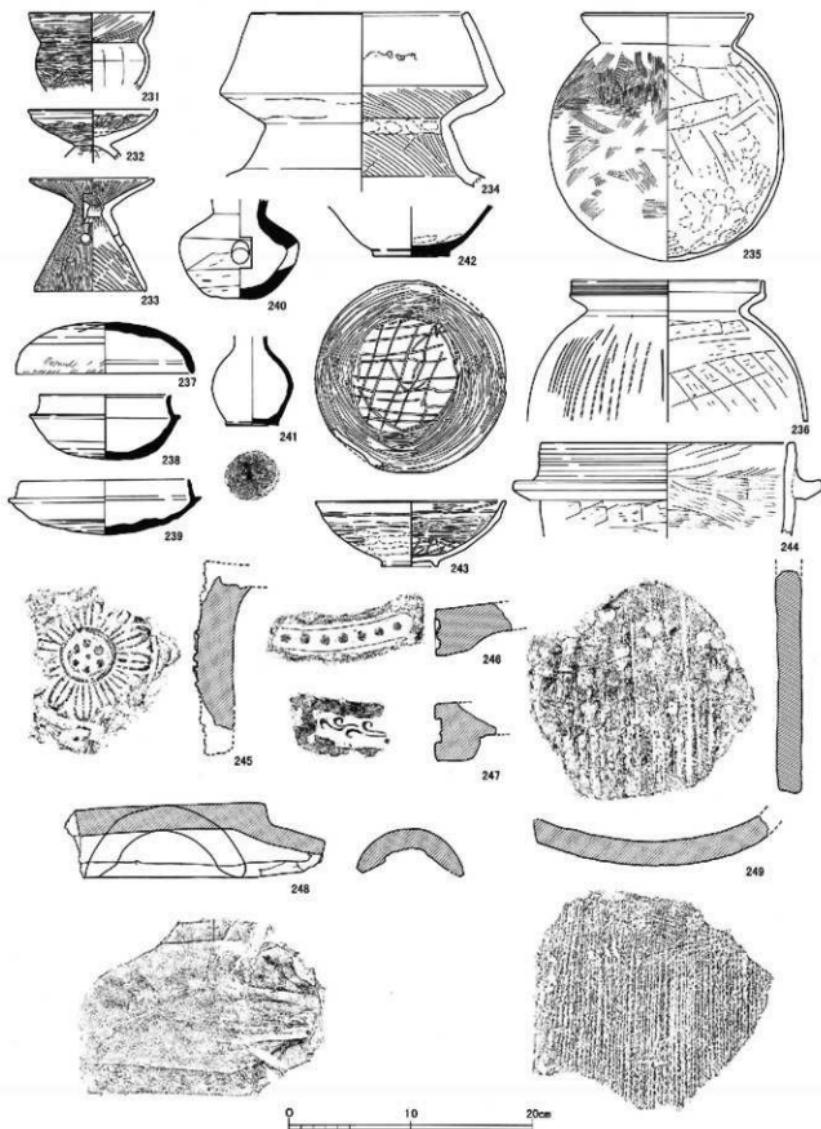
第54図 S P 14(229・230)、S P 16(227)、S P 25(222・228)、S P 27(223・224)、S P 28(225・226)、S P 150(220・221)出土遺物実測図

が付く広口短頸壺である。ほぼ完形品で口径14.2cm、器高25.5cm、底径6.5cmを測る。器皿調整は体部外面が縦位のヘラミガキ、体部内面は上位がヘラケズリ、中位以下は板ナデを行う。色調は褐灰色。生駒西麓産。体部外面に煤が付着しており、煮炊き具として使用されたものである。221は台付鉢で脚部の上位以下を欠く。色調は褐灰色。生駒西麓産。古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される。

2) 遺構に伴わない出土遺物

第5層出土遺物(第55図、図版三二・一三)

第5層からは古墳時代初頭前半(庄内式古相)～室町時代後期に至る雑多な遺物が出土している。19点(231～249)を図化した。231は小形丸底壺の小片である。口径が体部最大径を僅かに凌駕している。精製品で色調は橙色。時期は古墳時代前期前半(布留式古相)。232・233は小形器台である。232が中実、233が中空である。器皿調整はヘラミガキを多用するもので232が横位、233が縦位に施されている。色調は共に橙色系である。233は東海系で赤塚編年の廻間I式4段階にあたり、庄内II期に対応する。234は東四国系の大形複合口縁壺である。口縁部は完存しており口径17.8cm、口頸部最大径23.3cmを測る。色調は淡褐色。非牛駒西麓産。235は布留式壺である。図上で完形に復元できるもので、口径13.5cm、器高20.0cm、体部最大径19.0cmを測る。色調は淡褐灰色。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産。時期は古墳時代前期前半(布留式古相)。236は吉備系壺である。色調は淡橙色。胎土中に石英・黒雲母・赤色酸化上粒を含む。時期は古墳時代前期前半(布留式古相)。237～241は須恵器である。237は杯蓋である。大井部にヘラ記号があるが、小片のため詳細は不明。MT85型式(6世紀後半)。238・239は杯身である。238がTK47型式(5世紀末)、239がTK10型式(6世紀中葉)に比定される。240は瓦足で頸部下半以下が残存している。体部中位に径1.8cmを測る円孔が穿たれている。体部外面上位に灰かぶりが認められる。6世紀後半。241は小壺で口頸部を欠く。底部裏面に回転糸切り痕が認められる。体部外面に自然釉が認められる。平安時代前期のものか。242は京都系縦釉陶器碗の小片である。高台は削り出しによる円盤状高台に分類されるもので、高台径6.1cmを測る。釉色は発色の悪い灰緑色である。9世紀前半～中葉に比定される。243は和泉型瓦器碗である。完形品で口径15.5cm、器高5.5cm、高台径4.5cmを測る。尾上編年II～III型式(12世紀中葉)に比定される。244は土師器羽釜の小片である。口頸部外面に形骸化した段が廻る。森島編年の河内産のH型式(16世紀前半)に分類される。245～249は屋瓦である。245は細弁十二弁蓮華文軒丸瓦である。沈線で区画された中房に1+6の蓮子を配する。蓮弁は細端弁で少し反り、弁端は丸味を持って終わる。弁間に楔形の間弁を持つ。内外の圓線で区画される外縁には小粒で隆起の高い珠文が廻る。色調は淡灰色で、焼成は良好である。同意匠のものが、泉町2丁目(天神社北側)、府教育委員会昭和58～59年調査(府立八尾北高校)から出土している。飛鳥時代後期後半。246は連珠文軒平瓦である。瓦当面の右半分が残存している。顎は踏顎である。内区は上下の界線間に中粒の珠文を配する。外区は下外区が上外区に比して幅が狭い。色調は灰黒色、焼成は良好。鎌倉時代。247は唐草文軒平瓦である。顎は中段顎。色調は灰色、焼成は良好である。室町時代。248は玉縁付き丸瓦である。凹面は布目痕、凸面はナデにより平滑にされるが、一部、繩叩き痕を残す。色調は灰色、焼成は良好。鎌倉時代。249は平瓦である。凹面は模骨痕および布目痕、凸面は縦位の繩叩き痕が残る。色調は灰黒色、焼成は良好。これらの屋瓦類については、調査地に西接した西都庵寺との関係が推定される。



第55図 第5層出土遺物実測図

註記

- 註1 原田昌則他 1987「I 豊振A遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告13 (財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 広瀬雅信他 1993「豊振遺跡」『大阪府文化財調査報告書第39報』大阪府教育委員会

参考文献

- ・古式土師器
高橋 義 1988「弥生時代終末期の土器編年」「研究報告9」岡山県立博物館
赤坂次郎 1990『愛知県埋蔵文化財センター調査報告第10集 遷國遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会
大久保徹也 2003「四国北東部地域における首長埋葬祭祀様式の画期—上器編年との対応関係について—」『古墳出現期の土師器と年代』シンポジウム資料集
原田昌則 1993「第5章 まとめ 3)中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『II 久宝寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・須恵器
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群1』平安学園考古学クラブ
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- ・古代の土師器
奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』奈良国立文化財研究所学報第32号
古代の土器研究会編 1992「古代の土器 I 都城の土器集成」
古代の土器研究会編 1993「古代の土器 II 都城の土器集成」
佐藤 隆 1992「平安時代における長原遺跡の動向」「長原遺跡発掘調査報告V」(財)大阪市文化財協会
- ・中国産磁器
横田賛次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国産陶磁器について—型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料研究集4』九州歴史資料館
- ・瓦器鏡
川越俊一 1982「大和地方の瓦器をめぐる二つの問題」「文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集」同朋舎
尾上 実 1983「南河内の瓦器鏡」「藤澤一夫先生古稀記念論集 古文化論集」藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会(和泉瓦器鏡の型式分類に使用)
森島康雄 1992「畿内窯瓦器鏡の併行関係と曆年代」「人和の中世土器II」大和古中近研究会(和泉型瓦器鏡の年代基準に使用)
- ・土釜
菅原正明 1982「畿内における土釜の製作と流通」「文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集」同朋舎
森島康雄 1990「中河内の羽釜」「中近世土器の基礎研究IV」日本中世土器研究会
- ・綠釉陶器
高橋照彦 1995「III土器・陶磁器 3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館 1990「第9回 三重県埋蔵文化財展 緑釉陶器の流れ」
- ・擂鉢
白神典之 1988「堺擂鉢について」「堺環濠都市遺跡(S K T 79)発掘調査報告」堺市教育委員会
白神典之 1993「堺擂鉢考」「東洋陶磁19号」東洋陶磁学会
大平 茂 1992「近世丹波焼擂鉢の型式分類とその編年」「下相野窯址」兵庫県教育委員会
- ・奈良火鉢
立石堅志 1995「III土器・陶磁器 10. 瓦質土器(1)奈良火鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- ・炮烙
積山 洋 1995「近世大阪出土の土師質土器編年、素描」「大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要3 - 設立10周年記念論集-」(財)大阪府埋蔵文化財協会
- ・近世陶磁器
2000「九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念」九州近世陶磁器学会

第4章 まとめ

ここでは、今回の発掘調査で得られた考古学知見および周辺で実施された調査成果を含めて、古墳時代初頭以降の集落推移を概観してみる。

・古墳時代初頭後半～前期後半(庄内式新相～布留式新相)

南区の全域に広がるほか、北区でも散発的な広がりが認められた。主な遺構としては、S E 3、S K 2・3・9・12・14・31、S D 5・8等がある。時期的には北区東部の2G地区で検出した古墳時代前期後半(布留式新相)のSK31を除けば、古墳時代初頭後半(庄内式新相)～古墳時代前期前半(布留式古相)を中心とする。遺構の分布は特に南区に集中しており、その大半が古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。なお、南区で検出したSD5からは、古式土師器類がコンテナ5箱程度出土している。その大半は古墳時代初頭後半(庄内式新相)～古墳時代前期前半(布留式古相)を中心とするが、一部、古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定されるものが含まれており、今回の調査では確認できなかったが、近隣に当該期の遺構が存在する可能性が高いようである。

当該期の集落は、本調査地の北に隣接する市教委昭和61年度調査、萱振遺跡第6次調査(KF88-6)、本調査地から北西約310mの萱振遺跡第7次調査(KF88-7)、北約350mの西部廃寺遺跡第1次調査(NKT99-1)、南西約450mの府教委昭和58・59年度の萱振遺跡の調査で検出されている。府教委昭和58・59年度調査では、居住域に関連した遺構の他、古墳時代初頭後半(庄内式新相)～古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される4基の方形周溝墓と古墳時代前期後半(布留式新相)の萱振1号墳が近接して検出されており、当該期を通じて比較的安定した勢力基盤が存在したことが窺える。

・古墳時代後期

当該期の遺構分布は、北区西部から南区東部にかけての南北方向に集中している。主な遺構としては、掘立柱建物2棟(SB1・2)、SK7・11・13・25・28、SD9・10・15等がある。なお、南区東部で検出したSD9・10の流路方向は、SB1・2と主軸方向が共通するため、居住区画を画する溝であったと推定される。特筆する遺物としては、SD10から側面および下端面に鋸歯文を施した滑石製鉗車が1点出土している。

既往調査では、萱振遺跡第7次調査(KF88-7)、萱振遺跡第13次調査(KF92-13)、府教委昭和58・59年度萱振遺跡の調査で当該期の遺構・遺物が検出されている。

・奈良時代

この時期の遺構は、南区西部および北区の中南部で検出されているが、散発的である。包含層からの出土遺物もこれらに比例するものか、当該期の遺物量は少量である。主な遺構は、SE1・9、SP12がある。2基検出した井戸は、SE1が素掘り井戸、SE9が曲物井戸で井戸側に梢円形を呈する曲物が使用されている。

この時期の遺構・遺物については、泉町2丁目の天神社を中心に想定されている西部廃寺の創建時期や寺域を推定する上で重要視されている。しかしながら、飛鳥時代後期(7世紀後半)では萱振遺跡第1次調査(KF84-1)で七坑が1基、奈良時代のものとしては、萱振遺跡第7次調査(KH88-7)、西部廃寺遺跡第1次調査(NKT99-1)で僅かに確認された程度で、調査地の周

辺においては不明な点が多く未だに諸問題を解決するに至っていない。一方、府教委昭和58・59年度菅振遺跡の調査では、D区を中心として奈良時代中期(平城III)を中心とする掘立柱建物10棟以上で構成される居住域が検出されている。大量に出土した遺物の中には、墨書き土器、墨書き人面土器、転用碗、銅製の帶金具等が含まれていることから、西郡廃寺の權越氏族である錦部氏の居住跡ないしは錦部郷の郷舎の可能性が指摘されている。

・平安時代後期～鎌倉時代後期

南区で検出した一部の遺構を除けば、大半が北区の全域で確認されている。さらに、北区の中央部を東西方向に伸びる江戸時代中期のS D 17～19の存在を考慮すれば、当該期の遺構が今回の調査で検出した遺構群のなかで最も周密度が高いと言える。主な遺構としては、SB 3～SB 7、SE 8・10～17、SK 15～18・22・24・29・30・32・36、SD 13である。

これらの遺構の帰属時期は、平安時代後期(12世紀前半)～鎌倉時代後期(13世紀後半)に比定される。なかでも、北区では8基の井戸が検出されており、これらの井戸を中心として当該期の時期毎の変遷を考えてみたい。井戸の形式では、素掘り井戸1基(S E 10)、曲物積み上げ井戸4基(S E 8・12・14・16)、曲物+縦板横桟どめ井戸1基(S E 13)、曲物+羽釜積み上げ井戸1基(S E 17)、羽釜積み上げ井戸1基(S E 11)の4種類に区分される。時期別には、12世紀前半(S E 15)、12世紀中葉(S E 10・14)、12世紀後半(S E 8)、13世紀初頭(S E 11)、13世紀中葉(S E 13・17)、そのほかS E 16が13世紀代に、S E 12はS E 13を切る関係から13世紀中葉以降に比定されよう。以上、確認された井戸の構築時期から、12世紀前半～13世紀前半に至るまで途切れることなく連續と集落が営まれていることが判明した。これらを手掛りとし、更に、他遺構を含めて、限られた範囲内ではあるが、当該時期の集落の変遷を辿ってみた。12世紀代の遺構は、北区東部の2G地区以西で検出されており、4基の掘立柱建物(S B 3～6)を中心として、井戸4基(S E 8・10・14・15)、土坑5基(SK 15～17・22・24)等がある。13世紀前半の遺構は、北区の東部で集中して検出されており、前代に比して集落位置が東に移動したことが窺える。掘立柱建物は1棟(S B 7)を検出しているが、前代の掘立柱建物とは主軸を異にしている。S B 7に近接して、井戸5基(S E 11～13・16・17)、土坑2基(SK 32・36)が検出されている。

当該期の集落は、菅振遺跡第1次調査(K F 84-1)、菅振遺跡第6次調査(K F 88-6)、本調査地を含めた西郡遺跡と、南の菅振遺跡北部の府教委昭和58・59年度調査で検出されている。各調査地点の存続時期を示せば、第1次調査地が11世紀後半～13世紀前半、第6調査地が11世紀後半～12世紀後半、本調査地が12世紀前半～13世紀後半で、府教委昭和58・59年度調査が11世紀後半～13世紀中葉である。各地点において若干の違いがあるものの長期にわたる集落の存在が推定される。また、府教委昭和58・59年度調査で検出された13世紀前半のS E 8029の井戸側上部には、西郡廃寺の屋瓦が使用されており、西郡廃寺の廃絶時期を考える上で示唆的である。

このように、平安時代後期～鎌倉時代後期の集落は西郡遺跡と菅振遺跡北部の2箇所で検出されている。西郡遺跡内の集落形成については、「西郡天神社」を中心とする西郡廃寺の存在、ならびに「西郡天神社」の東側を南北に走る「河内街道」とそこから分岐して東に伸びる「十三嶺道」の存在が大きく関わっていたことが推定される。本調査地においては、「十三嶺道」に面した北区を中心に遺構が検出されており、南区で当該期の遺構が検出されない事実は、街道に沿った部分を中心に集落が形成されていたことを物語っている。菅振遺跡北部の集落は、平安時代後半

以降に集落域を拡大するもので、近接する「河内街道」および「式内社加津良神社」との有機的な関係が推定される。

・室町時代

この時期の遺構としては、南区の西端で検出した S D 2 および北区の東部で検出した S D 16 がある。S D 2 は調査対象面より約30cm 上部の第5層上面を構築面としている。南北方向に伸びるもので、調査区の南西隅で西に屈曲している。検出長10.0m、幅2.88~3.5m、深さ0.66m測るもので、埋土は炭化物を多く含む粘土を主体としている。埋土からみて、長期間滞水状態が保たれていた溝であることが窺える。なお、S D 2 を検出した南調査区の西端より東では、北区の東部で検出した S D 16 を除けば、当該期の遺構は検出されていない。

この時期の遺構は、周辺の調査でも検出されておらず不明な点が多い。このことは、14世紀以降、中河内全域が南北朝の動乱、さらに、15世紀中葉以降においては兩畠山の争いより絶えず戦乱の渦中にあったことに符合した結果と考えられる。調査地一帯は、「河内街道」、「十三嶺道」の主要街道に沿った位置にあるため、一度戦乱が始まると集落を放棄せざるを得ない状況であった事は容易に推察される。従って、当該期の集落は東大阪市の若江城周辺の調査で確認されているような、防御を目的とした集村形態の集落に移行したものと推定される。以上のような観点からみれば、南区で検出した S D 2 は集落を囲繞する目的で開削された溝の可能性が高く、この時期の集落は S D 2 を環濠とする集落形態であった可能性が高い。

・江戸時代

南区・北区のほぼ全域で散発的に検出されている。本来の構築面は第2層上面である。主な遺構としては、南区では素掘り井戸4基(S E 2・4・5・6)、溝1条(S D 6)、北区では調査区の中央部を東西方向に伸びる S D 17~19 と調査区の北西部に集中する土坑3基(S K 19・21・26)がある。なかでも、S D 6・17・18 からは17世紀中葉~19世紀初頭の上師質土器・瓦質土器の他、肥前焼系・備前焼・丹波焼・信楽焼・京焼・瀬戸焼の国産陶磁器、屋瓦、金属製品が多量に出土している。これらの遺構の性格としては、東~西、南~北方向に伸びる溝については、屋敷地を区画する区画溝で、日常雑器類が出土した土坑については、屋敷内における廃棄物を処理した土坑(ゴミ穴)と考えられる。

参考文献

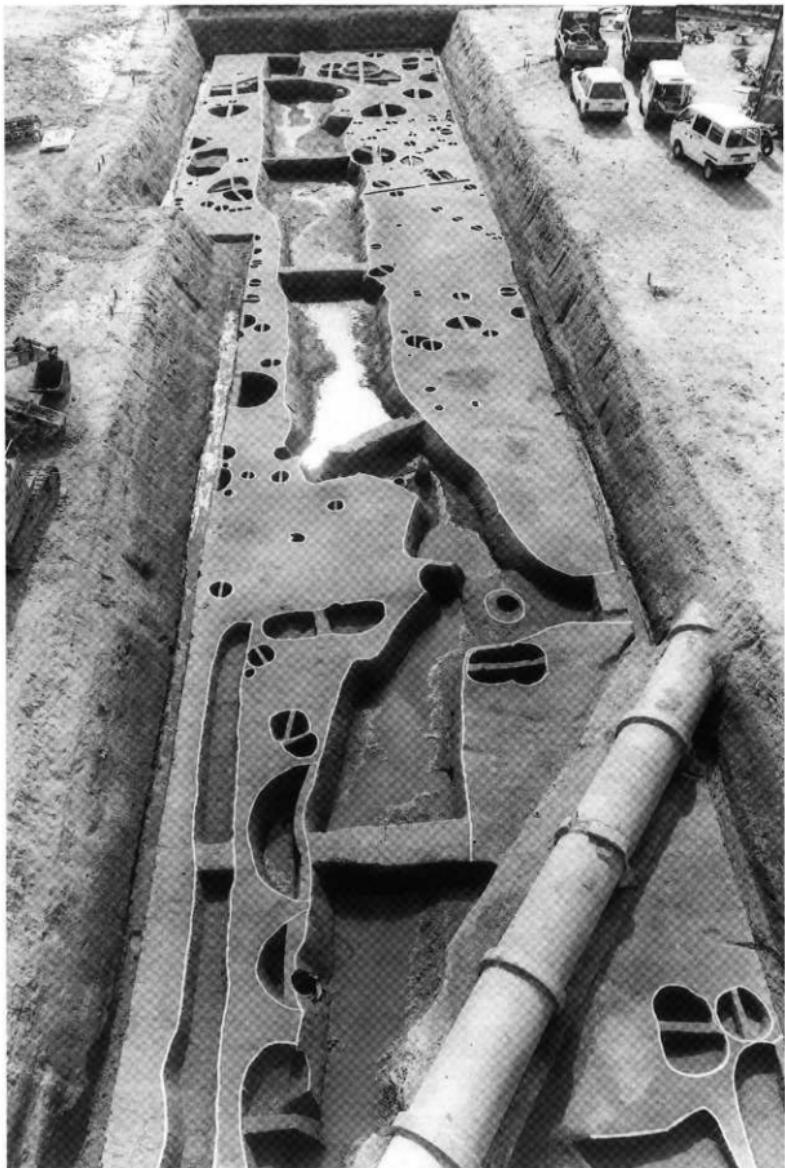
- ・米田敏幸 1987 「豊振遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財報告15八尾市教育委員会
- ・原山昌則 1987 「I 豊振A遺跡(第1次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告13(財)八尾市文化財調査研究会
- ・広瀬雅信他 1992 「豊振遺跡」「大阪府文化財調査報告書第39輯」大阪府教育委員会
- ・原山昌則 1996 「I 豊振遺跡(第6次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告52」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原山昌則 1996 「II 豊振遺跡(第7次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告52」「(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1996 「III 豊振遺跡(第13次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告52」「(財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 2000 「III 西郡庵寺遺跡第1次調査(N K T99-1)」「八尾市立埋蔵文化財センター報告1」八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会

- ・棚橋利光他 1989『歴史の道調査報告書第四集 奈良街道』大阪府教育委員会
- ・棚橋利光 1977「68加津良神社」式内社調査報告 第4卷 河内編』式内社研究会編纂
- ・中井 均 1991「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として－」『中世の城と考古学』(株)新人物往来社

図 版



南区全景(東から)

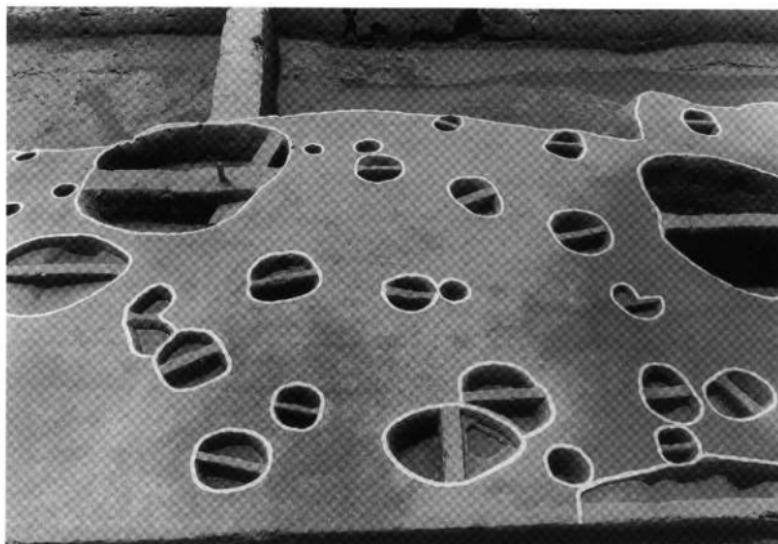


北区全景(東から)

図版三

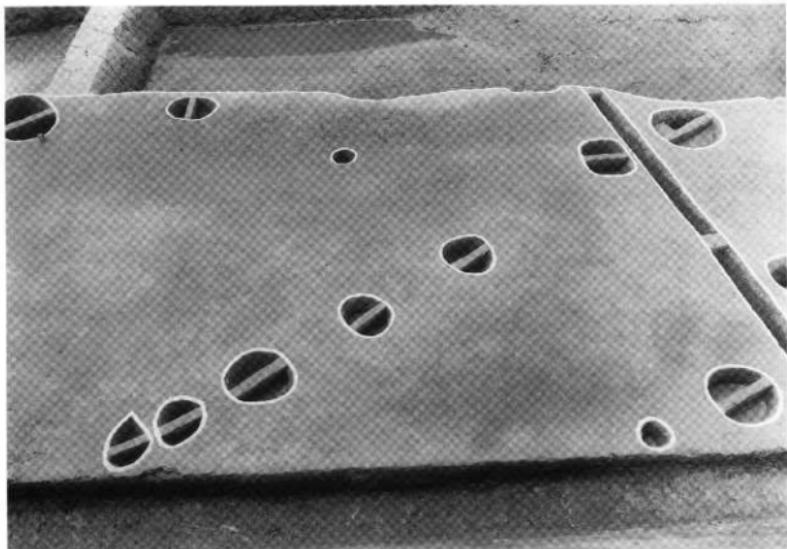


SB 1・2 検出状況(北から)

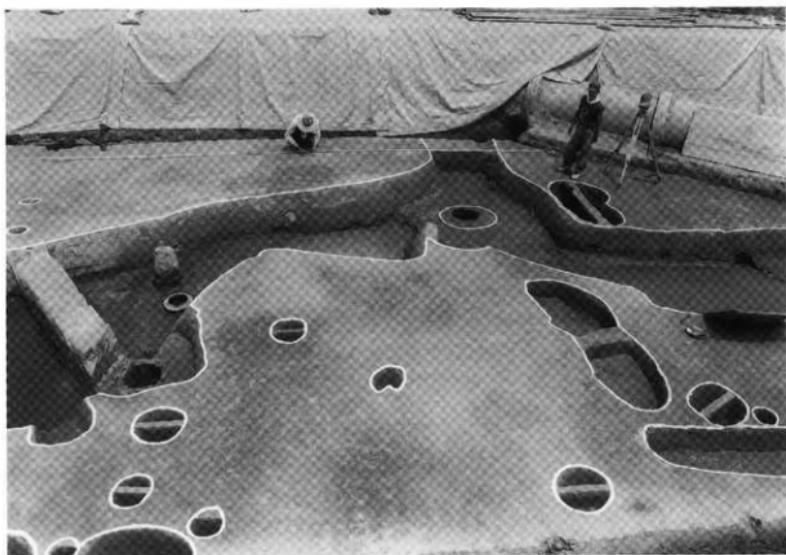


SB 3・4 検出状況(北から)

図版四



SB 5 検出状況(北から)

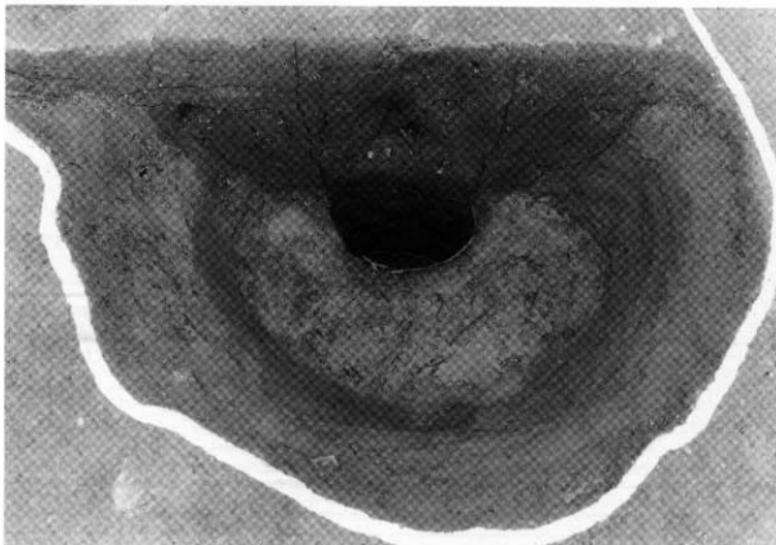


SB 7 検出状況(南から)

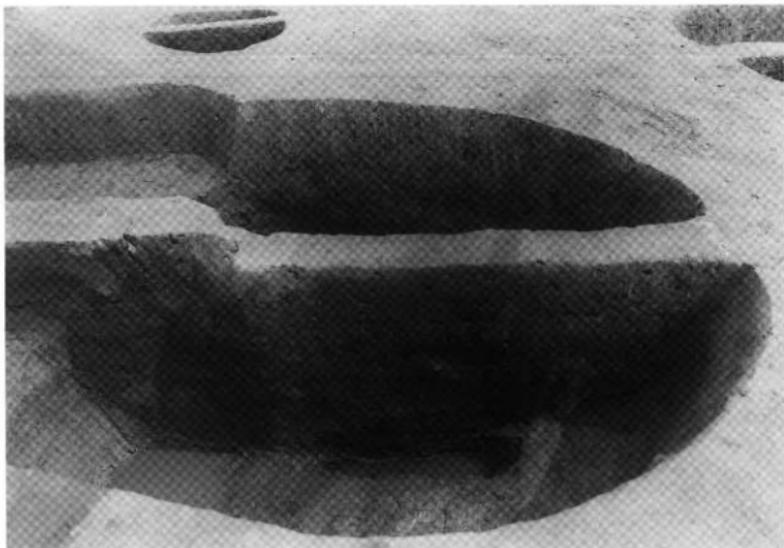
図版五



SE 1 検出状況(北から)



SE 8 検出状況(南から)

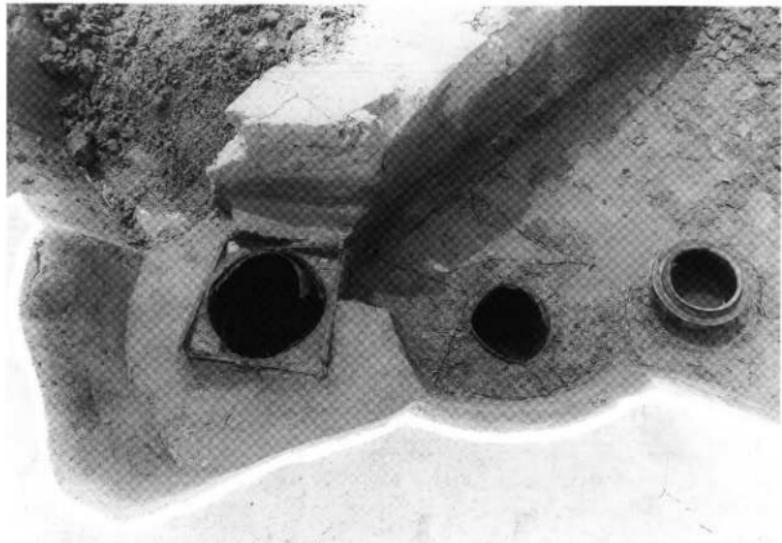


S E 9 検出状況(南から)



同上 井戸側検出状況(南から)

図版七



S E 11 ~ 13 検出状況(東から)



同上 断面(西から)

図版八

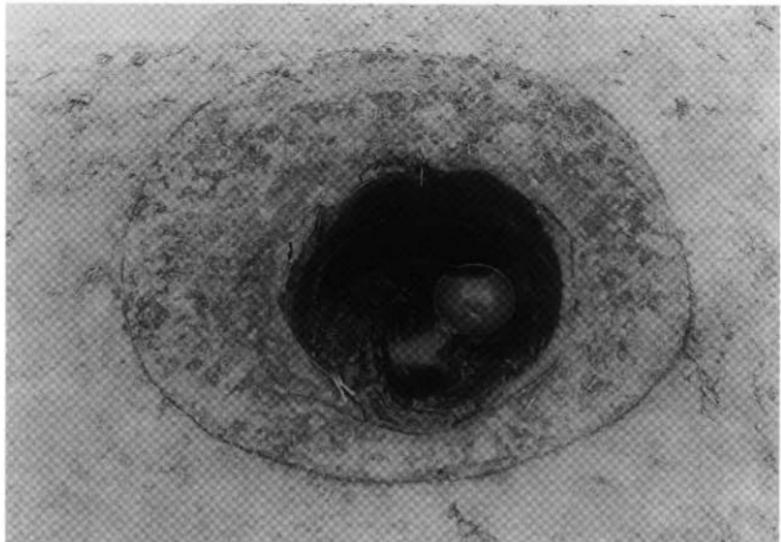


S E 11 検出状況(東から)



S E 13 検出状況(西から)

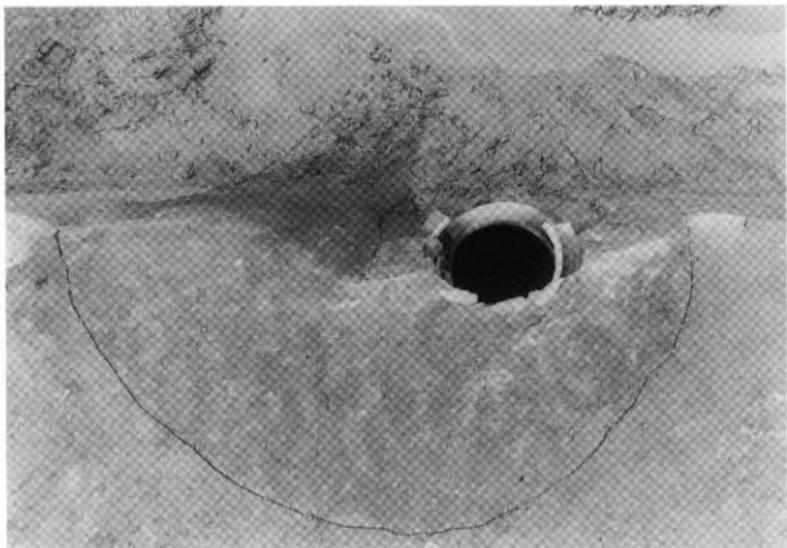
図版
九



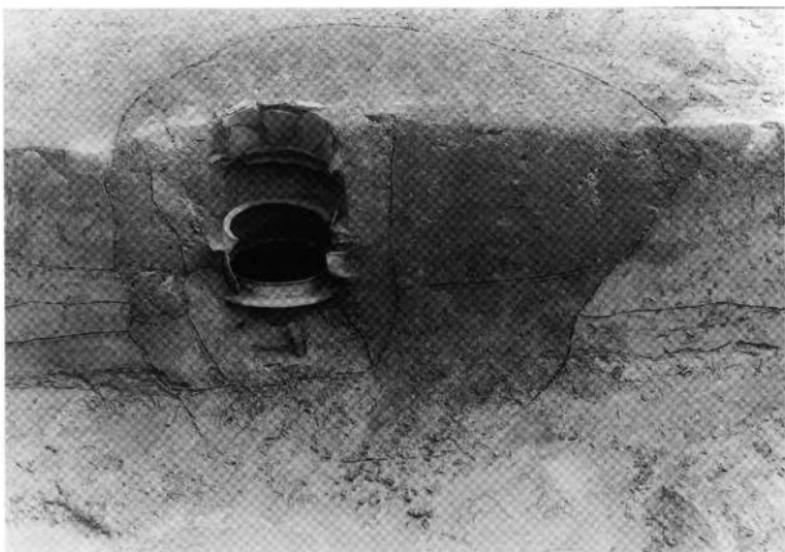
S E 14 検出状況(北から)



S E 16 検出状況(北から)

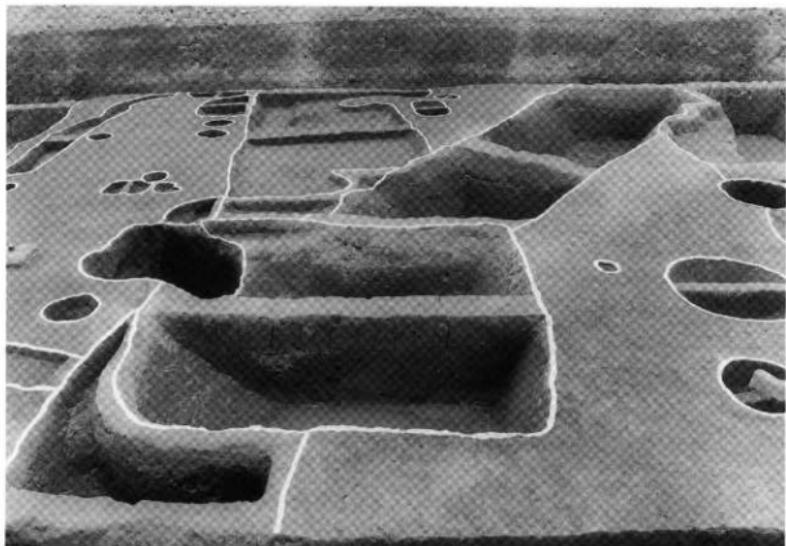


S E 17 検出状況(南から)



同上 断面(北から)

図版
—



S K 5 他検出状況(南から)

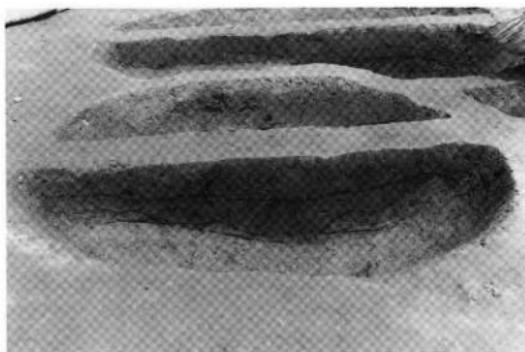


北区北西部 土坑検出状況(北から)

図版
一一



S K 17 検出状況(南から)

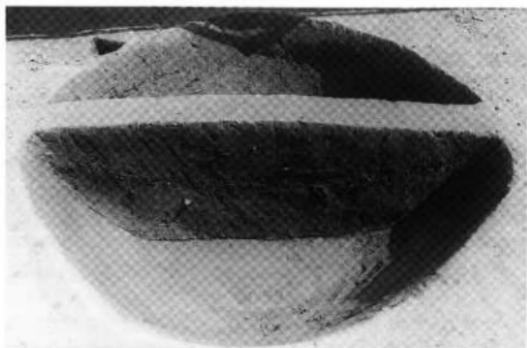


S K 18 検出状況(南から)



S K 21 検出状況(南から)

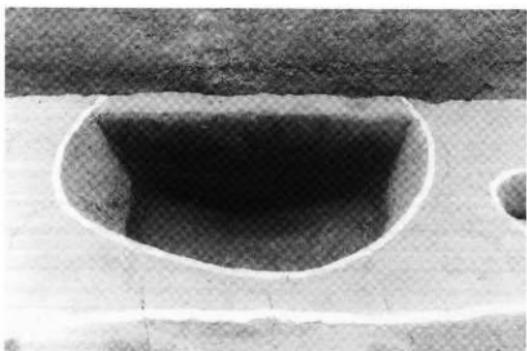
図版
一
三



S K 23検出状況(南から)



S K 25検出状況(南から)



S K 30検出状況(北から)



SD 1・2 検出状況(南から)



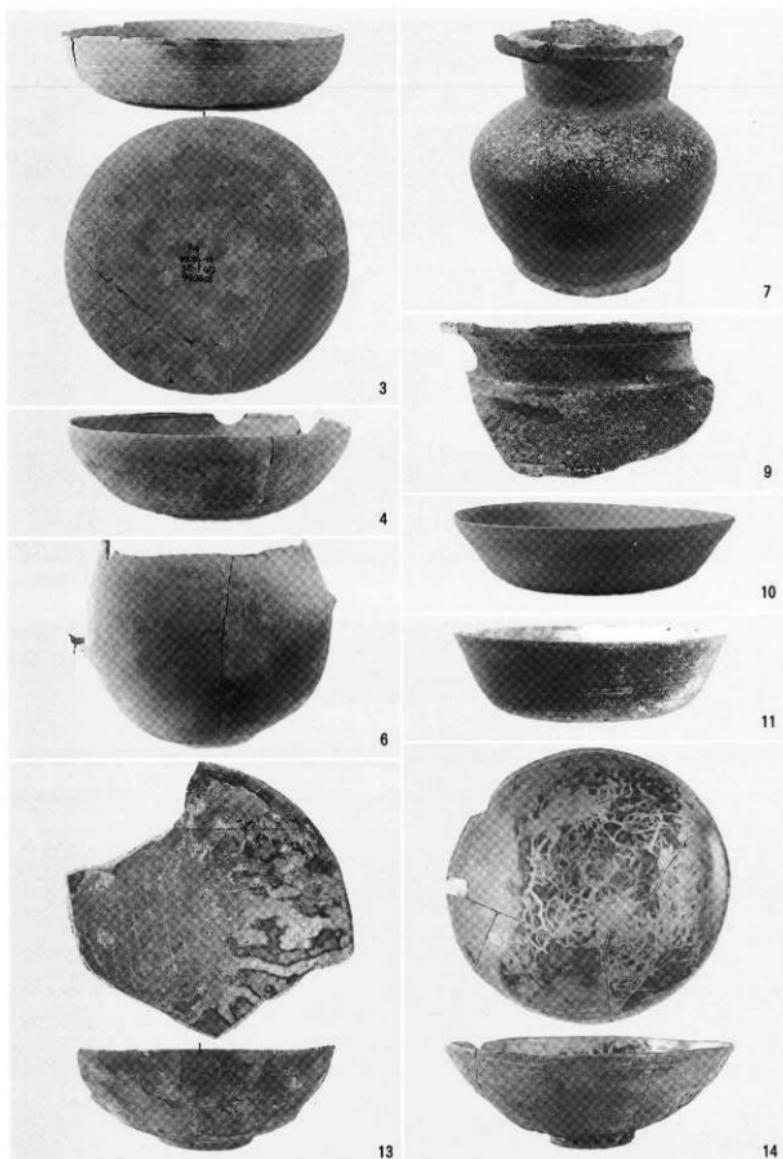
SD 6 検出状況(南から)



S D 18検出状況(南から)

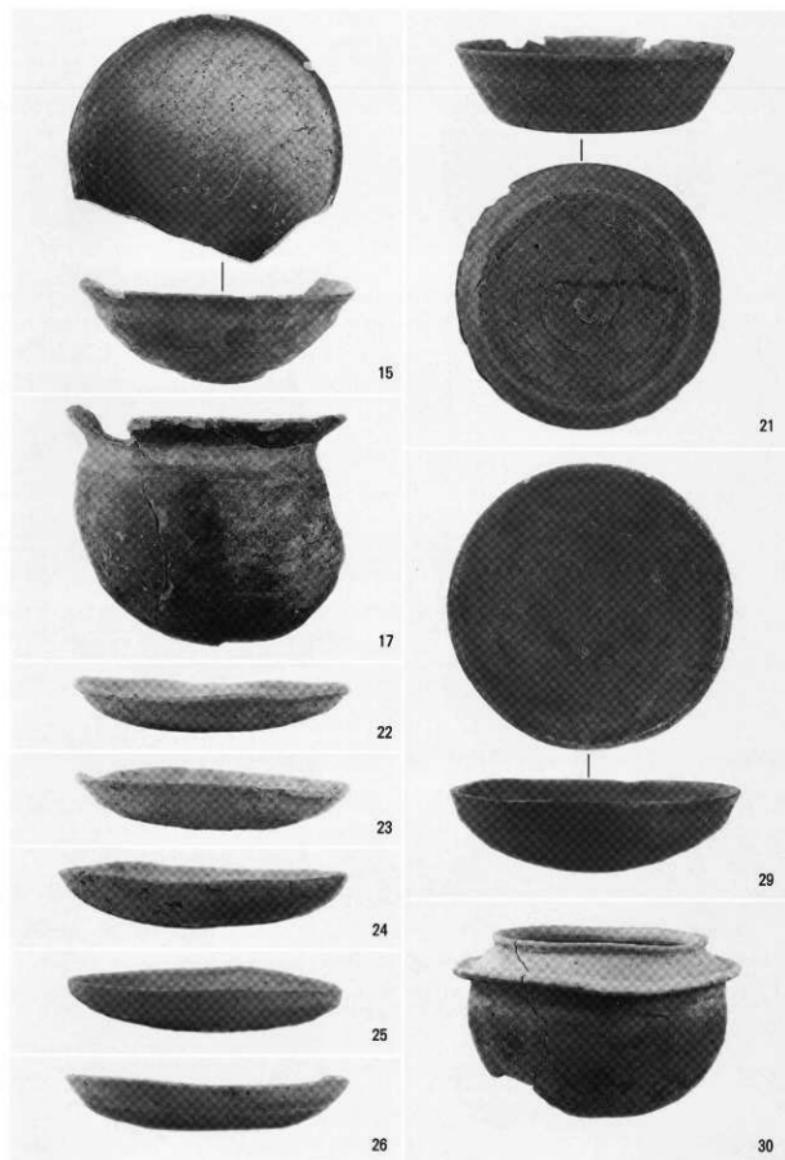


調査風景(西から)

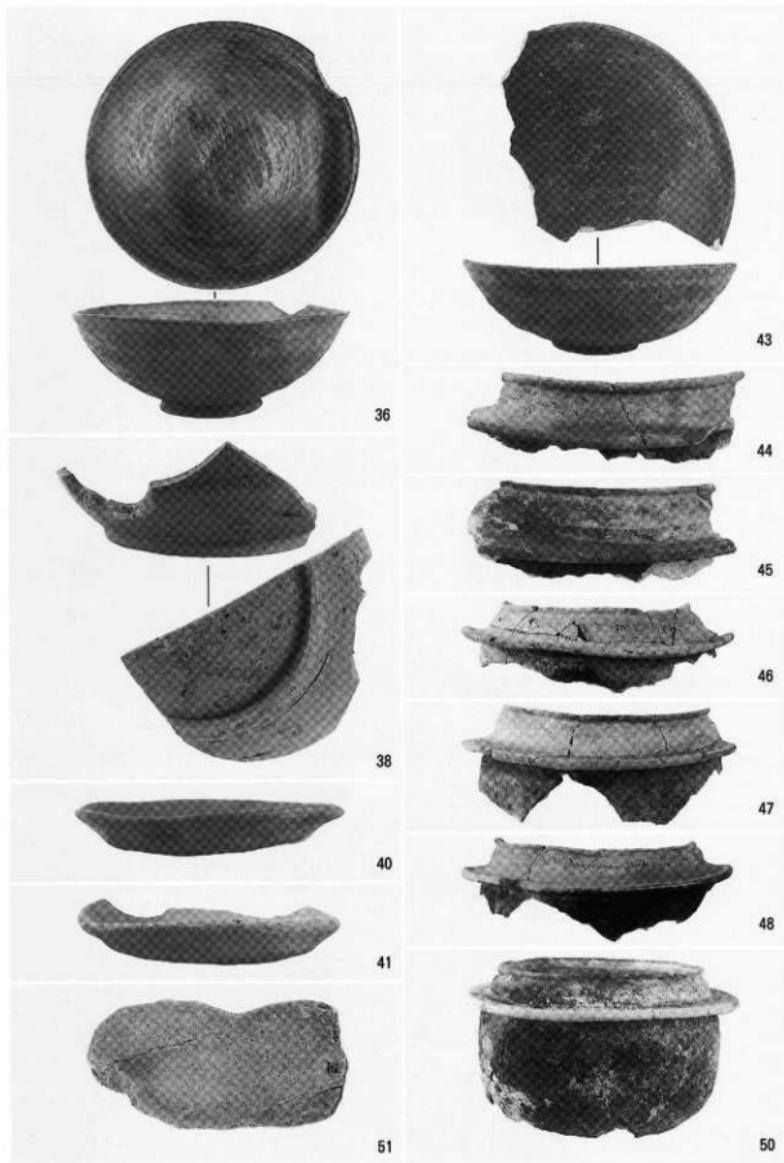


S E 1(3・4・6・7・9～11)、S E 8(13・14)出土遺物

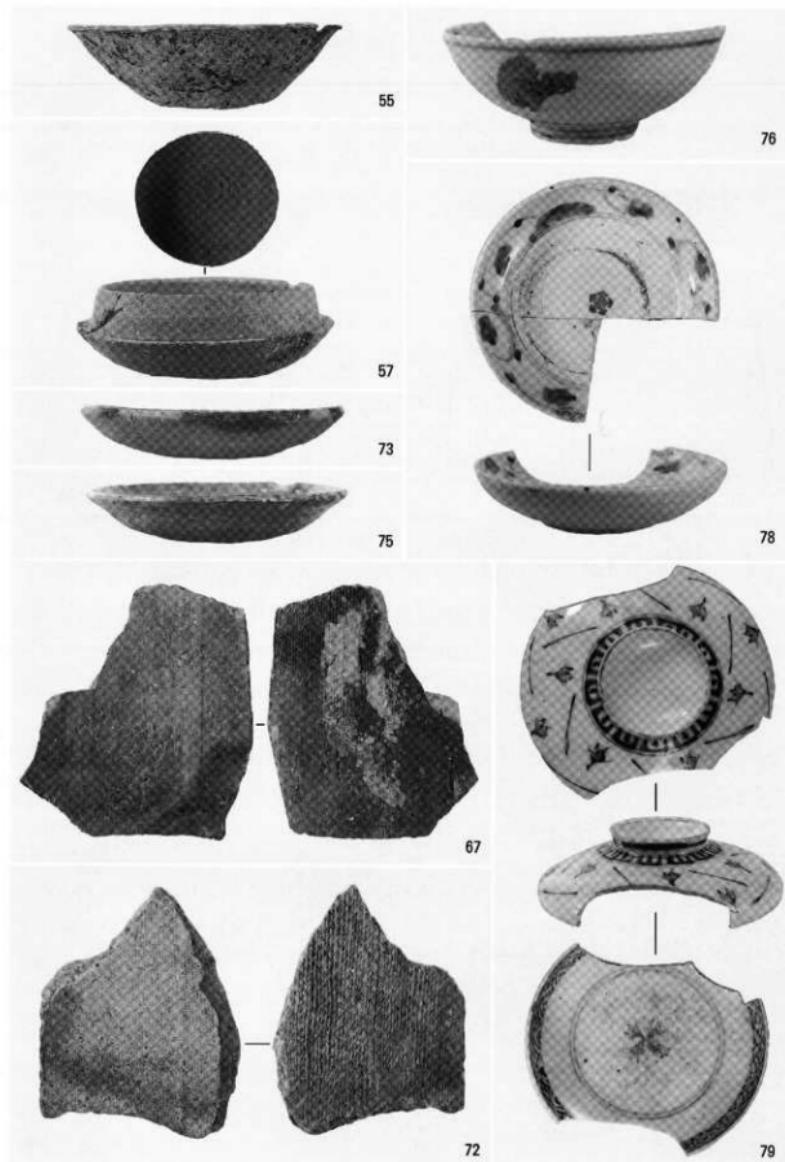
図版一七



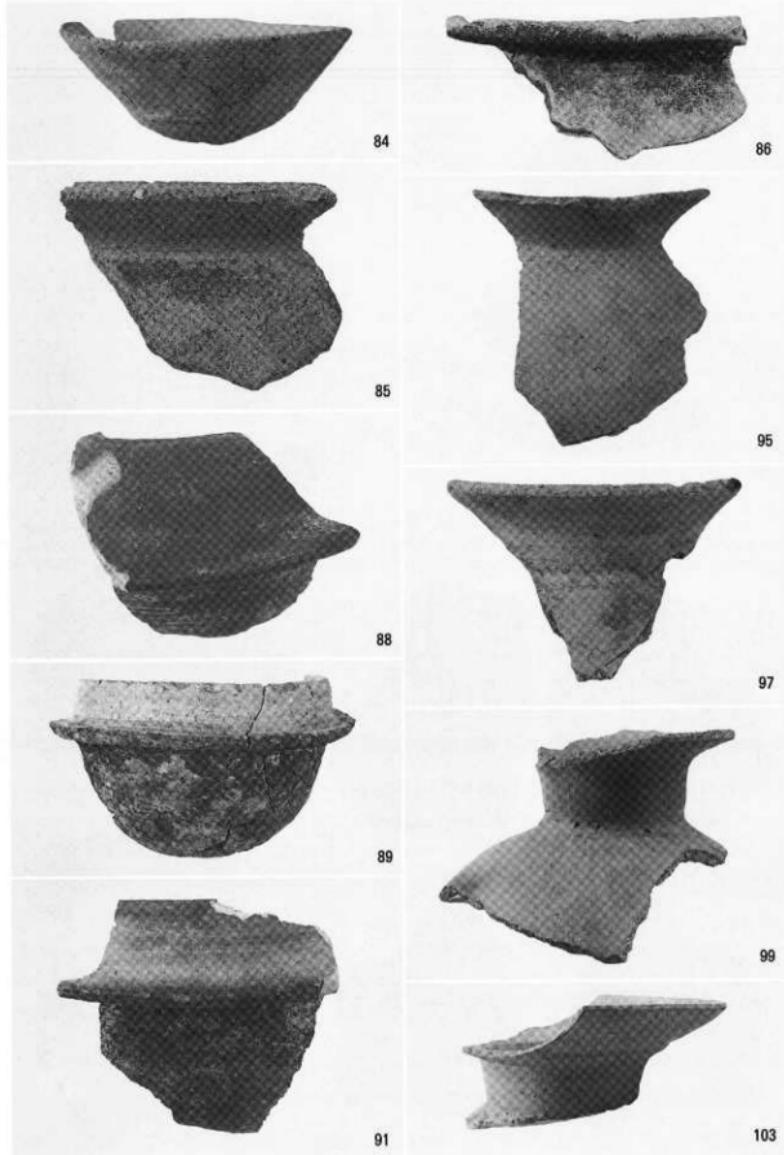
S E 8 (15)、S E 9 (17+21)、S E 10(22~26+29)、S E 11(30)出土遺物



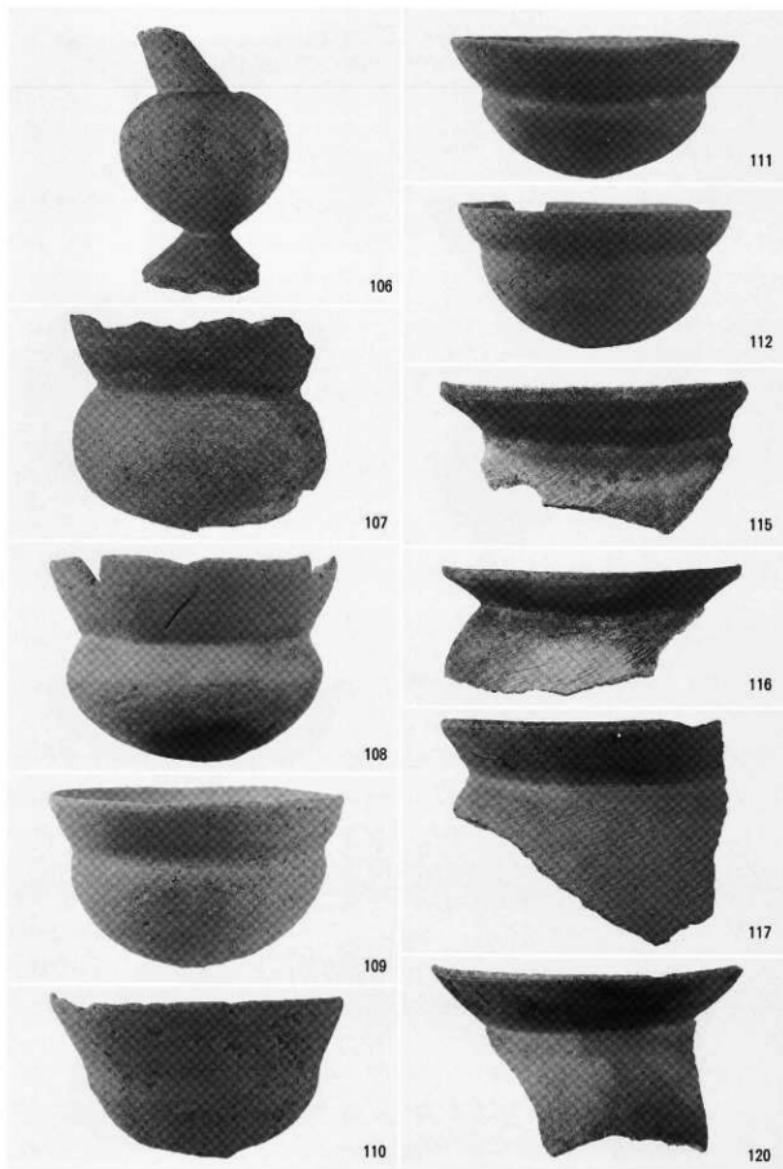
S E 14(36)、S E 15(38)、S E 17(40・41・43～48・50・51)出土遺物



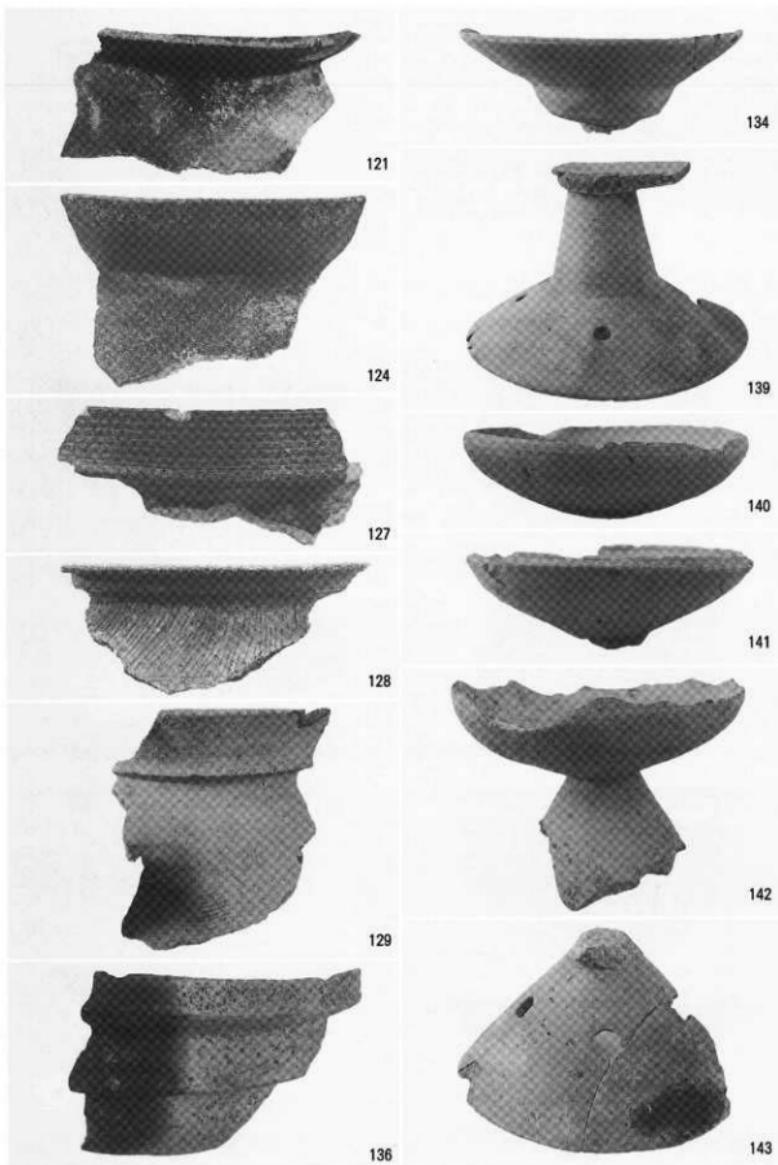
SK11(55・57)、SK15(67)、SK18(72)、SK26(73・75・76・78・79)出土遺物



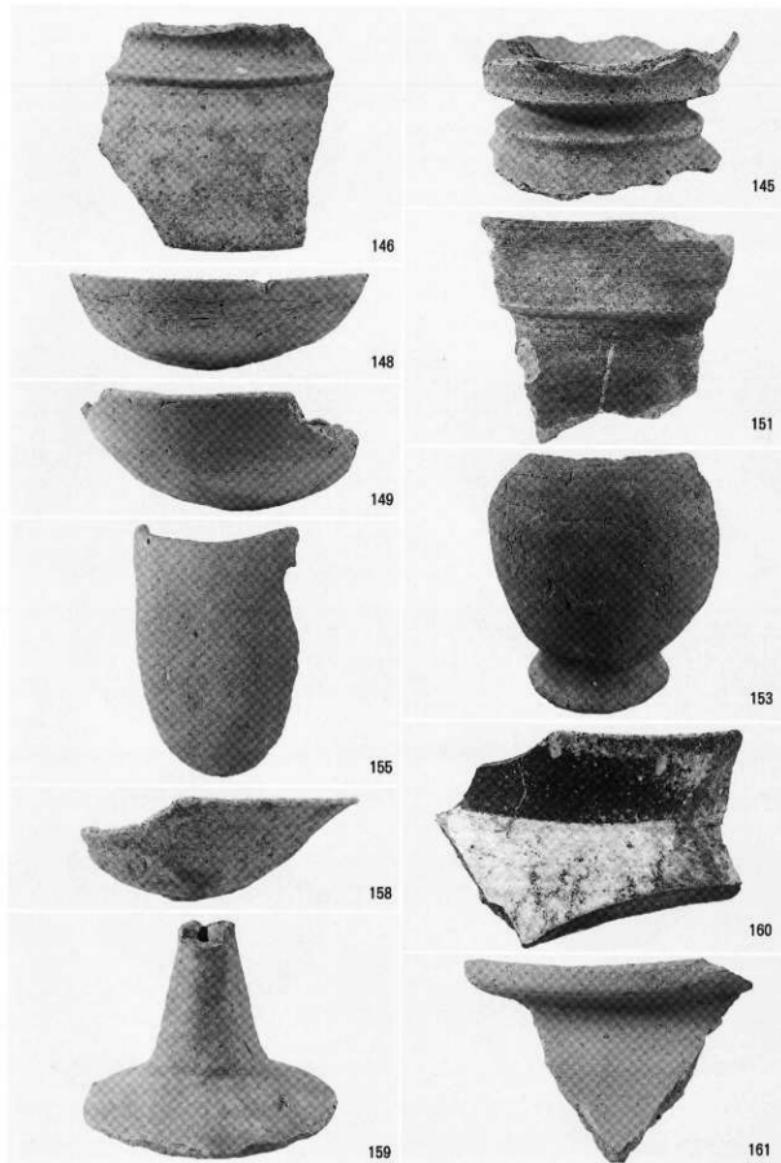
S E 31(84)、S D 1(85)、S D 2(86・88・89・91)、S D 5(95・97・99・103)出土遺物



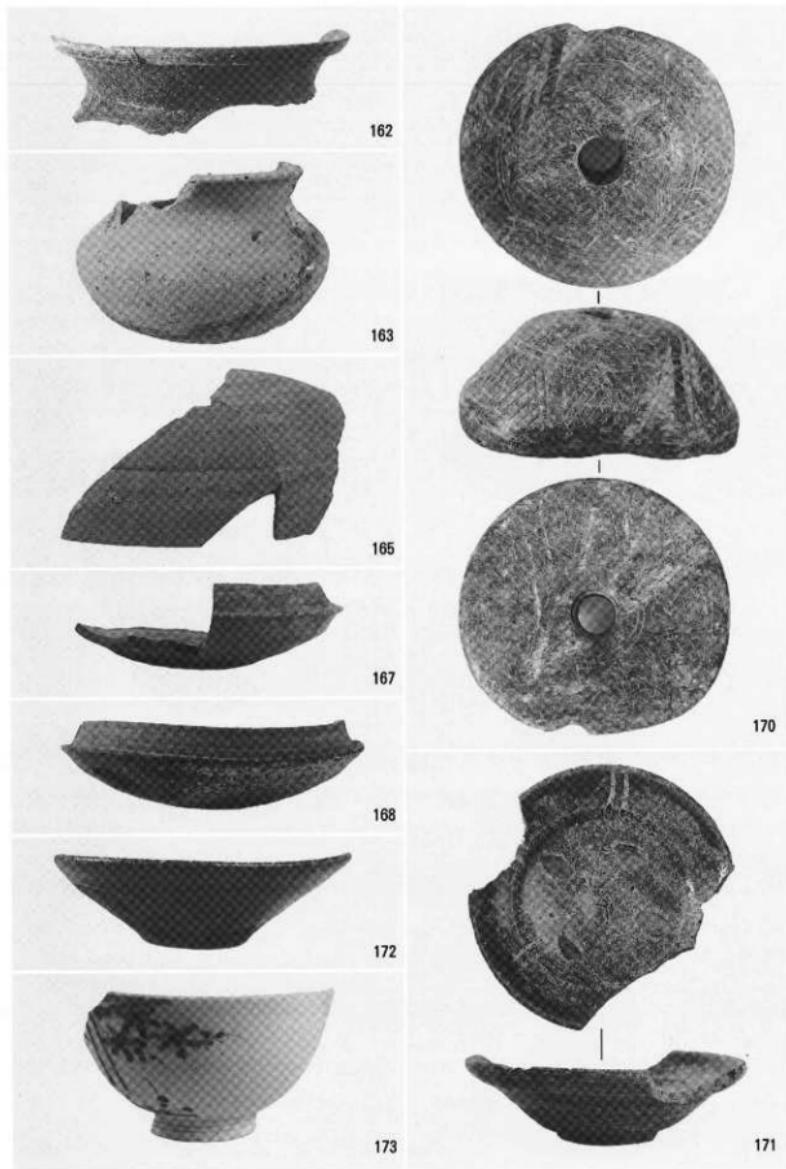
S D 5 (106~112・115~117・120)出土遺物



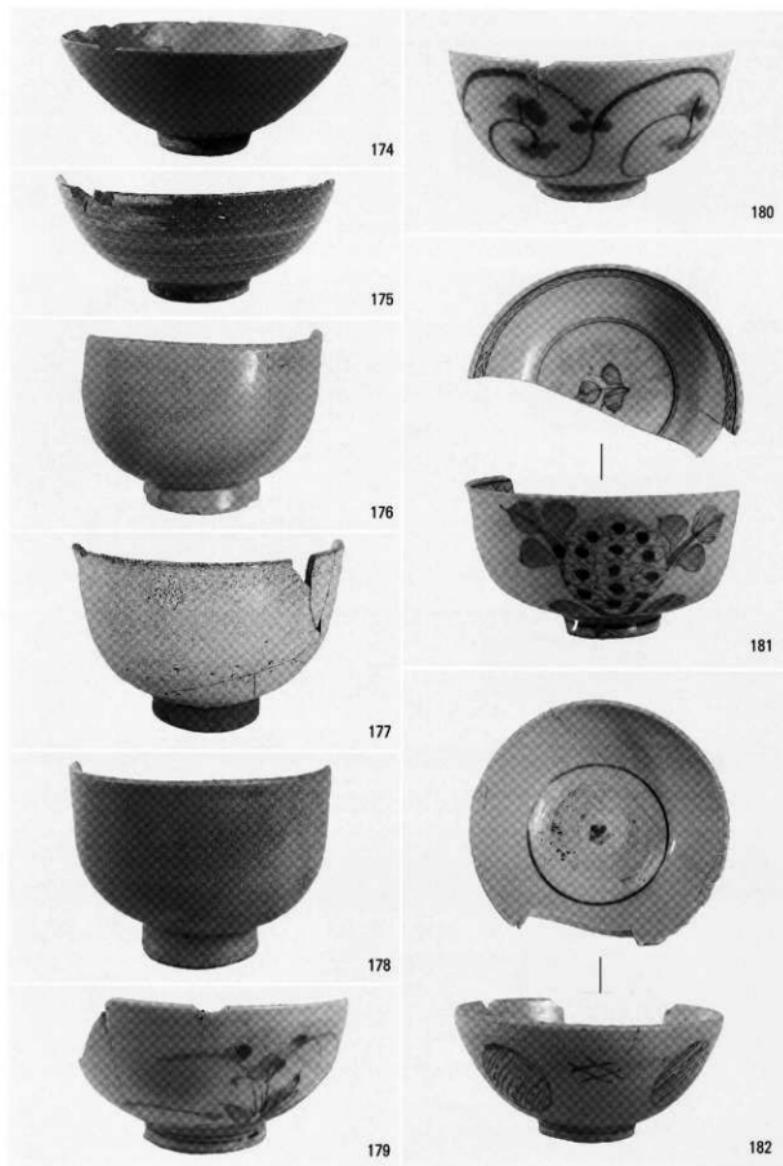
SD 5 (121・124・127~129・134・136・139~143) 出土遺物



S D 5 (145・146・148・149・151・153・155)、S D 9 (158～161)出土遺物



S D 9(162・163・165・167・168)、S D 10(170)、S D 17(171～173)出土遺物



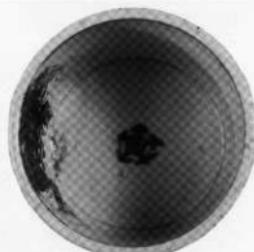
S D 18(174~182)出土遺物



183



186



184



187



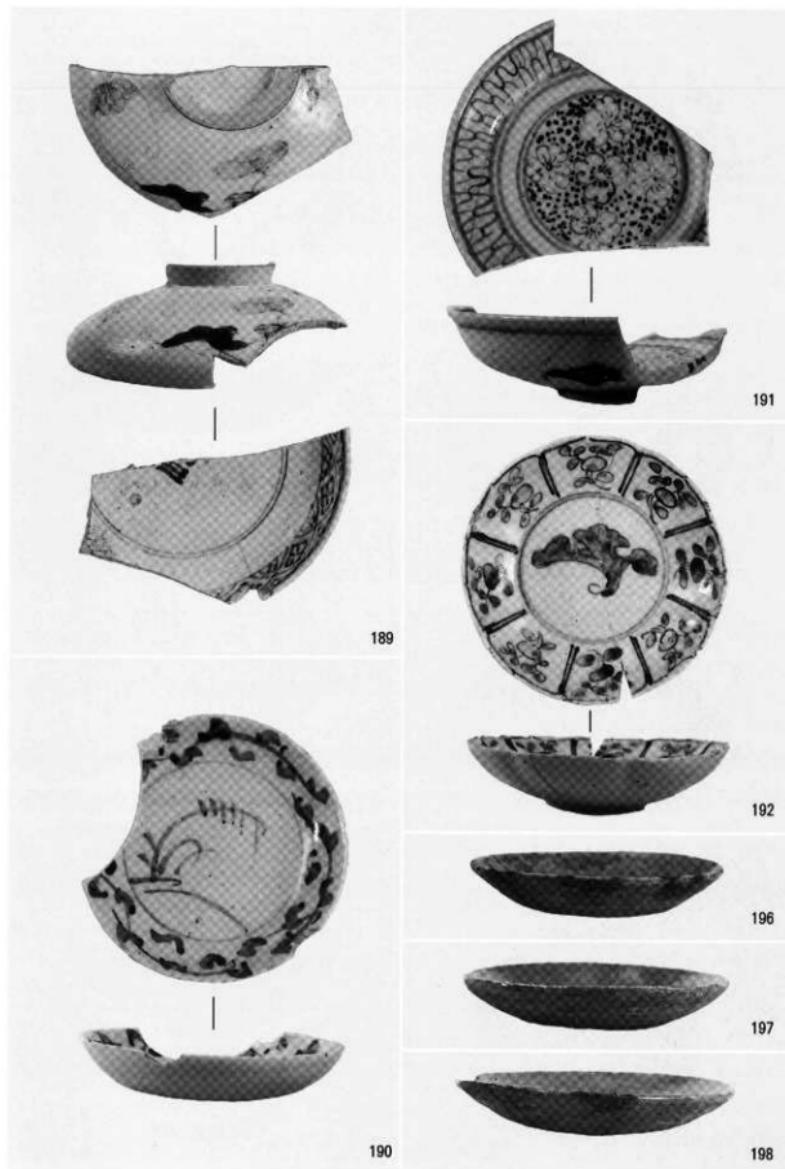
185



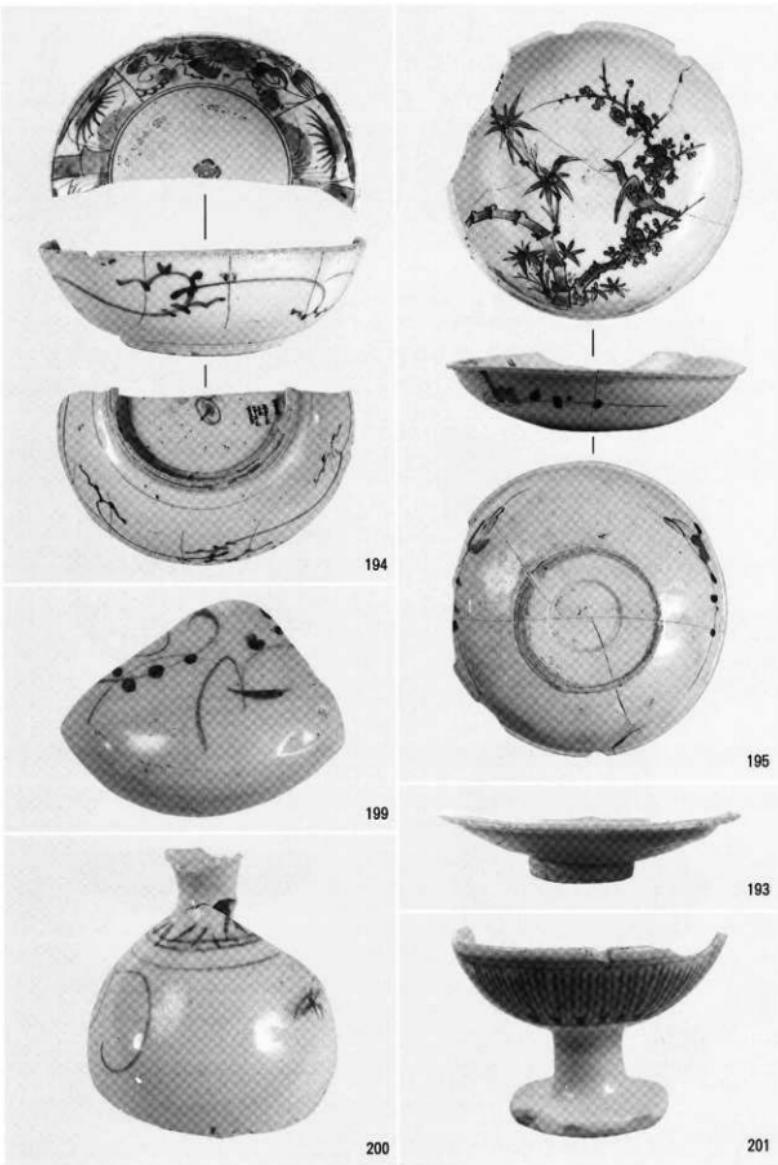
188

S D 18(183～188)出土遺物

図版二七

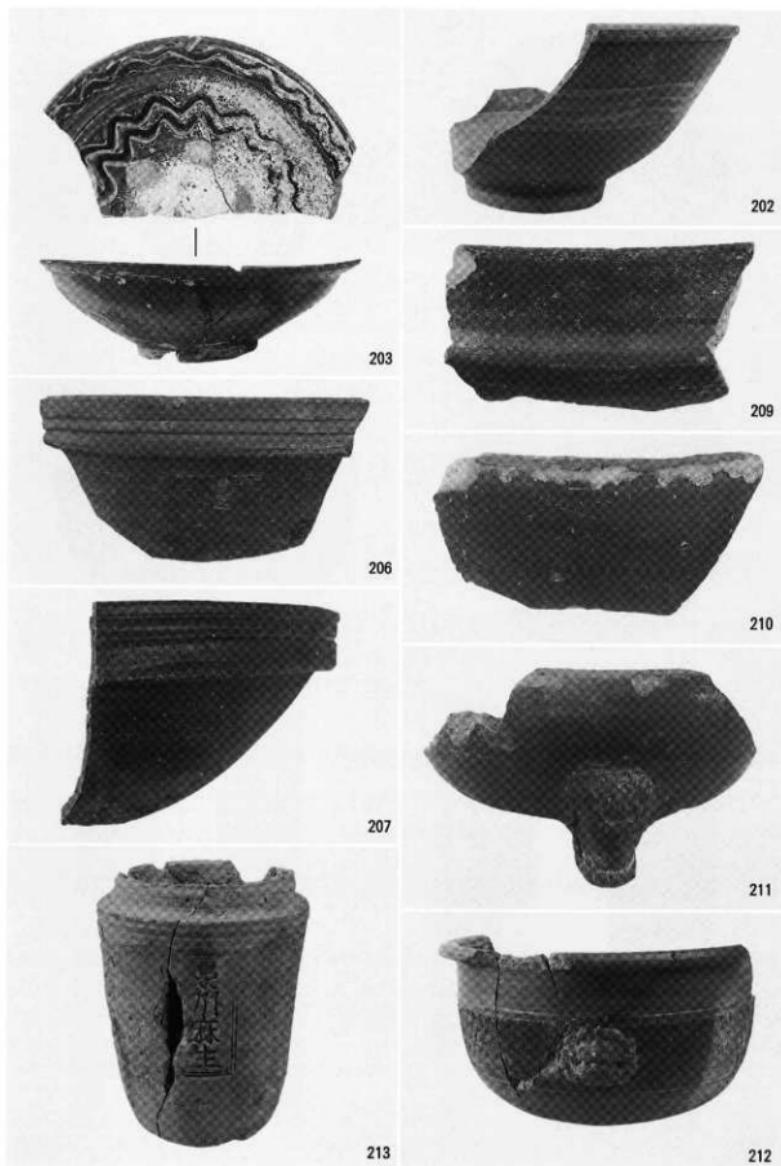


S D 18(189~192・196~198)出土遺物



S D 18(193~195・199~201)出土遺物

圖版二九



S D 18(202・203・206・207・209～213)出土遺物



216



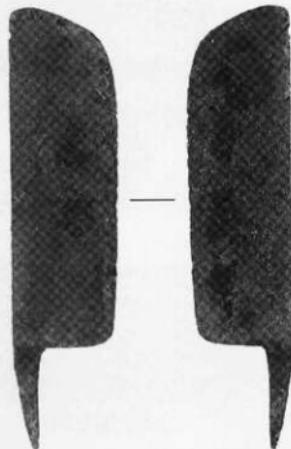
218



217



219



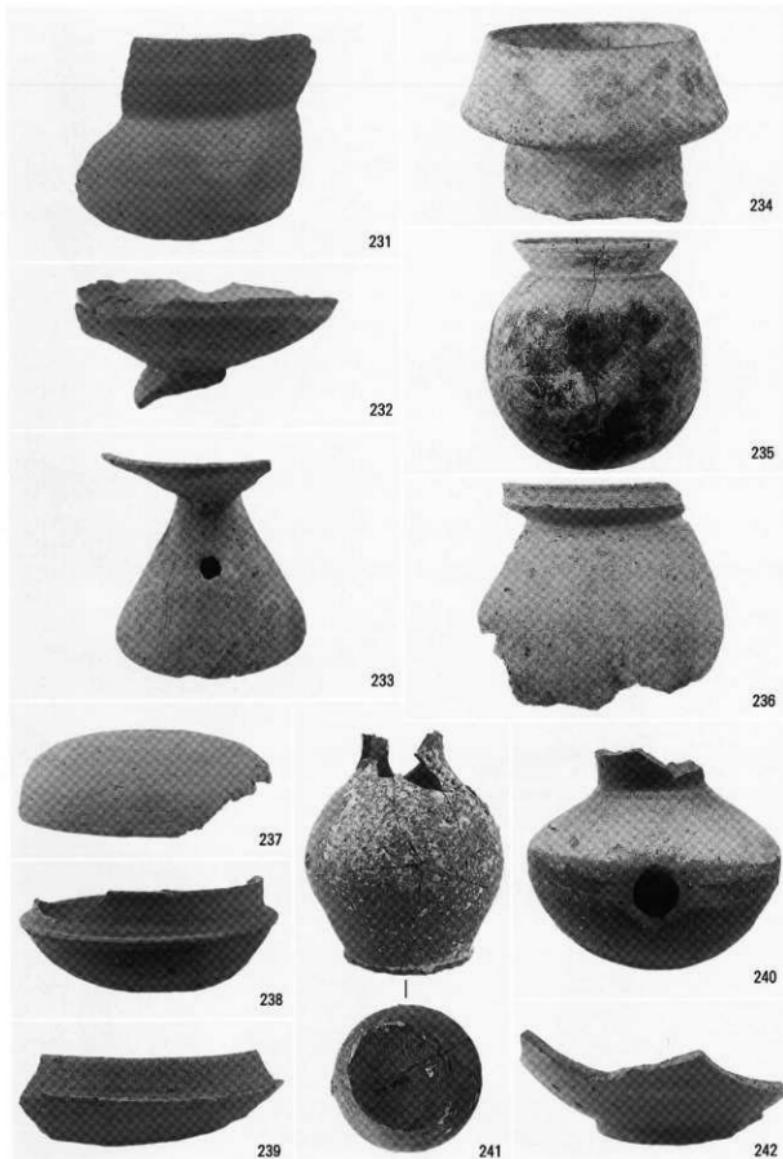
214



215

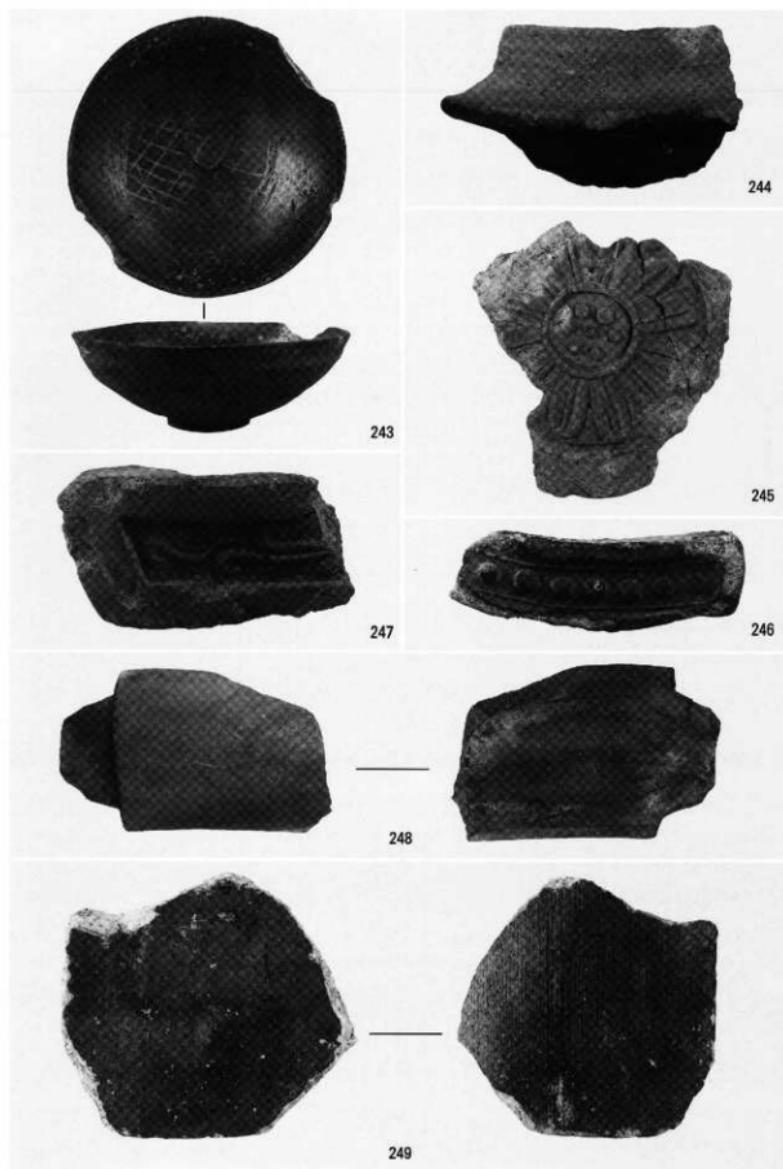


S P 14(230)、S P 16(227)、S P 25(222・228)、S P 27(223・224)
S P 28(225)、S P 150(220・221)出土遺物



第5層(231~242)出土遺物

図版



第5層(243~245・246~249)出土遺物

II 西郡廃寺遺跡第2次調査(NKT2005-2)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市泉町2丁目地内で行った、道路拡幅工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する西郡庵寺遺跡第2次調査(NKT2005-2)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年9月20日から11月21日(実働19日)にかけて、河村恵理が担当した。調査面積は、約91m²である。
1. 現地調査には、飯塚直世、市森千恵子、青山洋、垣内洋平、加藤邦枝、北原清子、國津れいこ、徳谷尚子、中村百合、永井律子、藤井孝則、山内千恵子、吉川一栄、若林久美子が参加した。
1. 整理業務は、平成17年11月21日～平成18年11月まで随時実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原・山内・村田知子、図面トレース－山内、図面レイアウト－河村、遺物写真－尾崎良史、その他－黒田幸代・徳谷・藤原山理子が行った。
1. 本書の執筆・編集は、河村が行った。
1. 現地調査の実施においては、以下の方々からの協力を受けた。
八尾市土木建設課、さとし工務店
1. 土器・瓦の形式・編年で参考とした文献については、84頁に提示した。

本　文　目　次

第1章 調査に至る経過.....	65
第2章 調査概要.....	66
第1節 調査の方法と経過.....	66
第2節 基本層序.....	68
第3節 検出遺構と出土遺物の概要.....	73
第3章 まとめ.....	84

挿　図　目　次

第1図 調査位置図.....	66
第2図 調査トレンチ配置図.....	67
第3図 基本層序模式図.....	69
第4図 1・2トレンチ断面図・平面図.....	71・72
第5図 1トレンチ S D102出土遺物実測図.....	73

第6図	1トレンチS D103出土遺物実測図	74
第7図	1トレンチS D201出土遺物実測図	75
第8図	1トレンチS D202平面図・断面図	76
第9図	1トレンチS D202出土遺物実測図	76
第10図	1トレンチS D202出土七丸瓦実測図	77
第11図	1トレンチS D202出土平瓦実測図(1)	78
第12図	1トレンチS D202出土平瓦実測図(2)	79
第13図	2トレンチSK101平面図・断面図	80
第14図	3トレンチ出土遺物実測図	80
第15図	2トレンチSK101出土遺物実測図	81
第16図	9トレンチ北壁断面図	82
第17図	9トレンチ出土瓦実測図	83

表 目 次

表1	1・2トレンチ断面地層観察表	70
----	----------------	----

写 真 目 次

写真1	西都廃寺出土塔心礎	65
-----	-----------	----

参考1	西都廃寺出土塔心礎実測図	65
-----	--------------	----

図 版 目 次

図版一	1トレンチ全景	図版五	4トレンチ西壁断面
	2トレンチ全景		6~10トレンチ遠景
図版二	1トレンチ第1・2面遺構検出状況		6トレンチ北壁断面
	1トレンチ第2面SD202検出状況	図版六	7トレンチ北壁断面
	1トレンチ第2面SD202断面		9トレンチ南-西壁断面
図版三	1トレンチ第1面SD103断面		9トレンチ北壁断面
	1トレンチ第1面SD102断面	図版七	1トレンチSD103、SD202出土遺物
	1トレンチ第2面SD201断面	図版八	1トレンチSD202出土遺物
図版四	2トレンチ第1面遺構検出状況	図版九	1トレンチSD202出土遺物
	2トレンチ第1面SK101検出状況	図版一〇	3トレンチ第5層、2トレンチSK101
	3トレンチ第5層内土器出土状況		9トレンチ第7層出土遺物
		図版一一	9トレンチ第7層出土遺物

第1章 調査に至る経過

西郡庵寺遺跡は、八尾市北西部を中心とする東西約600m、南北約900mの範囲に及ぶ弥生時代後期から中世までの複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市泉町1~3丁目、桂町1・2丁目、幸町1・3・4・6丁目に位置する。周辺の遺跡には、南に萱振遺跡、西に山賀遺跡がある。西郡庵寺が存在した当地域は、旧国郡名の河内国若江郡にあたり、同じ郡内には他に、八尾市南部に位置する弓削寺や、東大阪市南部に位置する若江寺の存在が認められる。

今回の調査地は、現在の天神社境内南端部と、天神社の南に接する道路の側溝部分に当たる。同神社境内には現在、礎石(写真1)が置かれている。礎石の形態は一辺1.6~1.8mを測る方形を呈し、中心に径約70cm、深さ36~38cmの垂直に掘り窪めた舎利孔を穿つ。花崗岩製(写真1・参考1)。他にも同庵寺に関連するものとして桂青少年会館前に置かれている石燈籠の台座がある。台座は一辺30cmを測る方形を呈し、中央上面に正方形の高まりをもつ。中心に径約14cm、深さ12cmの円孔を穿つ。花崗岩製。

これまでに行われた近隣の発掘調査(I-2章第1表①②④~⑨⑩⑫)では、基壇や伽藍などの寺域を推定できる構造は確認されておらず、西郡庵寺の正確な寺域は明らかになっていない。ただし、同庵寺に関連する瓦などが多く出土しており、これらの遺物から、白鳳時代に寺が創建され、鎌倉時代後半まで存続したことが推察できる。

以上より、西郡庵寺の推定範囲に含まれる今回の調査地を発掘調査することが、同庵寺の性格や寺域を解明する上で重要な成果となることが期待された。

なお、西郡庵寺遺跡における既往調査の概要、及び同遺跡周辺の地理的・歴史的環境の詳細については、本書「I 萱振遺跡(第16次調査)第1・2章(1~6頁)」を参考にされたい。

註記

註1 平成18年より「西郡庵寺遺跡」から「西郡庵寺」に改称。遺跡名変遷の詳細は、「I-1章 註1(2頁)」を参考にされたい。

註2 「八尾市史(近代)本文篇」によると、天神社は、明治5年に行われた神社整理で「村社」として位置付けられた。

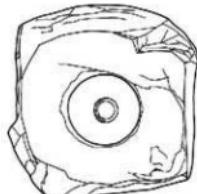
註3 「八尾市史(前近代)本文編」によると、天神社の北方約100m地点から出土したものであり、当庵寺が、天神社を南端として南北約350m、東西約130~220mの区画内の小字「八間堂」に存在したとある。

註4 田中重久1944「塔婆心礎の研究」「聖德太子御成績の研究」によると、この塔心礎を形式分類で「二段式円形蓋無舎利孔四面心礎」とし、「四面心礎は推古朝から平安朝以後まで行はれた。言はば通相といふべき心礎であることが分る。実際上心礎は四面のあることを最も必要とするから最も早くから考へつかれ、最も長く頼らなかった」とある。つまり、この資料だけでは白鳳時代とは断定できない。

註5 「八尾市史(前近代)本文編」によると、台座の上面には複弁の大きな蓮華の反花を計12葉彫り出し、側面には龍の浮き彫りを配する。春日神社(奈良県)などと類似するもので、室町時代のものとする。



写真1 西郡庵寺出土塔心礎(北東から)



参考1 西郡庵寺出土塔心礎実測図
(八尾市史(前近代)本文編一部改変)

第2章 調査概要

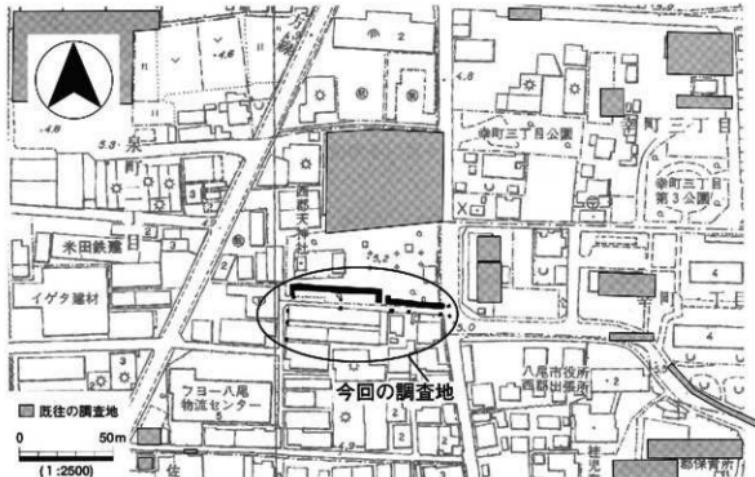
第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、道路拡幅工事に伴って行われたもので、調査地総面積は約91m²を測る。調査地は、石塀移設場所に2箇所(このうち西側の調査区を「1トレント」、東側の調査区を「2トレント」と呼称)、道路会所樹の設置場所に11箇所(3~13トレント)を設定した。なお、会所樹設置部分の調査は、当初13箇所の予定であったが、天神社東側の石塀移設場所と近接する箇所が2箇所あった為、これらを併せて「2トレント」とし、11箇所の会所樹設置部分を調査した。

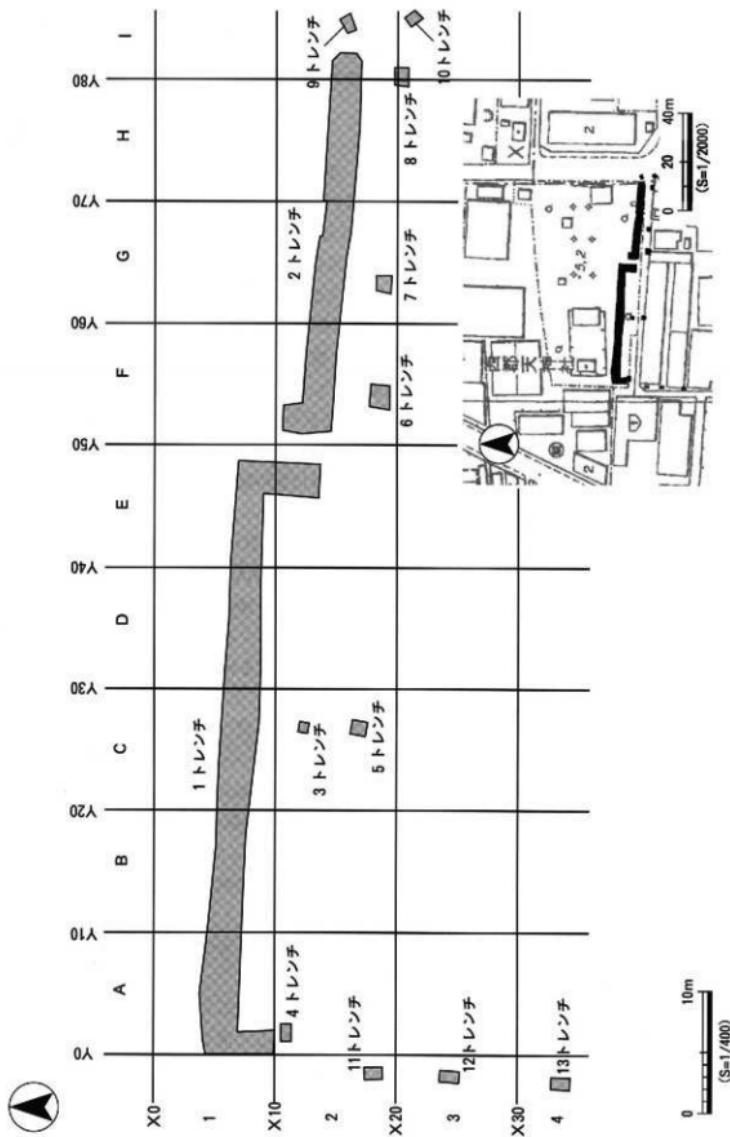
10~12トレントは、既存の会所樹設置場所と重複する為、遺構面及び包含層は削平されて残存しなかった。また、13トレントは、下部に下水管が既存する為、掘削深度が当初の設計よりも浅くなり、包含層まで達しなかった。

調査地の地区割については、調査地の北西隅にある民家と神社を区画するフェンス(X0・Y0と呼称)を基点に、1~13トレントを囲むように、東西90m(Y0~Y90)、南北40m(X0~X40)の区画を設定した。1区画の単位は10m四方で、東西方向をアルファベットのA~I、南北方向を数字の1~4とし、地区名を「1A~4I」と呼称した。なお、今回の調査では、正確な国土座標を得ることができなかつた為、区画の設定軸方向は任意である。

調査は、石塀移設箇所については、現地表面から約60~90cm前後まで機械掘削し、以下20~30cm前後まで人力掘削を行った。会所樹設置箇所については、現地表面から約40~80cmまで機械掘削し、85~120cmまで人力掘削を行った。ただし、10~13トレントについては、後世の搅乱であった為、すべて機械によって掘削を行った。



第1図 調査位置図



第2図 調査レンチ配置図

第2節 基本層序

今回の調査では、東西に併列する1・2トレンチに関しては、後世の開発による破壊を免れた為、比較的遺存状態がよく、安定した地層の堆積が確認できた。以下、1・2トレンチの地層の堆積を基本層序とし、各層の特徴を記したい。

第0層：近代に行われた地形改変等による堆積層。現地表面はT.P.+5.0~6.0mである。当該層は大きく分類して3つの要因によって堆積する。層内上部には、近代に行われた天神社の改修工事時の盛土(改修工事等に伴う攪乱も含む)が見られる。層厚10~80cm。層内中央部には、近代(天神社改修以前)の表土が堆積する。土質は黒褐色礫(径~0.5cm大)~粗砂混じり細砂である。層厚約5cm。層内下部には、近代の耕作土が堆積する。作土はにぶい黄色礫(径~0.8cm大)~粗砂混じり中砂~細砂である。層厚約20cm。

第1層：近世以降の耕作土層。土質は灰色中砂混じり細砂である。

第2層：近世以降の床土層。上質は灰黃色細砂混じりシルトである。少量の炭化物を含む。

第3層：中世以降に構築された整地層。上質は灰黃褐色系砂層であるが、土質や礫の含有量によってさらに5層(表1~4~8)に細分できる。なお、各層が包含する遺物を観察した結果、これらに大きな時期差は認められなかった。ほぼ同時期に整地が行われたものと推測できる。

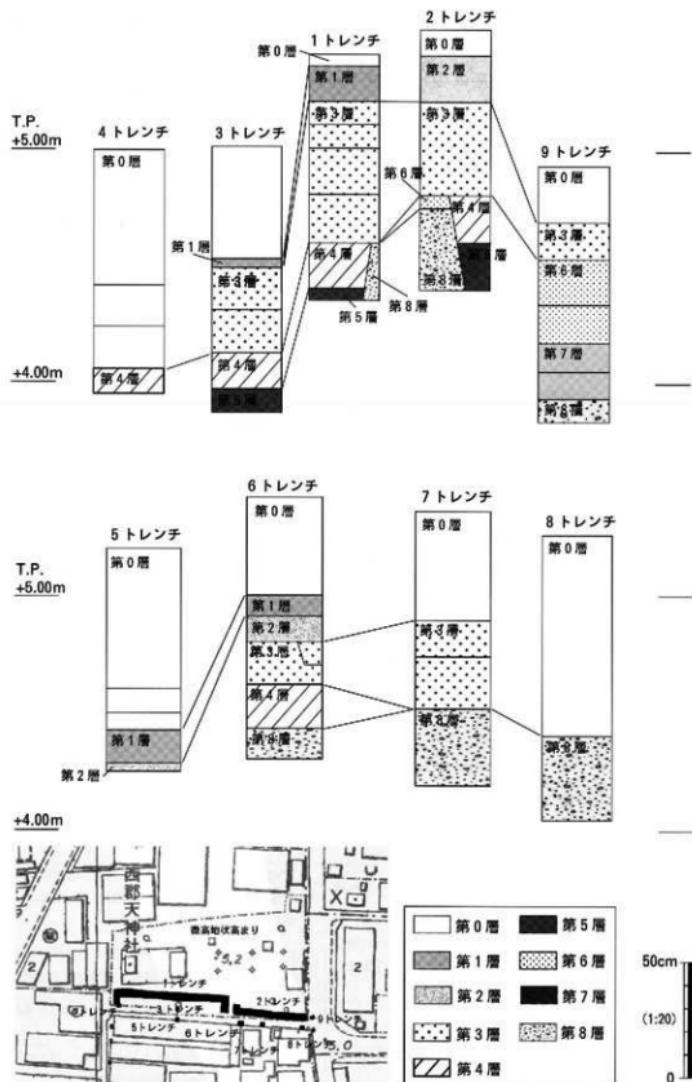
第4層：鎌倉時代以降に構築された整地層。土質は灰黃褐色細砂混じり極細砂(径~0.3cm大の礫が多量に入る)である。層厚20cm前後を測る。当該層は、1トレンチ西端から34m地点と、2トレンチ東端部分では確認できたが、この間を結ぶ中央部分では当該層の堆積は確認できなかった。この点に関しては、次項(第5層)で述べたい。

当該層上面では、南北方向に走る溝4条、小穴7個を検出した。当該層上面を「第1面」と呼称する。

第5層：平安時代後期~鎌倉時代前期に構築された整地層。土質は灰黃褐色中砂混じり細砂に暗灰黃色細砂混じり極細砂がブロック状に混ざる(径~0.5cm大の礫が少量混ざる)。層厚10cm以上を測る。当該層は、1トレンチ西端から34m地点までは確認できたが、これより東方では工事の破壊深度に達しない為、当該層の堆積状況を確認することができなかった。おそらく当該層も第4層と同じ堆積状況であったと考えられる。このように、第4・5層の堆積が見られない部分について、下層部の堆積を確認したところ、ちょうど自然堆積層(第8層)が形成した微高地に位置することが判明した。また、第4・5層の土質と自然堆積層(第8層)の窪み部分に堆積する土層(表1~18~20)が類似することから、第4・5層構築時に削平された可能性が高い。

当該層上面では、南北方向に走る溝4条を検出した。これらの溝は、第1面で検出した溝よりもやや規模が大きく、廃絶期に瓦等を廃棄した溝も確認できた。当該層上面を「第2面」と呼称する。

第6層：飛鳥~平安時代の遺物包含層。土質は黄褐色系の砂~シルトである(表1~18~20)。調査地東部(2トレンチ東端部・9トレンチ)で見られる当該層は、多量の鉄分が沈着する灰色粗砂混じり中砂であり、格子タタキのある平瓦、須恵器・土師器片を包含する。西



第3図 基本層序模式図

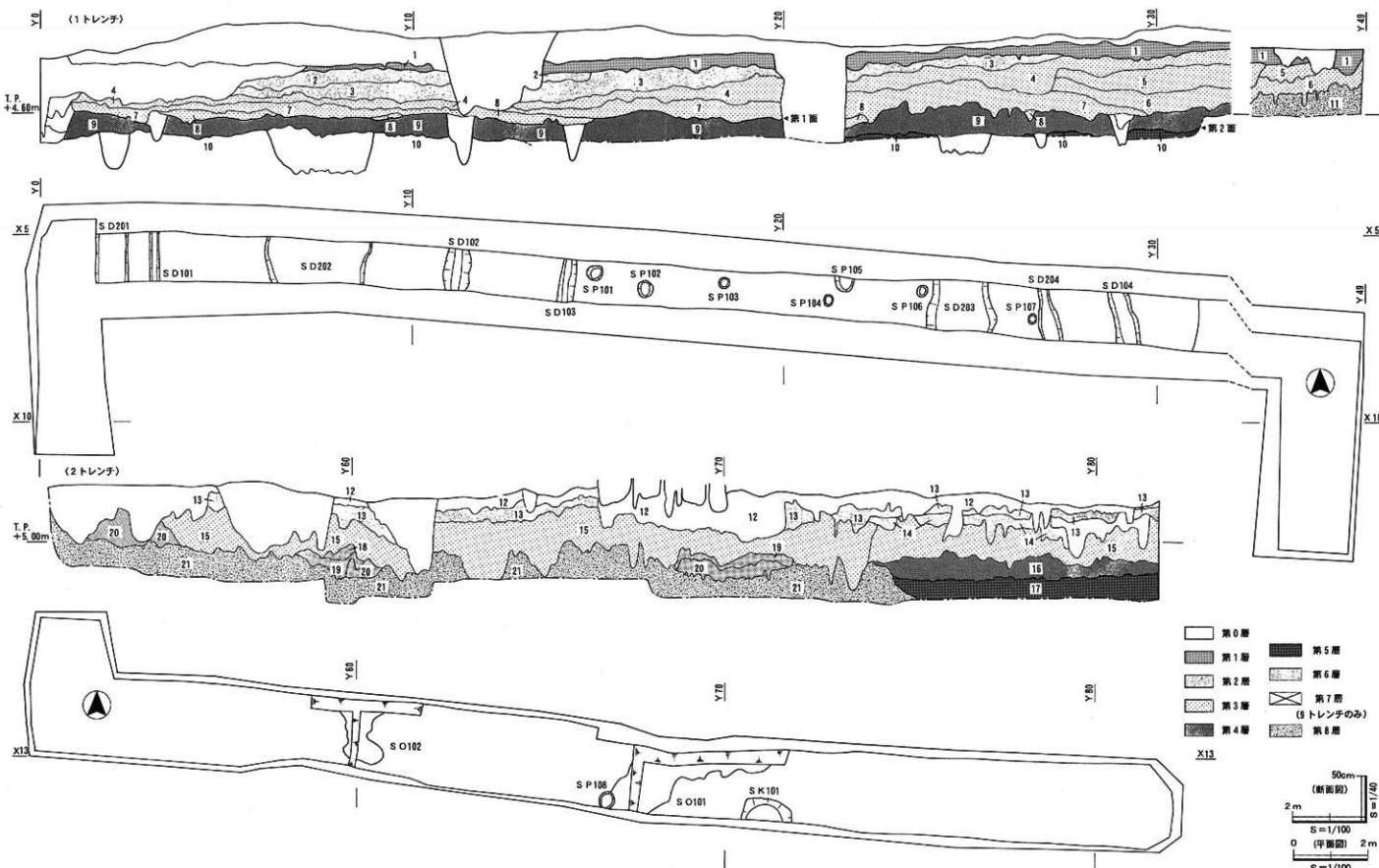
郡庵寺創建時期に相当する可能性も考えられる。

第7層：上部の土壌化が顕著に見られる層。土質は灰色粗砂～中砂混じりシルトである。層厚10cm前後を測る。当該層は9トレンチでのみ確認できた。遺物等は確認できなかったが、これまで行われた周辺の調査成果(1-2章第1表④⑤)より、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構が検出された基盤層と対応する可能性が高い。

第8層：古墳時代初頭の自然(流水による)堆積層。土質は黒褐色礫(径～1.5cm)混じり粗砂である。部分的に水平方向に入るラミナが認められ、ローリングを受けた古墳時代初頭の土師器片を多量に包含する。層厚10～40cm以上を測る。当該層は、1トレンチ北東半、2トレンチ(北東端を除く)、6～8トレンチで確認できた。当該層は、北西から南東にのびる微高地状の高まりを形成していたと推測できる。

表1 1・2トレンチ地層観察表

1トレンチ		2トレンチ
第0層	盛土	2.5Y3/2黒褐色粗砂まじり細砂と、2.5Y4/2暗灰黄色粗砂まじり細砂(径～0.3cm大の礫少量入る)が混ざる→旧表土
第1層	1 2.5Y3/1黒褐色礫(径～0.5cm大)～粗砂まじり細砂	/
第2層	2 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂まじり極細砂(径～0.5cm大の礫少量入る)	2.5Y5/3黄褐色粗砂～中砂まじり極細砂(径～0.5cm大の礫少量入る)
	3 10YR6/4にぶい黄褐色礫(径～0.3cm大)～粗砂まじり細砂、10YR8/2灰白色中砂まじりシルトがブロック状に混ざる	10YR4/2灰黃褐色中砂まじり極細砂(径～0.8cm大の礫が多量に入る)土師器片・瓦片入る
第3層	4 10YR2/2黒褐色粗砂まじり細砂(径～0.5cm大の礫が多量に入る)瓦・土師器片入る	10YR3/3暗褐色粗砂まじり極細砂(径～0.8cm大の礫が少量入る)瓦片・土師器片入る
	5 10YR5/3にぶい黄褐色礫(径～1.0cm)～粗砂まじり中砂～細砂 多量の瓦片入る	
	6 10YR6/4にぶい黄褐色粗砂まじり極細砂(径～1.0cm大の礫多量に混ざる)5より多量の瓦片入る。多量の土師器片入る	
	7 10YR3/2黒褐色中砂まじり極細砂～シルト(径～0.3cm大の礫が多量に入る)土師器片入る	
	8 10YR7/3にぶい黄褐色粗砂まじり極細砂	
第4層	9 10YR4/2灰黃褐色粗砂まじり極細砂(径～0.3cm大の礫が少量混ざる)	10YR3/2黒褐色中砂まじり細砂に、10YR4/3にぶい黄褐色中砂～粗砂まじり極細砂(径～0.8cm大の礫が多量に入る)が混ざる
第5層	10 10YR4/2灰黃褐色中砂まじり細砂に、2.5Y5/2暗灰黄色粗砂まじり細砂がブロック状に混ざる(径～0.5cm大の礫が少量混ざる)	5Y4/1灰色粗砂まじり中砂(径～1.0cm大の礫が多量に入る)多量のFeが硬化。須恵器・瓦器片入る
第6層		10YR4/3にぶい黄褐色礫(径～0.5cm大)～粗砂まじり極細砂
		10YR7/6明黄褐色粗砂まじりシルト(径～0.3cm大の礫が少量混ざる)土師器片少量入る
		10YR5/4にぶい黄褐色粗砂まじり細砂～極細砂(径～0.5cm大の礫が微量に混ざる)土師器片少量入る
第8層	11 10YR3/3暗褐色礫(径～0.5cm大)～粗砂まじり細砂に、10YR4/4褐色中砂まじり極細砂が入る	7.5YR3/2黒褐色礫(径～1.5cm)まじり粗砂 古式土師器片入る



第4図 1・2トレンチ平面図・断面図

第3節 検出遺構と出土遺物の概要

<1 トレンチ>

1 A～E・2 E地区に、長さ48m、幅1.5mを測るトレンチを東西方向に設定した。トレンチの平面形態は、西端と東端が南方向に屈曲し、「コ」の字を描く。調査は、現地表面から約90cmまで機械掘削し、人力掘削は、工事掘削深度の違いから、西端～31m地点までは約30cm、31m地点～東端までは約10cm地点まで行った。

第0層の盛土及び、第1層の旧耕作土と第2層の床土を除去すると、中世以降に構築された整地層(第3層)を確認した。この整地層は、堅くしまっており、瓦の破片をはじめ、土器や須恵器の細片を包含する。砂の粒子の違いや包含する遺物量などから、5層以上に分層できる。ただし、当該層の包含する遺物を観察したところ、時期に隔たりではなく、ほぼ同時期の製地土層と考えられる。中世以降に当該地域一帯で、大規模な整地を行ったものと推測できる。

第1面

中世以降に比定できる瓦器や瓦を多量に包含する整地層(第3層)を全て除去したところ、平安時代後期～鎌倉時代前期に比定できる溝4条(S D101～104)や、小穴7個(S P101～107)を検出した。現地表面下約0.8m(T.P.+4.0m前後)地点に広がる。当該遺構面は、当該調査地西端から34m地点を境として東側では、確認できなかった。おそらく鎌倉時代以降に行われた整地等の地形改変によって、遺構を構築していた面が削平されたものと考えられる。

以下、当該遺構面を「第1面」と呼称し、検出した各遺構の概要と、出土した遺物について概観する。

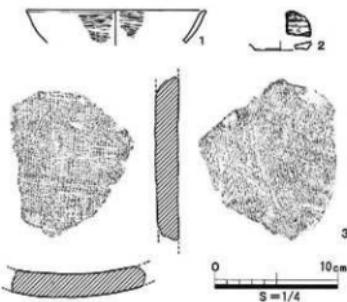
溝(S D)

S D101～104(第5・6図、図版二・七)

S D101～104は共に、黄灰色砂層の單一層の埋土をもつ。これらの溝は、S D101が幅34cm・深さ17cm、S D102が幅78cm・深さ53cm、S D103が幅56cm・深さ38cm、S D104が幅73.5cm・深さ34cmを測る。比較的小規模な大きさであり、全て南北方向に並列する。調査範囲が狭小である為、溝の性格を断定することはできなかったが、溝の規模や包含する埋土から、過去に行った近隣の調査(I-第2章第1表④・⑤)で検出した溝と同じように、住居などに関連する排水路及び、区画溝的な役割をもつものであった可能性が高い。

各溝からは、土器・瓦器・瓦などの破片が少量出土した。なおここでは、残存状態の比較的良好な遺物を図化した。

S D102では、土器皿・瓦器椀・平瓦の破片が少量出土した(1～3)。1は瓦器椀の口縁部であり、復元口径14.5cmを測る。調整は比較的丁寧な水平方向のヘラミガキ調整を施す。尾上編年のは和泉型II-2・3期(12世紀中葉)に比定できる。2は瓦器椀の底部であり、復元底部径4.2cmを測る。見込みに平行線状の暗文を施す。和泉型III-2期(12世紀後葉)に比定できる。3は平瓦の



第5図 1トレンチ S D102出土遺物実測図

破片であり、焼成は良好。成形および調整は、凹凸面ともにナデにより仕上げるが、凹面に布目痕、凸面に縄目痕を残す。

S D 103では、土師皿・瓦器椀・平瓦・丸瓦の破片が少量出土した(4~11)。4は土師皿の口縁部であり、復元口径14.0cmを測る。手づくねで作られたもので、口縁端部は外反する。時期は12世紀中葉に比定できる。5・6は瓦器椀の口縁部であり、復元口径13.8cmを測る。5の調整は丁寧な水平方向のヘラミガキを呈する。和泉型I-3期(11世紀後葉~12世紀初頭)、和泉型III-2期(12世紀後葉~13世紀初頭)にそれぞれ比定できる。7・8は瓦器椀の底部であり、高台が若干小さくなる。和泉型III-2期(12世紀後葉~13世紀前葉)に比定できる。9~11は丸瓦・平瓦の破片であり、焼成は良好。成形及び調整を見ると、10は凹面に布目痕を残す。凸面は、縄目痕をナデにより消す。広端面にケズリを施す。11は凹面に布目痕、凸面に縄目痕を残す。

これらの出土遺物から、第1面で検出した造構群は、13世紀前葉には廃絶期を迎えたと推定できる。

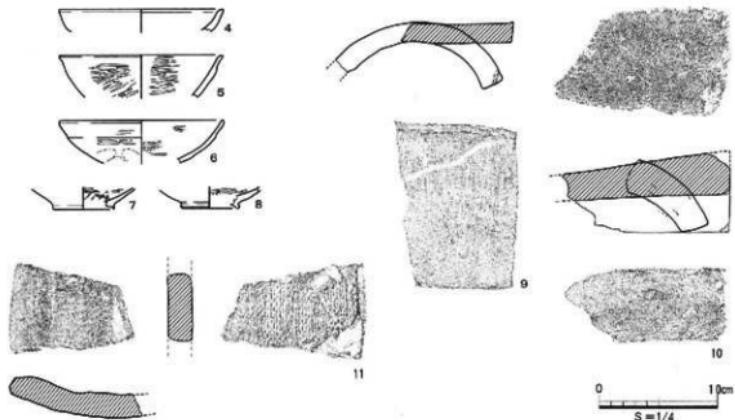
小穴(S P)

S P 101~107

S P 101~107は、平面形態がすべて円形であり、直径30~50cm、深さ10~30cmを測る。柱痕等は見られず、埋土は灰色粗砂混じり細砂に、暗灰黄色中砂混じり極細砂がブロック状に混ざる(径~0.5cm 大の礫が少量混ざる)單一層であった。各小穴からは、平瓦の破片が出土するのみであった。今回の調査では、調査範囲が狭小であった為、検出した小穴の性格を明らかにすることはできなかった。

第2面

「第1面」を構築する第4層を除去した面(第5層上面)で、4条の溝(S D 201~204)を検出した。現地表面下1m前後(T.P.+4.0m前後)の地点に広がる。当該造構面も第1面と同様に、当該調査



第6図 1トレンチSD 103出土遺物実測図

地西端から34m地点を境として東側では確認できなかった。おそらく鎌倉時代以降に行われた整地等の地形改変が当該面まで及び、造構を構築していた面が削平されたものと考えられる。

以下、当該造構面を「第2面」と呼称し、検出した各造構の概要と、出土した遺物について概観する。

溝(S D)

S D201・203・204(第7図)

S D201・203・204は共に、黄灰色粗砂混じり細砂に灰白色細砂混じりシルトがブロック状に混ざる單一層の埋上をもつ。溝の規模は、S D201が幅85cm・深さ40cm、S D203が幅146cm・深さ23cm、S D204が幅36cm・深さ15cmを測る。第1面同様に、全て南北方向に並列する。調査範囲が狭小である為、溝の性格を断定することはできなかった。

各溝からは、土師器・瓦器・瓦などの破片が微量に出上した。なおここでは、残存状態の比較的良好な遺物を図化した。

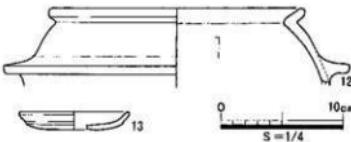
S D201では、土師皿・瓦器椀(・平瓦)の破片が少量出上した(12・13)。12は羽釜の口縁部であり、復元口径は20.3cmを測る。森島編年A型式(12世紀中葉～後葉)に比定できる。13は上師皿の口縁部であり、復元口径は18.9cmを測る。12世紀中葉に比定できる。

S D202(第8～12図、図版二・七～九)

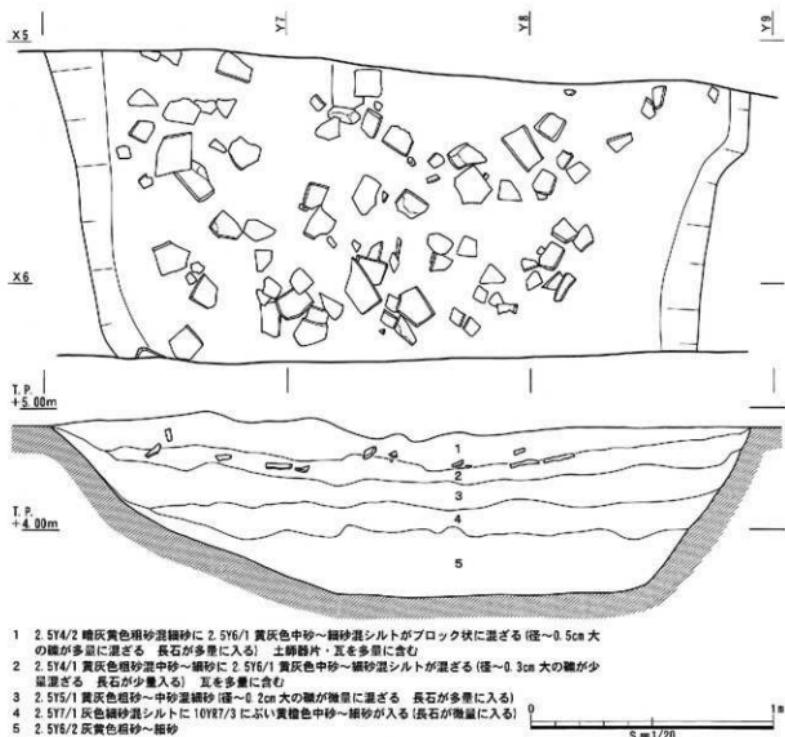
S D202は、幅2.71m、深さ0.68mを測る(第8図)。当初、丸瓦と平瓦の破片が重なった状態で多量に出土したことから、土坑または井戸に、不要となった瓦を廃棄したものと考えた。しかし、掘削を行った結果、南北方向に伸びる溝であることが判明した。

埋土は大きく5層に分けることができる。埋土1・2は丸瓦と平瓦の破片を多量に包含する埋土で、瓦廃棄時に堆積したものと推察できる。埋土1は暗灰黄色粗砂混じり細砂に、黄灰色中砂混じりシルト(埋土2)がブロック状に混ざる。埋土3は黄灰色粗砂～中砂混じり細砂。埋土4は灰色細砂混じりシルト(第6層)に、にぶい黄橙色中砂～細砂(第7層)が入る崩壊上層である。埋土5は灰黄色粗砂～細砂。水平方向にラミナが確認できる流水堆積層で、溝の機能時に堆積した埋土と推察できる。以上のことから、当該溝は、当初自然流路として当該トレーンチを分断していた(埋土4・5)が、その後、区画等の人为的利用で利用していた可能性が考えられる。そして溝の廃絶期に不要になった瓦などを廃棄した(埋土1・2)と推測できる。

当該溝からは、土師器・須恵器・瓦器などの土器が少量と、瓦の破片が多量に出土した。なおここでは、残存状態の比較的良好な遺物を図化した(14～39)。14～18は「て」の字状口縁をもつ上師小皿である。復元口径8.7～11.1cm前後で、器高1.4cm前後を測る。外反する口縁部をもち、端部を内湾させて丸める。調整は内外全体にナデを施す。14は外面部下半部に指頭圧痕が見られる。器壁は2mm前後で薄い。色調は灰白色。15は浅黄橙色、16～18は灰白色。12世紀前葉に比定できる。19は土師皿の口縁～体部で、復元口径13.4cm、器高2.9cmを測る。調整は全体に指ナデを施し、体部下半には指頭圧痕が見られる。色調は浅黄橙色。12世紀前葉に比定できる。20

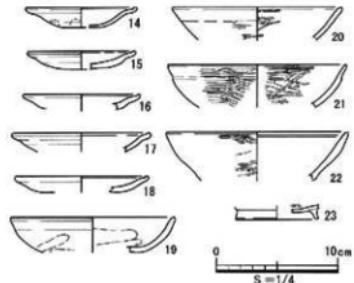


第7図 1トレーンチ S D201出土土器実測図

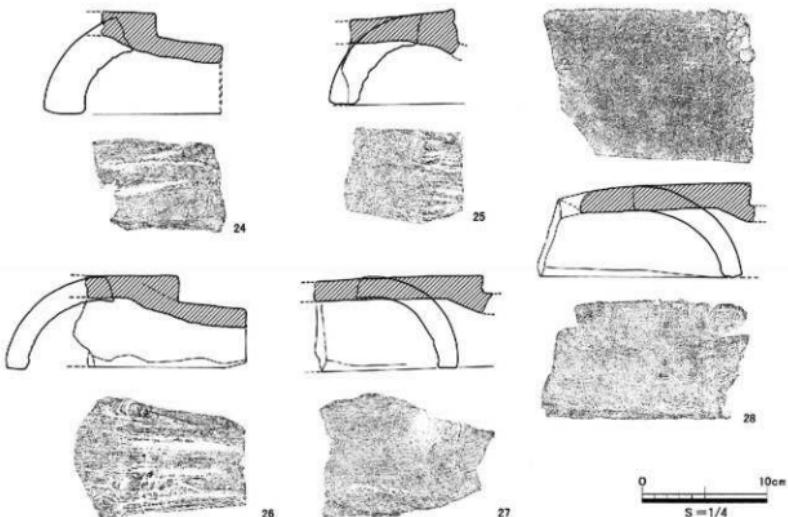


第8図 1トレンチSD 2022平面図・断面図

～22は瓦器椀の口縁部で、復元口径14cm前後を測る。20は和泉型II-1期。21・22は和泉型I-3期。23は瓦器椀の底部で、底径6cm前後を測る。以上のことから、当該溝は12世紀前葉には廃絶期を迎える。



第9図 1トレンチSD 2022出土遺物実測図



第10図 1トレンチ S D 202出土丸瓦実測図

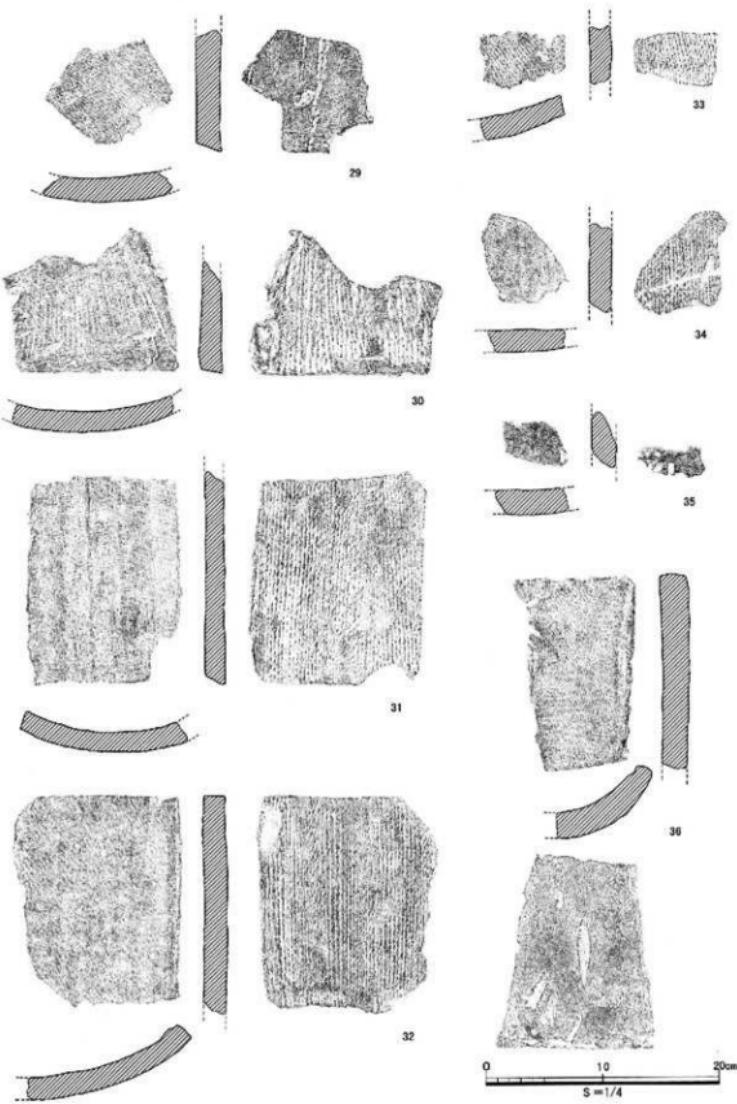
て観察する。33・37は凹面に布目痕を残す。凸面はナデにより仕上げるが、繩目痕を残す。38は凹面はナデにより仕上げるが、布目痕が残る。凸面に繩目痕を残す。30～32・34・39は凹凸面とともにナデにより仕上げるが、凹面に布目痕、凸面に繩目痕を残す。29・35は、凹面はナデにより仕上げるが、布目痕が残る。凸面は、繩目痕をナデにより消す。なお31・32・35～39には桶枠痕を認める。34・36には糸切り痕が確認でき、成形時に粘土板を使用していたことが推定できる。

<2トレンチ>(第4図、図版一・四)

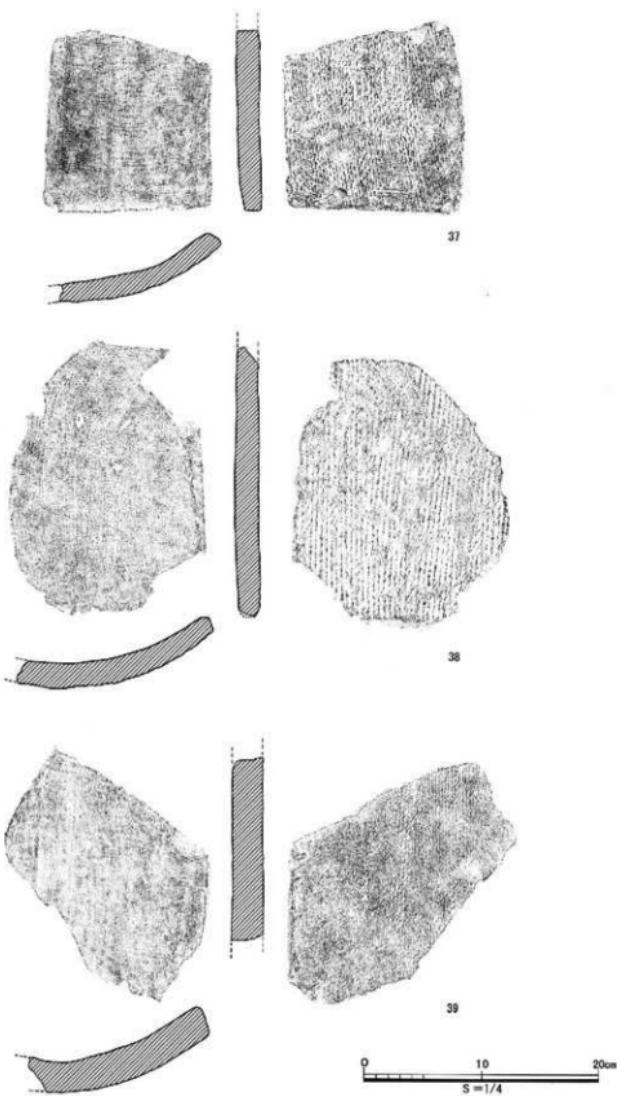
2F～I地区に長さ26.8m、幅0.9mを測るトレンチを設定した。トレンチの平面形態は、西端が北方向に屈曲し、「逆L」字を描く。調査は、現地表面から約60～70cmまで機械掘削し、人力掘削は、約40cmに至る。第0層の盛土及び、第1層の旧耕作土と第2層の床土を除去すると、中世以降に構築された整地層(第3層)を確認した。この整地層は、1トレンチと同様に堅くしまっており、多量の遺物を包含する。

第1面

中世期以降に比定できる瓦器や瓦を包含する整地層(第3層)を全て除去したところ、西端から20m地点を境として東側では、第3層直下に第4層、統いて第5層の堆積を確認したが、遺構等は検出できなかった。西端から20m地点では、第3層直下に第4・5層の堆積は確認できなかつたが第3層除去面で、土坑(S K101)、小穴(S P108)、落込み状遺構(S O101・102)を検出した。中世以降に行われた整地等の地形変更によって遺構を構築していた面が削平されたが、かろうじて、当該遺構部分が残存していたものと考えられる。ただし、残存状態が悪かった為、これらの遺構の性格は分からなかった。以下、遺物が多量に出土したS K101について概観する。



第11図 1トレンチSD202出土平瓦実測図(1)



第12図 1トレンチSD202出土平瓦実測図(2)

土坑(SK)

S K101(第13・15図、図版四・一〇)

S K101は、径1.38m以上、深さ13cm以上を測る。埋土が確認できたのは1層であり、遺構上部は、後世の攪乱によって破壊されていた。

当該土坑からは、土師器・瓦器碗・須恵器・土師質土器・瓦質土器や、瓦の破片が出土した。なお、ここでは残存状態の比較的良好な遺物を図化した(40~53)。40は土師皿の口縁部で、復元口径16.8cm、残存器高3.3cmを測る。調整は内外面全体にナデ調整を施す。外面体部下半に指頭圧痕が見られる。色調はにぶい橙色。焼成は良好。41は瓦器碗の底部で、復元底部径6.6cmを

測る。調整は見込みに平行線状の暗文を施す。42は東播系須恵器の片口鉢である。時期は吉岡編年第II期第2段階(12世紀末葉~13世紀初頭)に比定できる。43~45は瓦質土器の鉢と火鉢である。時期は15世紀に比定できる。46~50は土師質の羽釜で、時期は14世紀前葉~15世紀後葉に比定できる。51は連珠文軒平瓦で、時期は13世紀後葉に比定できる。52は平瓦の破片で、成形及び調整は、四面はナデにより仕上げるが、布目痕を残す。凸面は摩滅が著しい為調整不明瞭。53は鬼瓦の破片で、右目がほぼ全部と歯の一部分が唯一残る。おそらく法隆寺編年の室町時代前期II~中期I(14世紀中葉~15世紀前葉)に比定できる。

これらの遺物から、当該土坑は15世紀後葉には廃絶期を迎えたと考えられる。1トレンチの調査成果と比較検討した結果、1トレンチの第1面以降に形成された遺構である可能性が高い。

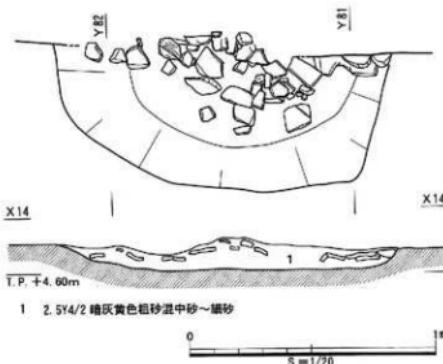
<3トレンチ>(第14図、図版四・一〇)

2C地区に東西0.9m、南北0.8mの方形を呈するトレンチを設定した。T.P.+5.2m地点に位置し、掘削深度は1.1mを測る。第0層及び、第1層を除去すると、上から順に第3~5層の堆積を確認したが、遺構は確認できなかった。

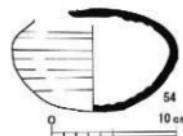
遺物は、トレンチ最下部(第5層)から出土した須恵器平瓶(54)の1点であり、ほぼ完形の状態で出土した。出土状況はトレンチ底部(砂層上面)に埋没した状態で出土した。調整は外面底部に板状工具によるナデの痕跡がみられる。7世紀に比定できる。なおトレンチ底部で確認できた砂層は第8層に対応するか否かは判断できなかった。

<4トレンチ>(図版五)

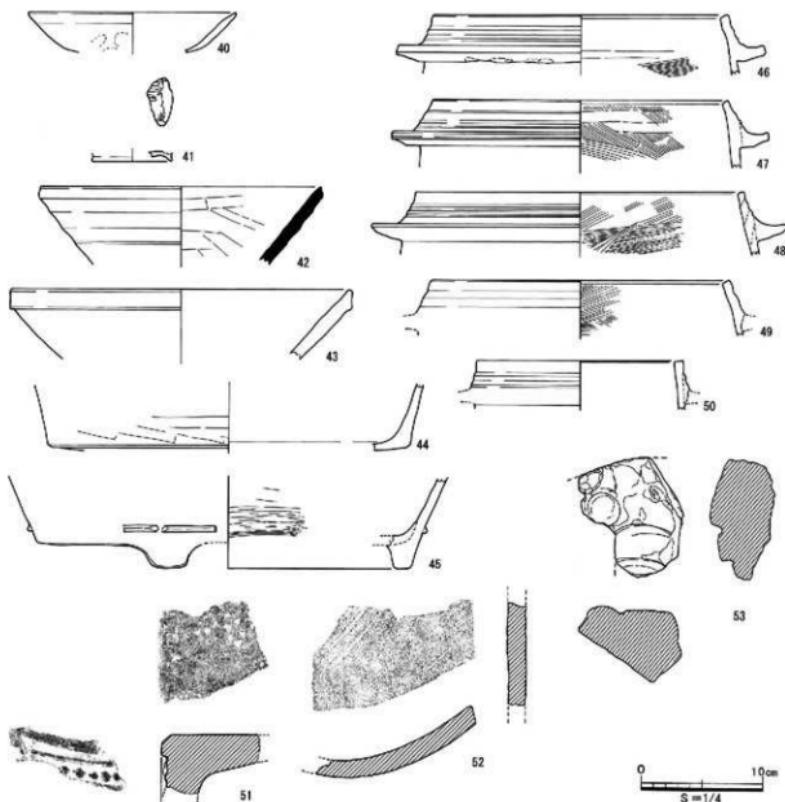
2A地区に東西1.4m、南北0.8mの方形を呈するトレンチを設定した。T.P.+5.0m地点に位置し、掘削深度は1.0mを測る。第0層及び、近世~近代の堆積土層を除去すると、瓦や須恵器の細



第13図 2トレンチSK101平面図・断面図



第14図 3トレンチ出土遺物
実測図



第15図 2トレンチSK101出土遺物実測図

片を包含する層が確認できた。第4層または第5層に相当する層と推測できる。遺構は確認できなかった。

<5トレンチ>

2C地区に東西0.9m、南北1.1mの方形を呈するトレンチを設定した。T.P.+5.2m地点に位置し、掘削深度は1.1mを測る。攪乱及び、客土等を除去すると、T.P.+4.3~4.4m地点で染付け碗の破片を包含する近世以降の耕作土層(第1層)の堆積を確認した。遺構は確認できなかった。当該トレンチは、今回の調査地の中で最も低地部に該当する。

<6トレンチ>(図版五)

2F地区に東西2.1m、南北0.8mの方形を呈するトレンチを設定した。T.P.+5.4m地点に位置し、掘削深度は1.1mを測る。攪乱及び、第1・2層を除去すると第3層を確認した。これらを除去す

ると、第3層直下に土師器や須恵器の細片を包含する層が確認できた。第4層または第5層に相当する層と推測できる。下層部には第8層の堆積が確認できた。遺構は確認できなかった。

< 7 レンチ > (図版六)

2G 地区に東西1.3m、南北0.6mの方形を呈するレンチを設定した。T.P. +5.4m地点に位置し、掘削深度は1.2mを測る。客土層を除去すると、第3層を確認した。これらを除去すると、褐色粗砂混じり中砂と、暗褐色礫(径~0.5cm大)混じり中砂~細砂が混ざる土層を確認できた。8トレンチ調査の成果より、第8層に相当する層と推測できる。遺構・遺物は確認できなかった。

< 8 レンチ >

2H・I、3H・I 地区に東西1.2m、南北0.6mの方形を呈するレンチを設定した。T.P. +5.3m地点に位置し、掘削深度は1.2mを測る。層厚80cmに及ぶ客土層を除去すると、第8層の堆積が唯一確認できた。

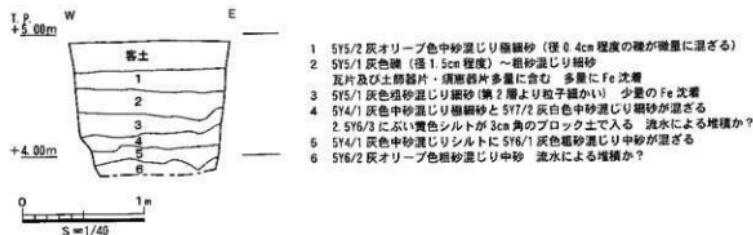
< 9 レンチ > (第16・17図、図版六・一〇・一一)

2I 地区に東西1.3m、南北0.5mの方形を呈するレンチを設定した。T.P. +5.0m地点に位置し、掘削深度は1.1mを測る。第0層(第16図-1)及び、第3層(第16図-2)を除去すると、灰色礫(径~1.5cm)~粗砂混じり細砂である層を確認した。当該層は多量の土師器・須恵器や、平瓦の細片を包含する層であった。層厚20cm前後を測る。なお、当該層の直下層も同様の上質であることから、ほぼ同時期に両者が堆積したものと考えられる。当該レンチの調査面積が狭小であつたことから、遺構内埋土の可能性もあるが、「第6層(第16図-3・4)」と呼称した。以下、当該層から比較的まとまって出土した平瓦について概観したい(第17図)。当該層から出土した平瓦(55~62)は全て、凹面に布目痕及び桶枠痕を残す。凸面に格子タタキを施す。時期は7世紀前~中期に比定できる。

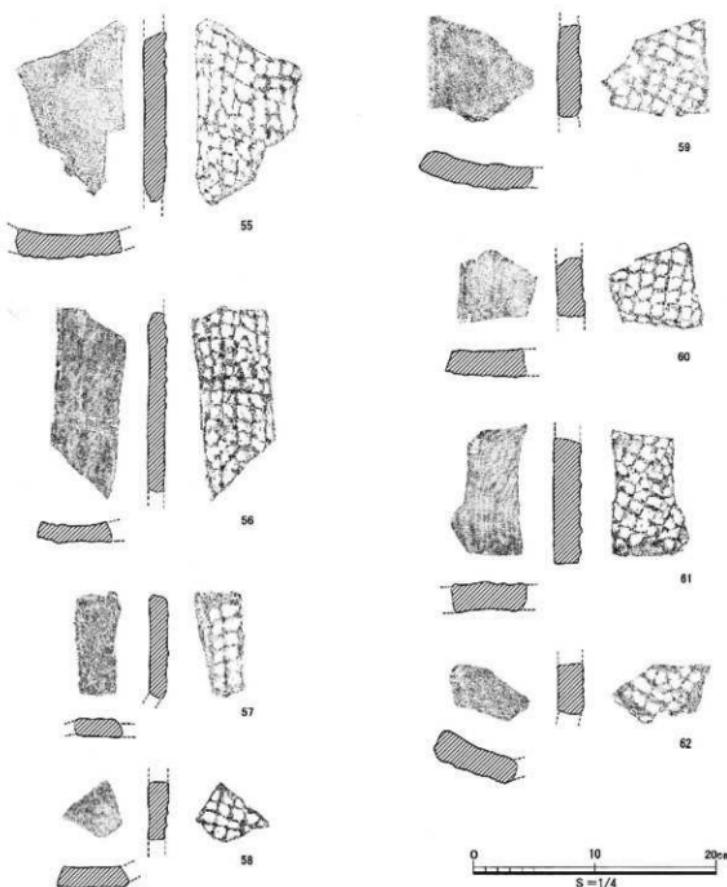
第6層を除去すると、灰色中砂混じり極細砂と、灰白色中砂混じり細砂が混ざる(にぶい黄色シルトがブロック土で入る)自然堆積層がみられ、統いて土壤化の広がる灰色中砂混じりシルトに、灰色粗砂混じり中砂が混ざる層を確認した。当該層は他のトレンチ調査では確認できなかった土層であり、新たに「第7層(第16図-5)」と呼称した。なお、調査面積が狭小である為、当該層上面で遺構等は確認できなかった。

第7層を除去すると、灰オリーブ色粗砂混じり中砂層を確認した。当該層は1・2・6~8トレンチでも確認できた第8層(第16図-6)と推察できる。

以上のように、当該レンチで確認した層序が、他のトレンチの層序と大きな違いがあることから、当該レンチを基点として、東西では様相が大きく異なることが推察できる。



第16図 9 レンチ北壁断面図



第17図 9トレンチ出土遺物実測図

<10~13トレンチ>

3 I、2・3・4 J 地方にそれぞれ約1mの方形を呈するトレンチを設定した。T.P.+5.0m前後に位置し、掘削深度は約1mを測る。10~12トレンチは、既存の会所樹設置場所と重複する為、既にトレンチ内は攪拌され、造構面及び包含層は遺存しなかった。13トレンチは、下水管が既存する為、掘削深度が当初の設計よりも浅く、造構面及び包含層まで及ばなかった。

第3章 まとめ

今回の調査では、調査地西側から中央部に位置する1～8トレンチと、東側に位置する9トレンチで確認した地層の堆積状況が大きく異なることが判明した(第3図参照)。1～8トレンチでは、第3層直下に第4・5層は確認できたが直下に、第6・7層は見られず、第8層を確認した。9トレンチでは、第3層直下に第6～8層を確認した。ではなぜこのような結果が得られたのであろうか。既往の調査成果を踏まえて検討したい。

地層の堆積状況の違いは、第8層の自然堆積層が大きな影響を及ぼしていると推察できる。おそらく、第8層が形成した地形の高まりが、後世の土地利用に大きな影響をもたらしたものと推測できる。以下、今回の調査地及び近隣の調査地で確認できた第8層相当層上面の標高値を調べた。1・2・6～8トレンチではT.P.+4.4～4.7m、9トレンチではT.P.+3.9m前後を測る。近隣の調査をみると、⑨がT.P.+4.9m前後を測る。また、④はT.P.+4.0m以下、⑤はT.P.+4.0m前後、⑦はT.P.+4.0m前後、⑪はT.P.+3.5m前後、⑯はT.P.+3.8m以下を測る。このような結果から、1・2・6～8トレンチ・⑨のT.P.+4.4m以上、9トレンチ・④・⑤・⑦・⑪・⑯のT.P.-4.0m以下に大別できる。これらの位置関係をみると、前者は南北にはしる「河内街道」の西側、後者は街道の東側地域に位置することが判明した。

以上より、第8層の自然堆積層が形成した地形が後世の土地利用に長く影響をもたらしたことは確かであり、街道より西側地域では、第8層上面の標高が高い箇所であった為、後世の削平によって、第6・7層が確認できなかったものと考える。

今回の調査では、西郡廃寺に直接関連する遺構や遺物は出土しなかったが、第3層の中世整地層からコンテナ約8箱に及ぶ瓦の破片が出土したことから、近隣に西郡廃寺が存在したことは明確である。また当調査地で平安時代末期から鎌倉時代前期の遺構を検出したことから、西郡廃寺廃絶以降も長い期間にわたって集落が存続していたことが判明した。

註1 ○番号は、I～第2章第1表参照。

註2 桶橋1989より、河内街道と直交する街道である「十三街道」が『聖徳太子伝私記』の「長野耶路」にあたることから、すでに古代には存在したことが推測できる。

註3 9トレンチは正確に言えば「河内街道」内に位置する為、ここでは街道東側地域の資料として④KF84-1を参考にしたい。

註4 ここで言う「後世」とは、西郡廃寺創建時に相当する可能性もある。

参考文献

- 上田 隆1987『藤井寺市及びその周辺の古代寺院(上)』藤井寺の遺跡ガイドブック No.2 藤井寺市教育委員会
尾上 実・森島康雄・近江俊秀1995『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
古代の土器研究会編1992『古代の上器Ⅰ都城の土器集成』
古代の土器研究会編1993『古代の土器Ⅱ都城の土器集成』
櫛橋利光1989『河内中北部の街道(東西道)』『奈良街道』歴史の道調査報告書第四集 大阪府教育委員会
坪田真一2004「第5章瓦について」「浜川廃寺」(財)八尾市文化財調査研究会報告79(財)八尾市文化財調査研究会
奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第32冊
法隆寺町和資財帳編集委員会1992「鬼瓦」「法隆寺の半寶 第15巻五—昭和資財帳—」
清 球1995「東都廃寺発掘調査報告」「八尾市文化財紀要7」八尾市教育委員会文化財課
森 伸人1986『瓦』ニューサイエンス社
八尾市史編集委員会1983『八尾市史(近代)本文篇』
八尾市史編集委員会1988『八尾市史(前近代)本文編』

図 版



1 トレンチ全景(東から)



2 トレンチ全景(西から)



1 トレンチ第1・2面
遺構検出状況(南東から)

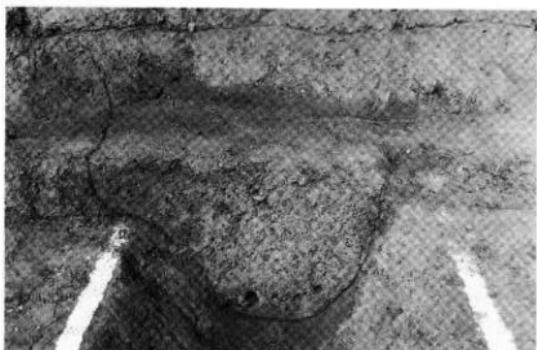


1 トレンチ第2面
SD 202検出状況(北西から)



1 トレンチ第2面
SD 202断面(南西から)

図版三



1 トレンチ第1面
S D 103検出状況(南から)



1 トレンチ第1面
S D 102検出状況(南から)



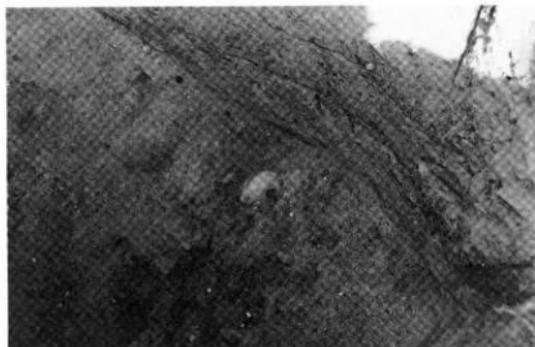
1 トレンチ第2面
S D 201検出状況(南から)



2 トレンチ第1面
遺構検出状況(南西から)



2 トレンチ第1面
SK101検出状況(北東から)



3 トレンチ第5層内
土器出土状況(南東から)

図版五



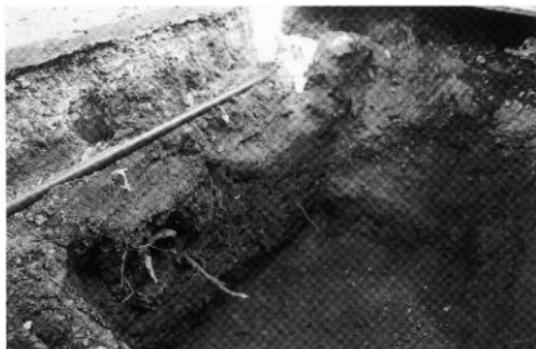
4トレンチ
西壁断面(南東から)



6～10トレンチ
遠景(北西から)



6トレンチ
北壁断面(南東から)



7 トレンチ
北壁断面(南西から)

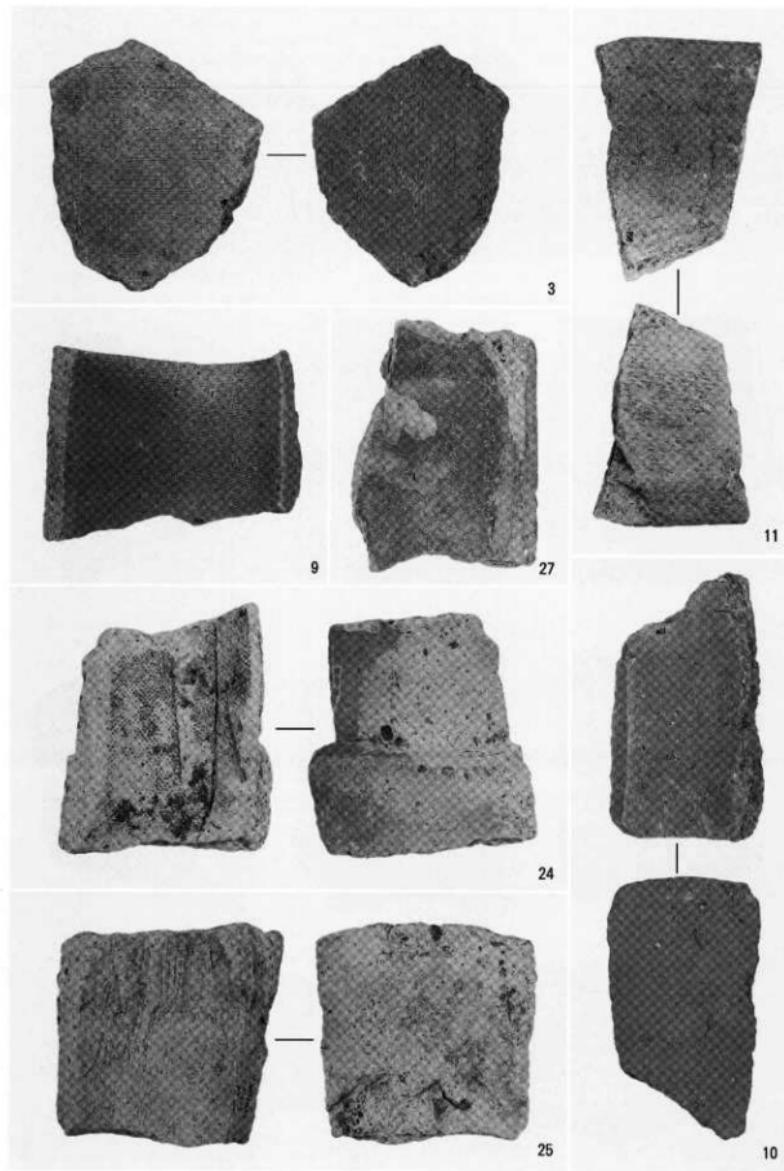


9 トレンチ
南-西壁断面(北東から)

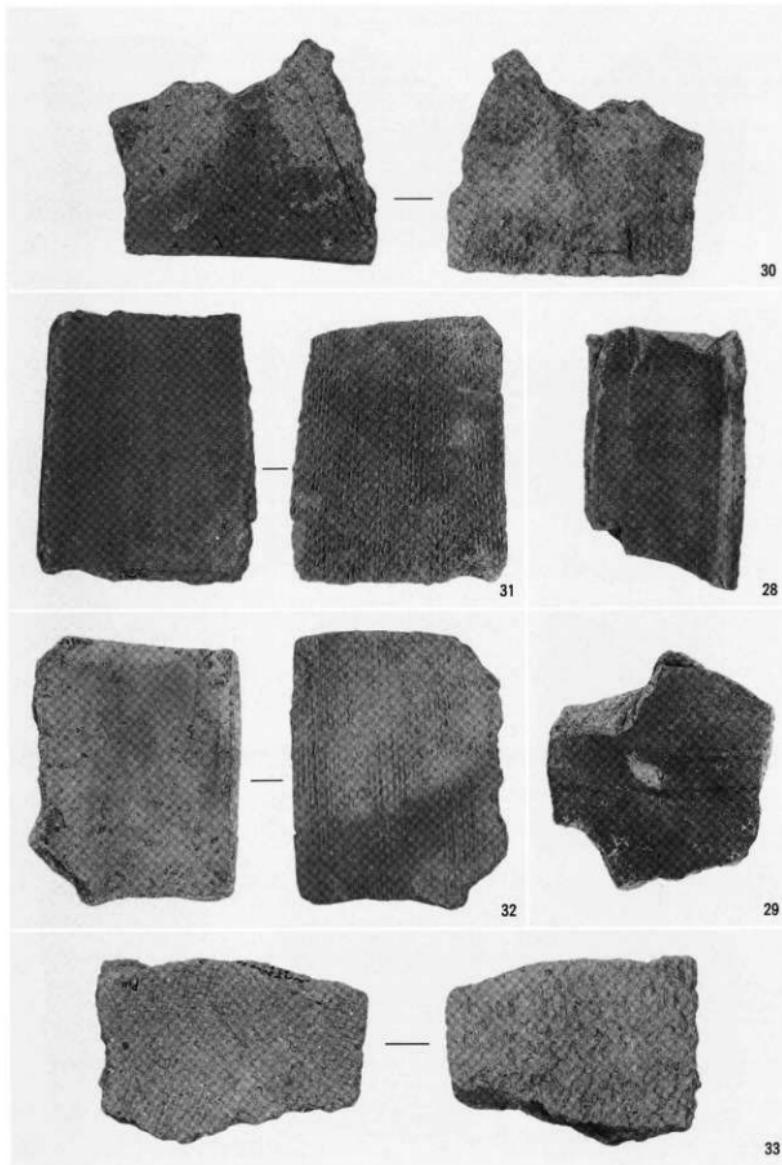


9 トレンチ
北壁断面(南から)

図版七

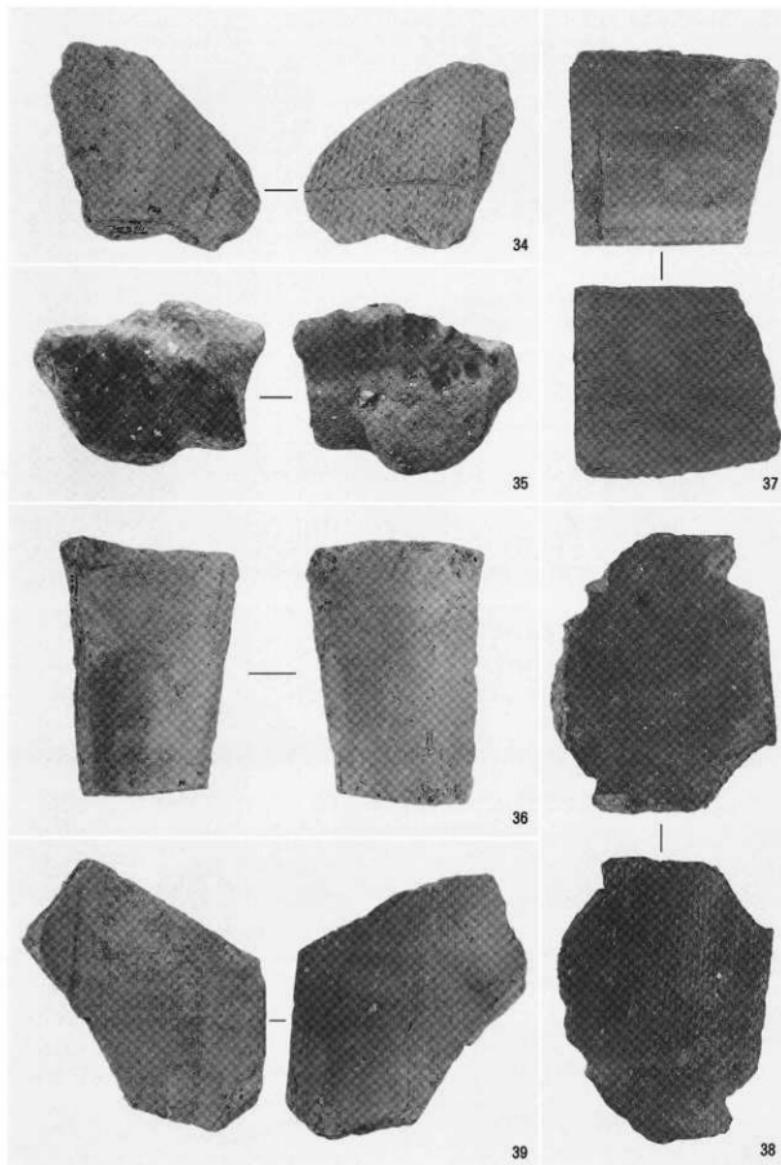


1 トレンチ S D103(3・9~11)、S D202(24・25~27)出土遺物



1 トレンチ S D202(28~33)出土遺物

図版九



1 トレンチ S D 202(34~39)出土遺物



54



51



—



55



53



42



43



47



45



46



44



48

3 トレンチ第5層(54)、2トレンチSK101(42~48・51・53)、9トレンチ第7層(55)出土遺物

図版
一



56



57



58



60



59



61



62

9 トレンチ第7層(56~62)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく95					
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告95					
副書名	I 荘振遺跡(第16次調査) II 西都庵寺遺跡(第2次調査)					
巻次						
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告					
シリーズ番号	95					
編著者名	I 原山昌朗 II 河村恵理					
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会					
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市守町4丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700					
発行年月日	西暦2007年3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
かやふりいせき 荘振遺跡 (第16次調査)	おおさかみ やおし 大阪府 八尾市 桂町2丁目3	27212	65	34° 38° 36°	135° 36° 35°	19940517 19940802
にしごおりはいじいさき 西都庵寺遺跡 (第2次調査)	おおさかみ やおし 大阪府 八尾市 泉町2丁目 地内	27212	89	34° 38° 38°	135° 36° 28°	20050920 ~ 20051121
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
荘振遺跡 (第16次調査)	集落	古墳時代初頭後半～ 前期後半(庄内式新相 ～布留式新相)	井戸・土坑・溝	古式土器・石製品		
		古墳時代後期	掘立柱建物・土坑・溝	土器・須恵器・ 石製品(滑石製紡錘車)		
		奈良時代	井戸・小穴	土器・須恵器		
	平安時代後期～鎌倉時代後期	掘立柱建物・土坑・溝	土器・須恵器・ 瓦器・屋瓦			
		溝	土器・須恵器・ 瓦質土器・	西都庵寺に関連した 屋瓦が出上		
西都庵寺遺跡 (第2次調査)	集落	江戸	井戸・土坑・溝	土器・国産陶磁器・屋瓦・金属製品		
		平安時代後期～鎌倉時代前期	溝・小穴	土器・瓦器・屋瓦		
		室町時代	土坑	土器・須恵器・ 瓦器・瓦質土器・ 屋瓦		
要約	• 荘振16次調査では、古墳時代初頭から江戸時代に至る連続した集落の形成が認められた。平安時代後期から鎌倉時代後期の集落については、北接する十三街道との関連が推定される。 • 西都庵寺2次調査においては、寺院に関連する遺構は検出されていないが、屋瓦類が出土している。調査地の北方に近接した西都庵寺との関わりや、廃絶時期を推定するうえで貴重な資料と言えよう。					

財団法人八尾市文化財調査研究会報告95

I 萱 振 遺 跡(第16次調査)

II 西都廃寺遺跡(第2次調査)

発行 平成19年3月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581-0821 大阪府八尾市辛町4丁目58番地の2

TEL・FAX 072(994)-4700

印刷 服部印刷株式会社

〒578-0903 東大阪市今里1-16-1

TEL 072(961)-1634

表紙 レザック66(260kg)

本文 ニューエイジ(70kg)

図版 マットアート(110kg)

